

ハイっ！こちら営業部『サイラス私設傭兵部隊』課【30mm非公式小説】

あきてくと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【完結御礼】僕の名前は、某ロボットアニメの主人公と同じアムロ・レイ。サイラス私設傭兵に所属し巨大ロボット・エグザマクスに搭乗している。しかし、僕はエースパイロットではない。左遷先で名前負けに悩む僕の非日常的な日々は、突如現れたバイロン軍と称する正体不明の侵略者によって、さらなる非現実へと放り込まれる。もう一度言う、僕は英雄でもなければ、エースパイロットでもない。もう本当に勘弁してください（涙）。

※本作は『機動戦士ガンダム』のクロスオーバーや異世界転生ではありません。

●ガンダムでおなじみバンダイのプラモデルシリーズ『30 MINUTES MISSIONS』の前日譚にあたる二次小説。SFロボットアクション小説です。30MMのザックリとした公式ストーリーをベースに、「なぜ人型ロボットが必要か?」「なぜ容易に組み換えができるのか?」「なぜ異星の産物であるエグザマクスとポルトノヴァのパーツに互換性があるのか?」などのあらゆる疑問を考察・補完する内容です。

目次

プロローグ

第1話 ハイっ！ こちらアムロ・レイ（非クロスオーバー）

1

第2話 サイラス私設傭兵部隊（キャラクター紹介） 8

第3話 サイラス私設防衛部隊2（キャラクター紹介2） 17

第4話 エグザマクス（巨大人型ロボット技術解説） 22

第5話 ナイフとビールと霧と（傭兵の日常） 28

中東砂漠の戦闘編

第6話 出撃（各機体紹介） 34

第7話 戦場の霧（霧の戦闘） 40

第8話 アメリカ第9海外派遣中隊（ナインズ）（包囲網突破） 49

第9話 勇気と狂気の違いは（命令無視） 58

第10話 AI戦場カメラマンのホノカよりお伝えしますっ♪（戦

闘実況）

65

第11話 スカイフォール（緊急事態権限発令） 77

第12話 未確認巨大構造物（バイロン軍出現） 89

第13話 未知との遭遇（からの撤退） 96

第14話 隊長（第一部完） 106

閑話

第15話 戦場から逃れた船上のエリア（帰国①） 115

第16話 ムンバイ発成田着・国際線上の僕ら（帰国②） 123

千葉県騒乱編

第17話 イノウエ専務（表彰式典とスピーチ） 131

第18話	ただいまっ！ こちら安室家（家族団らん）	139
第19話	異星の異性による為政（伏線回収）	147
第20話	英雄爆誕、そして落胆（模擬戦結果）	160
第21話	Interlude（閑話）	174
宇宙での覚醒編		
第22話	宇宙（そら）へ（宇宙空間での迎撃戦闘）	179
第23話	半可臭え話（半覚醒の話）	191
最終話	ハイっ！ こちらサイラス私設傭兵部隊（出航）	202

プロローグ

第1話 ハイっ！ こちらアムロ・レイ（非クロスオーバー）

僕は天使を見たことがある。

天使は神話や伝承で伝えられるとおり純白の衣を纏い、大きな白い翼を広げ、神々しいまでの存在感を放っていた。

あの日、天使は空とともに降りてきた。空の青が粘度の高い液体のように垂れ落ちて霞ヶ浦の湖に注ぎ込む光景は、天上高くそびえる青い巨大な水柱のようだった。その柱の中を天使がゆつくりと降臨して、太陽光を浴びて輝きながら湖中へ消えていったのだ。

もう10年前の出来事だ。それでも僕はそのときの情景を鮮明に覚えている。

そのときの現象は、『スカイフォール』と呼ばれている。空が落ちたように見えたことに加え、湖の水が通常ではあり得ないほどに高濃度オゾン化していたからだ。それにより、湖に生息する生物は魚から微生物にいたるまですべて死滅した。あるいは天使の力によって浄化されたのかもしれない。

オゾン濃度は程なくして通常値に戻ったが、生態系が完全に破壊された霞ヶ浦は、10年経った今も生物が住めない死の湖になっている。原因は未だ不明。目撃者は多数いたはずなのに、天使が降臨したなどとはもちろん、未確認物体が落下したという報道は一切されていない。

ときどき、白昼夢だったのかもしれないと思う。しかし、そう思う度に、あの鮮やかなディテールに現実だという確信が湧き上がる。遠目で正確な大きさはつかめなかったけれど、天使はおよそ10m以上の巨体だった。

そう、ちょうど今僕が搭乗している人型巨大兵器エグザマクスのような。

《アムロ・レイ。意識レベルが低下しています。戦闘に集中してください》

抑揚のない女性の電子音声で僕はハッと我に返る。正確には、フルネームで呼ばれたことで現実を引き戻された。

「シズク、僕のごことはフルネームで呼ぶなど伝えていたはずだぞ」

《二度呼びかけても応答がありませんでしたので、もっとも確実な方法をとらせていただきました。マスター》

安室^{アムロ} 玲^{レイ}。それが僕の本名だ。著名ロボットアニメの主人公と同名同名。その事実は僕の幼心に小さくない傷をつくった。両親を恨んだこともあった。ましてや現在僕は人型巨大兵器エグザマクスに搭乗しているのだから、その関連性を問われれば僕は顔から火が出るほど恥ずかしくなる。もちろん僕はフルネームで呼ばれるのが大嫌いだ。だ。だ。だ。

「――それで、僕はどれくらい意識が飛んでいた？」

《その質問の意図は、時間についてでしょうか？ 意識レベルについてでしょうか？》

しまった。人工^A知能^Iであるシズクに曖昧な言葉づかいはNGだ。

「両方」

《時間にしておよそ30秒ほど。意識が飛ぶというほどのレベル低下ではありませんが、戦闘中にふさわしくないほどの惚けっぷりです》

シズクは、曖昧な言葉を指摘するほど厳格なAIのわりに『惚けっぷり』などと、気の利いた言葉を使う。彼女の語録は僕より5倍は豊富で、計算速度は僕の数千倍早い。

AIによる操縦インターフェースの補助は、人型巨大兵器エグザマクスを動かすうえでなくてはならない存在だ。もっとも、シズクは機体制御用ではなく支援用に搭載されるAIで、制御用AIは別に存在する。

制御・支援問わず、エグザマクスに搭載されるAIは、パイロットが話す自然言語を認識できるだけの機能があれば十分にシズクほど多弁である必要はない。だけど、僕の役職上、AIとのコミュニケーションが必要だから、あえて自然言語対話に特化したチューニングに

してある。

彼女が言うとおおり、僕は現在戦闘中だった。とはいえここは前線から遙か離れた後方であるため流れ弾すら飛んでこない。

眼前には、強い日差しに照らされた黄土色の砂と岩で覆われた砂漠広がり、地平の彼方は灼熱で揺らいで見える。

遠方の前線では、僚機のエグザマクスが敵対勢力である政府軍のエグザマクスと銃撃戦を繰り広げている。時折、鋭角的なディテールをしたエグザマクスの装甲板が太陽光を反射させて光った。それはまるで1/144スケール程度のプラモデル同士が動いているかのようだ。

同じ光景を1年間見続けても慣れることはない。一般的日常とはかけ離れた非現実的なその光景は精細に作り込まれた模型のジオラマを見ているような錯覚さえ覚える。エグザマクスのコックピット内にモニターの類は一切なく、これら外界の様子はすべてヘルメットのバイザーモニターに投影されていた。

それはちょうどVR産業の勃興期に登場したヘッドマウントディスプレイと、戦闘機のヘッドアップディスプレイを組み合わせたような構造だ。だからパイロットである僕からは身ひとつで荒涼とした砂漠に突っ立っているように見えた。

それらを背景にして、機体の各種制御データが表示された半透明の拡張現実^Aウィンドウが手の届きそうなところに浮かんでいる。複雑な構造を持つ人型巨大兵器を操るために参照しなければならぬデータは膨大だ。水平器・方位計、火器管制システム状況やバッテリー残量、動力伝達のモニターリングなどをはじめとする諸々の情報が戦闘視界を妨げないレイアウトで表示されていた。

小さくアラームが鳴った。外部の異常音を捕らえたシステムが音波波形モニターを自動でポップアップさせ警告を促す。

《敵長距離砲撃と思われる高熱源体接近。着弾まで5秒》

シズクが遅れて音声による警告を発した後、ロケット花火のような風切り音が僕の耳にも届いた。音量がピークまで達するとすぐさま爆発の閃光が瞬き、轟音と振動が身体の芯まで響く。

視覚に異常を及ぼすほどの光と、聴覚に悪影響があるほどの音は、瞬間的にシステムが自動でマスキングしてくれるが、爆発の振動と粉々になった岩盤が機体装甲を叩く音は直接振動となってコックピットまで届いた。

浮遊感とともに、ゴーグルの中を青空と白い雲が流れていく。それから、強い衝撃があつて地面に激突したことを察知した。爆風に煽られバランスを失った機体は仰向けに倒れ込んだ。視界には今は空しか映っていない。

エグザマクスの全高はおよそ16m。コックピットは腰部にあるから、地面に衝突した僕は身体には、10mの高さから落下したくらい衝撃が加わる。コックピットのシートは耐G構造になっているため大した衝撃ではないが、それでも身体には自動車同士が微低速で衝突したほどの力が加わった。

僕は機体の損傷状態を確認し、問題ないことを確認してから機体を起きあがらせようとする。しかし、機体は地面をのたうち回るだけで、なかなか起きあがらせることができない。

《早く起き上がってください。敵の追撃を受けます》シズクが僕をせかす。

エグザマクスはパイロットの微細な脳波を検知して動く非接触型BMIを基幹操作に用いているため、パイロットは身体を動かさうと意識するだけで機体が勝手に動いてくれる。自分が仰向けに倒れて起きあがる一連の動作を行えばすぐさま起きあがることができる。

はずなのだけれど、僕にとつて、それは容易なことではない。とくにこの切迫した状況ではなおさらだ。

人間が起きあがるためには、まず腕をついて上体を持ち上げ、足を重心の近くに移動させる。そして、重心を支点となる足の直上まで移動させ、バランスをとりながら足を突っ張るようにして立ち上がらなければいけない。

しかし、普段こんな風に考えながら起きあがる人間はいない。残念ながらエグザマクスのインターフェースは無意識下の思考は直接反映されないため、一つひとつの動作を1ステップづつ明確に意識し

なければ起きあがることはおろか、歩くことすらできない。おまけに、生身の身体で起きあがるのと違い、身体感覚のフィードバックがないため、さらに難易度が増す。

さらに、AIが予測再現した動作が本当にパイロットが望む動作なのかを逐一操縦桿に備わるボタンを操作して、承認および可否の判断決定をしなければならぬ。なぜ、こんな面倒なシステムを導入するかと言えば安全のためだ。

エグザマクスは兵器機械ではあるものの産業機械だ。不安定な脳波だけで全高16mにも及ぶ巨大機械を操作することなど安全管理上問題だらけだからだ。周囲に大勢の人がいるなかで、もしパイロットがほんの少しでもおかしなことを考えただけで機体が暴走し、下手をすれば周りに死人の山ができてしまう。

そのための安全装置として、パイロットは機体の動作一つひとつを実行するかどうかを随時問われる。そして、そこだけは筋肉による随意操作が求められるようになっていく。

まとめると、エグザマクスの基本操作プロセスはこうだ。

- 1、パイロットの脳波を人工知能が検知し行動ログとして記録する。
- 2、そのログが正しいかどうかを制御AIがモニター上でパイロットに問い合わせる。
- 3、パイロットが操縦桿やペダル操作で、それらのログに承認およびキャンセルを下す。
- 4、承認されて初めてひとつの動作を実行する。

慣れないうちは、パイロットが動作を明確に脳波として発信できないため、AIがパイロットの意図を読めず、おかしな動作ばかりが動作ログとして提案される。そうになると、キャンセルばかりでまともに動かすことは難しい。

つまりエグザマクスを動かす為には、ただ前進する動作ひとつ取っても、しっかりと前に進むという意志を明確にしたうえで、体重を前方に移動。承認。右足を持ち上げる。承認。右足を地面につける。承認。左足を持ち上げる。承認。左足を地面につける。承認。と煩

雑な操作が要求される。

動かしているうちに訳が分からなくなってくる。おまけに動作遅延も大きい。人間には一対の手足と合計20本の指が備わっているが、それらを駆使してもシーケンス制御で人型のロボットを機敏に操ることは難しい。ペダルとレバーとボタン操作だけで、迫り来る銃弾を回避しつつ、剣を振るって敵機を屠るなどという行為はロボットアニメの世界だけの話であって現実世界では不可能だ。

ましてや、人型巨大ロボットを自由自在に駆って、敵を無双のごとく薙倒す光景など絵空事に過ぎない。少なくとも僕には無理だ。現実には、なによりも安全第一。周到なセーフティシステムをパイロットと機体の間にかませなければ運用すらままならないのが現実世界の巨大ロボットというものだ。

相変わらず眼前には青い空を背景に白い雲だけが浮かんでいる。再度、警告の音波波形モニターがポップアップし、すぐさま先程と同じ風切り音が僕の耳に届く。

起きあがれないままにいる僕のわずか十数m離れた位置に迫撃砲の追撃が着弾し、再びコックピットを大きく揺さぶる。僕は恐怖に打ち震える。

焦れば焦るほど操作がままならない。やっぱり僕はエグザマックスのパイロットには向いていない。そもそも僕はパイロット志願ではなくサイラスの技術者志望だったのに。

このエグザマックスの製造元であるサイラス。その私設傭兵が僕たちだ。自社製品のテストとデータ収集を行いつつ、傭兵として戦場を闊歩することで自社製品を国家やテロリストに売り込み営業をかける『武器実演販売チーム』が、僕が所属する『サイラス私設傭兵部隊』の実態だった。

僕は、この1年間だけでも3度、転属願いを出したにもかかわらず受理してもらえない。この采配を下した専務にも直談判したが、聞き入れられず今に至る。

目を閉じれば鬼専務の顔が浮かぶ。世界最先端の技術を扱う、世界一のブラック企業がサイラスだ。見知らぬ中東の地に左遷されたあ

げく、僕はここで死ぬのだろうか。

日本にいる父さん、母さん。僕にこの名前をつけたことは恨んでい
るけれど、僕は二人の子供に生まれて幸せだった。そして二人の双子
の妹たち。兄ちゃんは、お前たちの花嫁衣装を一目みてから死にた
かった――。

僕は無神論者だが、死ぬ前のお祈りをしたのはこの部署に配属され
てからもう何度目になるだろう。涙が目尻から溢れ出る。仰向けに
なっているから、粘度の低い鼻水が頬を伝って流れ落ちる。そして、
僕はハッと寒気を覚える。

眼前に広がる中東の高い空は、ただただ僕を見下しているように見
えた。そればかりか、その空に高く延びる積乱雲の塊が、だんだん鬼
専務の顔に見えてきた。

《Hey! Rev. What are you doing?
よお、レイ。お前なにやってんだ?》

僚機の1体が近づいてきて通信で様子を問う。この明るい調子は、
アメリカ海兵隊上がりで中距離砲撃機を駆るサニー・バニーの声だ。
《僚機の活躍により、敵部隊は撤収を開始しました。作戦エリアに敵
機反応ありません。マスター、これで23回目です》

シズクの報告に心底安堵した。平和な日本で一般人として生活し
ていては無縁ともいえるほど濃厚な生を実感する。ところで。

「うん? 何のカウントだ?」

《恐怖のあまり、コックピット内で排泄物を漏洩させた回数です》

「よけいなことは数えなくてよろしい」

僕の名前は安室^{アムロ}玲^{レイ}。24歳。死^死のセール^{セール}ス^ス私設^{私設}傭兵^{傭兵}の一員で人型巨
大兵器エグザマクスに乗っている。しかし、僕は英雄でもなければ、
エースパイロットでもない。

第2話 サイラス私設傭兵部隊（キャラクター紹介）

「偉大な神よ、素晴らしき神よ。
And we thank Him for our food.

神にこの食事を感謝いたします。アーメン」

アメリカ人のサニー・バニーが捧げた食前のお祈りに、イギリス人のジェイクも「アーメン」と続ける。

ロシア人のアーニヤは「アミン。スパシーバ・ザ・ピターニエ」とささやく。

日本人のアマギ隊長と僕は「いただきます」と声を揃えて言った。

このインターナショナルな5人がサイラス傭兵部隊のテストパイロットの面々だ。非常時でない限り、夕食だけは必ずパイロット5人が揃って食べるのが部隊の習慣になっていた。

というか、これはアマギ隊長が配属時当初に取り決めたルールであり、この部隊に馴染めない僕に対する配慮だったのかもしれない。今は、いつものように6畳間くらいの狭いキッチンダイニング兼ブリーフィングルームに5人がそろってテーブルを囲んでいる。幸いなことに、これまで誰一人として欠けた状態で夕食を食べたことはない。

今夜のメニューは、すっかりおなじみになったアラブ食。地元の食材でつくられたホブスと呼ばれる薄い平焼きパンと、レンズ豆を使ったレンティルスープとマトンチョップがテーブルに並んでいる。1年も海外で過ごしては日本食が恋しくなるのが本音ではあったけれど、アラブ食も嫌いじゃない。羊肉の乳臭さは苦手だったが、本場の羊は日本で食べるラムやマトンとは別格だ。とくにケバブは絶品だった。

料理をつくってくれているのは部隊料理担当の王・泰然^{ワン タイラン}。今年で60歳になる部隊の最年長者だ。目が細く小太りで、いかにも中国人という風貌の彼は、作りの物のような笑顔を浮かべながら対面型キッチンの向こうで隊員たちの食事を見守っている。サニー・バニーの話では、元は中国人民解放軍の将校だったらしいが嘘か本当かはわからない。

隊長はよく王・泰然^{ワン タイラン}と2人で話し込んでいる。僕はなにも知らさ

れていなかったが、あの年輩の中国人が部隊の参謀役なのかも知れない。

僕とメカニック担当の3人を除いて、傭兵部隊の隊員は全員がサイラスのスカウトにあってここにいる。サイラス私設傭兵部隊の人員数は、僕を含めたテストパイロット5人と、料理担当の王・泰然^{ワン・タイラン}、サイラスから派遣された2人のメカニックを合わせた合計8人。

それぞれが住居用1台・エグザマクス整備用2台の合計3台の大型トレーラー^{カミトレーラー}に分乗し、窮屈な生活を送りながら世界各地を転戦している。現在は中東のとある国の反政府組織の支援を行っていた。

僕の真向かいの席で、早速マトンチョップにかぶりついているのは、アメリカ海兵隊に所属していたサニー・バニー。34歳。陽気なウサギちゃん^{陽気なウサギちゃん}。サニー・バニーの名前とは完全にミスマツチした屈強な黒人男性だ。恐らく本名ではないだろうが、何を考えてそんなかわいい名前をつけたのだろうか。

彼は陸戦用の中距離砲撃機に搭乗している。名前のとおり性格は明るく、終始笑顔でいる部隊のムードメーカーだ。ただ、夜中に大音量でラップミュージックを流すのは勘弁してほしい。一度それを注意したのだけれど、いつもの笑顔が急に真顔に変わって僕は恐怖を覚えた。それ以降はポリウムがほんの少しだけ小さくなったが、うるさいのには変わりがない。

その隣で、ちぎったホブスをディップにして口に運んでいるのは、ブロンドヘアーが特徴的なロシア美女のアンナ・カラシニコワ。彼女は旧KGBの後継組織に所属する諜報員だった。

サニー・バニーから聞いた話では、その美貌でスパイとしてターゲットに近づき、何人もの高官を暗殺しているらしい。その手口の多くは毒殺だったらしいが、彼女はナイフの達人だった。エグザマクスも近距離白兵戦仕様だ。傭兵界隈では『アーニャ・リーズヴィエ』^{アーニャ・リーズヴィエ}の二つ名で恐れられているそうだ。僕らはアーニャと呼んでいる。

彼女の歯に絹着せぬ物言いと、豊満な胸と理想的にしまったくびれ

は多くの男を魅了する。今もサイラスの制服をはだけ、胸の谷間を強調した格好をしている。だけど僕は知っている。あの胸の間には、常に護身用にしては大きすぎるナイフが収まっていることを。

初めて会ったとき、なぜか僕は胸ぐらをいきなり捕まれて壁に叩きつけられたうえ、顔の数センチ脇にナイフが突き立てられた。壁ドンからの壁ナイフだ。僕は彼女が怖くて怖くて仕方がない。趣味はコ Spre とナイフ研ぎ。経歴書上の年齢は32歳となっているがそれよりもだいぶ若く見える。

その向かい側、つまり僕の隣に座っているのがイギリス人のジェイク。経歴書上の本名はジェイコブ・アロースミスという。38歳。元イギリス秘密諜報部員。それもMI6。生ジエームズ・ボンドだ。

狙撃が得意で、エグザマクスも長距離狙撃機に搭乗している。暇さえあれば愛用のライフルを整備していた。彼と初めて挨拶を交わそうと近づいたとき、彼は50m先から僕に向けて発砲した。いきなりドンと。その後、彼は満面の笑顔で僕を出迎えた。アーニヤよりも狂ってる。過去に誰を何人殺したかは不明。怖くて聞けないし、聞きたくもない。自分が必要と思ったこと以外はしゃべらない、無口でよくわからない男だ。

テーブル中央に座るアマギ隊長は、元海上自衛隊員で元ヘリパイロット。サニー・バニーと同じ34歳。本名は天城^{アマギ}史郎^{シロー}といい、某ロボットアニメのスピノフ作品の主人公と1文字違いの隊長には親近感を覚える。それと同時に、1文字違いであることをうらやましく思う。

仮にそうでなくてもアマギ隊長には不思議な魅力があった。このイカレたメンバー——もとい個性的な面々をまとめ上げるだけあって、優れた対人スキルとマネジメントスキルをもっている。カリスマ性といってもいいかもしれない。それに、整った顔立ちと形のよい坊主頭は僧侶を思わせ、その器の広さも彼の特徴といえるだろう。ただし、意外と大ざっぱな性格で、部屋が汚いのは内緒だ。

元ヘリパイロットの経験からエグザマクスは空戦仕様に搭乗し、上空から指示と援護を行う。あの不安定かつ、わからずやのエグザマクスを空に飛ばすことは、一般的な視点から見ても卓越した操縦技術を有していることの証明になる。

王^{ワン}・泰然^{タイラン}を含めた彼ら5人は、その経歴からか全員が性格も含めて異質な雰囲気を持っている。笑っている時でさえ殺気を隠し持っているような、近寄りがたいオーラを纏っているようで、僕は彼らと対面しているだけでとてつもない疲労感を覚える。

明るい性格のサニー・バニーや、同じ日本人の隊長とはすぐに打ち解けたが、ほかのメンバーと言葉を交わせるようになったのは、ここ1、2カ月のことだ。それまでは僕の話聞くどころか、視界に入れようとすらしなかった。とはいえ、配属から1年が経っても打ち解けるにはほど遠く、ようやくあからさまに無視しないでくれるようになったというのが正確な表現だ。

年齢も戦闘能力も遥かに下であるにも関わらず、僕の方が立場が上であることもコミュニケーションを複雑にしているのだろう。この隊で僕の権限は隊長に次いで2番目に高い。隊長が実務長だとすれば、僕は事務長といったところだ。

それゆえ、事務上の言いたくないことでも言わなくてはいけない。その行為は猛獣の檻のなかに自ら手を突っ込むようなものだ。これも僕の憂鬱の種だった。

傭兵たちの食事は終始無言だ。現在も食器がぶつかる音とわずかな咀嚼音が聞こえるだけだ。僕は勇気を振り絞ってこの静寂を壊すべく声を発する。

「ああ、そうだ。アーニヤとサニー・バニーからは、今日の戦闘の報告書がまだ上がっていないのだけれど――」

2人は一瞬だけ僕を見やると、無言で僕から目をそらす。

「本日中に提出するように……してくれるカナ？」

「イエス・サー」

「アイアイ・サー」と、2人は慇懃無礼な態度で答える。

「と、とりあえず口頭で聞いておきたい。サニー、無限軌道式脚部の調子はどうだった?」

「おう。ちゃんと動くぜ。グレイトだ」

サニー・バニーは満面の笑みと、スプーンを握った手の親指を立てることで感想を表現する。

「何か気づいたことは?」

「マジでスゲエ」

「ほかに?」

「超素晴らしい」

「ほかに?」

「ヤベエくらいに最高だ」

「わかった。もういいや」

続いて隣のアーニヤにも新装備の使用感を確認する。

「アーニヤ、振動ブレードの切れ味はどう?」

「確かに、切れ味はいいね。だけど切れ味にムラがある。それに、振動素子を介しているぶん刀身が剛性不足で防御に使うには信頼性に欠ける。いいかい、ナイフってのはだね、ただ切れりやいいってもんじゃないんだよ。アンタら技術者連中は、そこんことをよくわかっていない。そもそも――」

「ゴメン。それ以上は報告書で頼む」

ジェイクからはすでに報告書は提出されているが、率直な感想も聞いておきたかった。僕は隣のジェイクにも同様に質問をする。

「ジェイク、報告書にまだ目は通していないんだけど、新型のアンチマテリアルライフルはどうだい? 以前のものより飛距離が向上しているはずだけれど」

「バレル砲身をつくり直せ。弾丸におかしなベクトルがかかっている。2 k m以上の狙撃ではまったく使い物にならない」

ジェイクは不機嫌そうに羊の骨をへし折り、テーブル中央のボウルに投げ入れた。

「サイラスはおろか、どこのメーカーにも現代の技術レベルでは君の要求を満たす照準精度のバレルは作れないんだよ。それに、2 k m離

れた位置からエグザマクスでマニュアル狙撃できる人間は世界中を探しても君のほかにはいない」

それを聞いたジエイクは、ふむ。と納得した様子でナプキンで手を拭いている。

僕だつてここに配属された1年間、人間関係改善のためにもしなかった訳じゃない。彼らの本性は獣だ。弱々しい態度を見せるから喰われる。僕を生かしておくメリットがないから狩られる。だから僕は「強^虚気^勢に見せること」と「お^エだ^サてる^を与^える^ること」を学んだ。

それが功を奏したようで、ここ1、2カ月は以前とは比べものにならないほど快適だ。とはいえ、今も冷や汗が止まらない。このまま、もう1時間もこうしていれば、体中の水分がなくなるんじゃないかと思うほどの汗が流れている。

「隊長の飛行ユニットはどうです？」

「だいぶ慣れたものの、脳波だけで自在にコントロールするのは難しいな。AI制御に任せると盤石の安定か、墜落かのどちらかになってしまう。専用の操縦桿でもあれば、もつと微妙な操作が可能かもしれない」

「それは盲点でした。できるかどうか技術課に問い合わせてみます」

こういったエグザマクスの問題点や改善点を洗い出し、本社の開発部にフィードバックするのも僕の仕事のひとつだ。要するに、戦闘以外の事務処理全般を受け持つのが僕の仕事だった。

全員の食事が終わったことを確認して、アマギ隊長が隊員たちに話しかける。

「さて、諸君。恒例となった食後のデブリーフィングの時間だ。我がが荷担する反政府軍の戦況は当初の予測よりも芳しくない。それに、今日の敵は妙に引き際がよすぎたな」

隊長が隊員の面々を見渡す。全員がうなずく。

「この内戦は小国の政府軍と反政府軍の争いだが、政府軍の背後にはアメリカがついている。今日も後方にアメリカ本国のエグザマクス部隊がいた。今日の攻撃は恐らく下見といったところだろう。近いうちにアメリカ軍が政府軍と連携して大規模攻撃を仕掛けてくる可

能性が高い」

そうして、アマギ隊長はアメリカ人のサニー・バニーを見やる。当のサニー・バニーは、羊の骨を口にくわえながら、いつも通りニヤついている。

「そして、こちらの反政府軍はロシアと中国がバックにいるが、支援は乏しい」

ロシア人のアーニヤがふんと鼻を鳴らす。中国人の王・泰然ワン・タイランが厨房からニコニコと手を挙げて応える。

「どうせ、おまえたち英国も一枚噛んでいるんだろう。ミスター・ジェームズ・ボンド？」

イギリス人のジェイクは、ぐるりと目を上に向けてから、静かに食後のコーヒースプーンをすすった。

「このすぐ後方は反政府組織の拠点があるガス田だ。ここを守り抜かなければ我々はミツシヨン失敗だ。何か有効な打開策はあるかな」
「反政府軍の拠点を叩くには、この渓谷を抜けるしかない。俺たちはその入り口を塞いでいるんだ。そう簡単に拠点制圧はできないぜ」
サニー・バニーがすぐさま言う。

「確かに、地の利はこちらにあるな。少し後退して渓谷で安全に迎え撃つ手も使えるだろう」隊長が納得した様子で答える。

「けど、こちらは高性能機の少数精鋭部隊で防衛戦は不得手だ。こちらから敵の拠点に奇襲をかけるのがもっとも良策だよ。乱戦になれば、あたしは負けない」アーニヤが鼻息荒く語った。

「そうするには、反政府軍の人間と話し合う必要があるな。拠点の防衛戦力をどうするかという問題もある。だが、アーニヤが言うことももっともだ」アマギ隊長は考え込みながら言葉を返す。

そこで、僕が小さく挙手をして発言する。

「今日の戦闘中に支援機が捉えた画像には、例の『アメリカ第9海外派遣中隊』の機影が確認できました。それに、僕を撃った迫撃砲の射程はかなりの距離です。迂闊に後退するとガス田が直接長距離砲撃にさらされる危険があります」

「へえ、ただ亀のようにひっくり返ってるだけじゃないのね」アーニヤ

が僕を冷やかすが無視した。

「うえ、ナインズの奴ら、こつちのケツを追ってるんじゃないか。これで何度目だ？ 偶然にしちゃ、奴らとの鉢合わせが多すぎるぜ。これじゃ営業妨害だ」とサニー・バニーが毒づく。

「確かに、遭遇率はおよそ3割にも上るな」ジエイクが静かに言った。アメリカ第9海外派遣中隊。通称『ナインズ』は、サニー・バニーが言うとおりに、僕らが中東に上陸したときから付け狙うかのように遭遇するエグザマクス9機で構成されるアメリカの部隊だ。

サイラスはアメリカに限らず、需要さえあればどこにでもエグザマクスを販売している。僕らが戦果を上げれば、それを見た敵軍がエグザマクスを導入しようとする。そうすれば、サイラスが独占開発するエグザマクスのフレームが売れる。それが僕らサイラス私設傭兵部隊が『武器実演販売チーム』と呼ばれる所以だ。

その成果も手伝って、いまではほとんどの国やテロリストまでがエグザマクスを導入している。そして世界の戦争の形が変わった。エグザマクスのコックピットは非常に強固にできているため戦争による兵士の死傷者の数は劇的に減ったが、ゲーム盤に成り下がった戦いは各地での戦争を激化させた。そして、サイラスはさらに儲かる。

フレーム内部は高度にブラックボックス化されているため、複製される心配はまずない。さらにこれは企業秘密なのだけけれど、海外向けに販売しているのは旧型の第2世代機であって、僕ら私設傭兵部隊が使用している第3世代機と比べて大きく性能が劣っていた。

ただし、エグザマクス用の装備はフリーライセンスとしているため、武装は誰でも自由に製造販売ができるようになっていた。『アメリカ第9海外派遣中隊』は、アメリカ軍産複合体がエグザマクスと武器のデータ収集を目的として組織したテスト部隊だった。

銃火器の製造開発に限定すれば、先端技術を扱うサイラスであってもアメリカ軍産複合体には到底敵わない。エグザマクスの世代優越性があるとしても油断ができる相手ではなかった。それに、世界の軍需産業の歴史を塗り替えたサイラスに対するプレッシャーでもあらうから、営業妨害の言葉もあながち的外れではない。

僕はメーカー直下の私設傭兵であると同時に、エグザマクスの実験部隊であり、サイラスの広報部隊でもある。いわば社の看板でありタレントだ。そして、タレントには絶対的な活躍が期待される。つまり、社の信頼を失墜させることになりかねない負け戦は、相手が誰であろうと許されないのだ。

「確かに、ナインズの奴らとは頻繁に遭遇するな。我々はテスト相手に最適なんだろう。ファンの追っかけに対処するのも人気者の仕事だよ、諸君。だが、テストに最適な相手なのは、こちらと同じだ」アマギ隊長が肩をすくめて言う。「もつともこちらのエグザマクスは見た目は第2世代だが、中身は第3世代の最新鋭機だからな」とも付け加える。

「とはいえっても2倍の戦闘力がある訳じゃない。強力な武器と数で押されれば、俺たちだって負けちまう。逃げるのも一手だぜ。隊長」とサニー・バニー。

「バカ言うんじゃないよサニー。今度尻尾巻いて逃げたりしたら、あのサディスト専務になんて言われるか——」アーニヤの表情が青ざめる。

「ナインズは9機編成だ。一人頭2.5機でお釣りがくる計算だ。余裕じゃないか？ 我々なら」

ジェイクがさらりと言う。もちろん、僕は戦力として計算に入られていない。

「大局で見れば、正直我々がどれだけ敵を倒しても、反政府軍に勝ち目はないだろう。確かに逃げるのも策だ。しかし、我らがサイラスのサディスト専務殿は、政府軍の独裁者のごとく依頼継続を望んでいる。『死なない程度にがんばってください。仮に死んでも機密保持と新装備テストの報告だけはお忘れなく』だそうだ」

「——なんてこった」とサニー・バニーが天井を仰ぎ見て、その場の全員がげんなりとした顔をした。

第3話 サイラス私設防衛部隊2（キャラクター紹介2）

6畳間くらいしかないの狭いキッチンダイニング兼ブリーフィングルームの壁にかけてある時計を見あげると、現在の時刻は午後7:00の少し前だった。

気づけば1時間ほど経っていた。僕は食事の後そのままダイニングに居残り、テーブルの上にラップトップを広げて今日の戦闘の報告書をまとめていた。

カミオンには狭いながらもデスク付きの自室が用意されているが、この時間は隣室のサニー・バニーがラップミュージックを大音量で垂れ流しているから集中できない。対して、ダイニング内に響く音は料理担当の王・泰然ワンタイランが鳴らす食器や調理器具のぶつかる音と、独特な中国音楽の鼻歌だけだ。

僕らテストパイロットたちの食事が片づけられたテーブルには、新たな食事が用意されている。メニューは同じく、ホブスと呼ばれる薄い平焼きパンと、レンズ豆を使ったレンティルスープとマトンチョップだ。これは時間をずらして食事を採る、残りのサイラス私設傭兵部隊員であるメカニック2人のぶんの食事だ。

戦闘があるごとに本社に提出するように指示されている報告書には、戦闘後の機体の状態も載せなければならない。僕はダイニングで仕事を片づけながらエグザマクスの整備を終えたメカニックたちが食事を取りにくるのを待っていた。報告書はあらかじめ完成し、残すはメカニックたちからの報告を記載するのみだった。

それとは別に、戦闘の様子を捉えた画像や動画を選定する仕事もあるが、こちらは大した労力ではない。僕の機体にもう一機備わる支援AI機「ホノカ」が戦場を自律稼働して撮影した画像や動画のなかから、明らかに使えないもの以外を本社広報課のサーバーにアップロードするだけの簡単な作業だ。本社に送った画像や動画は社内資料として広告や顧客へのプレゼンテーションに使われる。

その画像のなかの数枚に写ったアメリカ第9海外派遣中隊の機影が目に入って、僕は思わず身震いした。

ナインズはアメリカ軍に所属するエグザマクス部隊だけあって、彼らの操縦技術のレベルは非常に高い。なかでも空戦仕様の敵隊長機は、第2世代機と第3世代機の性能差がありながらも、これまでアマギ隊長と互角にわたりあつてきた実力の持ち主だ。他の機もサニー・バニーやアーニャやジェイクと互角とまでは言わないけれども、幾度となく戦いながらも大破させるに至ったのは1機もない。

これまで9機が一度に攻撃を仕掛けてきたことはなかったが、もし全機が一斉に攻撃を仕掛けてきたら、歴戦の傭兵たちであっても無傷ではすまないだろう。

そのとき外から聞こえたエグザマクスの稼働音に驚き、僕は身を強ばらせる。

しかし、すぐさま落ち着きを取り戻す。これは第3世代機の稼働音だ。今日の夜間警邏はジェイクだったはずだ。彼が周辺警備に向かうところなのだろう。ということは、もうすぐ整備作業を終えたメカニック達が食事を採りにやってくるはずだ。

ちなみに、僕は警邏のシフトには組み込まれていない。僕が警邏しても役に立たないからだ。僕がエグザマクスで警備するよりなら、監視カメラの方がいい仕事をすると自信をもって言える。恥ずかしいけれど。

急に天井の照明が遮られ、手元が暗くなる。同時にコーヒーのいい香りがした。王・泰然ワン・タイランがテーブルの脇に立ち、湯気が立ち上るコーヒークップを差し出してくれた。見上げた彼の顔には、相変わらずお面のように硬質な笑顔が浮かんでいる。

「いつもありがとう。王」

僕のお礼に、彼は満足げにうなずくと、僕の肩を2度軽く叩いて厨房へ引っ込んで行った。僕は王・泰然ワン・タイランと毎日顔を合わせているけれど、彼とは話したことがない。そればかりか表情を変えるのを見ることさえ稀だ。

半年ほど前、王が試しにつくったアラビックコーヒーを試飲した際、あまりのマズさに吐き出してしまったときがあった。そのとき一度だけ見せた王の悲しげな表情が思い出された。今日のはもちろん普通のコーヒーだ。

よくわからない人だけれど、いつもの食事はもちろん、いつも差し入れてくれる王が淹れたコーヒーは絶品だった。僕はこのコーヒーが王からの激励だと勝手に思っていただけだ。

「あ、レイ。お疲れッス」

ドアが開かれ、ツナギ姿の若いメカニックが部屋に入ってくる。メカニックのひとりの下僚ハルト。年齢は僕よりひとつ下の23歳。サイラス専属のメカニックで、「です」の代わりに「ッス」をつけるが口癖だ。

それに続いて部屋に入ってきたのがサイラス私設傭兵部隊のチーフメカニックである川崎 重工さん。カワサキさんは、アマギ隊長と海上自衛隊の同期のメカニックだったらしく年齢も隊長と同じ34歳。隊長と並んで、部隊の頼れるアニキ的な存在だ。

2人とも砂漠の強い日差しに焼かれ、黒々と日焼けをしている。カミオンでの整備はほぼ屋外作業だから、その点ではパイロットよりも大変だ。

メカニックの2人はテーブルに就くと、手の平を合わせて「王、いただきます(ッス)」と挨拶をする。王・泰然は相変わらず作り物のような笑顔を浮かべながら食事を見守っていた。カワサキさんは食事をしながらいつもの通り、こちらがなにも聞かなくてもエグザマクスの状態を報告し始める。

「今日の戦闘でのアマギ機とジエイク機とサニー・バニー機の損傷はごく軽微だ。アーニヤ機も損傷はほとんどないが、アクチュエーターベアリングの磨耗が激しくて右肩部を交換した。左腕と脚部も、もう1・2戦もすれば交換が必要になるだろう」

「え、またですか？ 先々月に交換したばかりじゃ」

「アーニヤは機を動かすすぎるんだ。他のメンバーよりも1・5倍は

消耗ペースが早い。パーツは2日後に到着予定の定期便で補充されるが、先行きが心配だ。次回の定期便でさらに追加を頼む。発注リストはあとでまとめておく」

「わかりました」

サイラス私設傭兵部隊が必要とするエグザマクス用の保守部品やスペアパーツ、保存食料や日用品などの補給物資は日本からの定期船で送られてくる。弾薬は特殊なものでなければ現地調達だ。

しかし、日本から中東までの船便は約2カ月かかるため、余裕をもつて発注しなければならない。おまけに積載量が限られるカミオンには必要最低限の物資しか蓄えられず、物資の在庫管理は隊全体の生命線とも言える。拠点港の倉庫を借りてパーツをストックしてはあるが、現地までの移送にも時間がかかるためイレギュラーな損耗はできる限り避けたかった。

アーニヤは近距離白兵戦機として機体を酷使するため、関節機構の劣化が特別早い。先月のナインズとの戦闘も劣化を早めた原因かもしれない。交換したパーツは本社に送り返して劣化サンプルにするが、アーニヤのエグザマクスの使い方は特殊でサンプルには向かないかもしれない。

「サニー・バニーが、無限軌道式脚部はグレイトでオーサムでブリリアントでエクセレントだと言っていましたよ。仕上がりは問題ないですよです」

カワサキさんは、羊肉を咀嚼しながら真顔でうなずく。笑ってくださることを期待したけれど、思ったよりウケが悪い。

「それと、隊長の機体のコックピットに飛行ユニットを独立制御する操縦桿は増設できますかね」

「隊長にも同じことを言われていたがね。改装はここでもできるが、制御プログラムが問題だ。ゼロから制御プログラムを組むのは本社のシステム課に回さなければできないな」

「そうですね」僕は、話を聞きながらカワサキさんとの会話をラップトップを使ってメモをとる。アーニヤとジエイクの新装備に対する文句は本社案件になるため、彼らに伝える必要はなかった。

「わかりました。ありがとうございます。じやあ僕は機体ログデータの吸い出しにかからせてもらいますので。ごゆつくり」

「あ、レイの機体は問題ないツスよ。まるで新品同様ツス」

ハルトが屈託ない笑みを浮かべながら、皮肉とも受け取れる発言をする。片手には食べかけのマト^羊ンチ^肉ヨツプが握られている。

それはどうも。

とはいえ、そんな僕にも利用価値はなくてはなない。各パーツがモジュール交換・共用できるエグザマクスの運用において、パーツをローテーションさせさせて各機の負荷を分散させるのは基本だ。とくに積載量に余裕がないカミオンでの運用では、僕の機体は独立して移動可能な良品パーツストックとして重宝する。恥ずかしいけれど。

第4話 エグザマクス（巨大人型ロボット技術解説）

扉を少しだけ空けて、僕はカミオンから素早く外の暗闇に滑り出る。そしてすぐさま身を低めて周囲を警戒する。そして息を潜めて10秒待つ。

シンと静まり返った夜の砂漠には物音ひとつ聞こえない。耳に届くのは、ときおり風で飛ばされた砂が地面をこする音だけだ。まだ熱を帯びている砂漠の空気は僕の頬にねっとりまとわりついた。暗闇に目が慣れるにしたがって、頭上には満天の星空が浮かび上がる。

この一連の動作は、周囲に敵が潜んでいないか確認するための動作だ。傭兵が戦場で生き残るための基本動作だとサニー・バニーに教えてもらったのだけれど、僕以外にやっている隊員は見たことがなかった。そして、実際に夜襲を受けたことはこの1年間で一度たりともない。

10秒だ。依然として周囲に人の気配はない。どうやら安全なようだ。僕は上体を起こし、カミオンのを取り囲むように待機させているエグザマクスに歩み寄る。

戦闘後は出撃した全機の戦闘記録を吸い出して、そのデータも本社に提出しなければならぬ。エグザマクスの戦闘ログには、機体がどのように行動したかと、パイロットがどのような行動を指示したかが含まれている。

脳波でコントロールするエグザマクスには、パイロットの思考が記録されていると言い換えてもいいだろう。実際にデータを見たからといって、なにを考えていたかわかるわけではないけれど、ログデータの吸い出し作業をする度に、頭の中を見透かされているようで複雑な気分になる。

ハンドライトを点灯させると、カミオンを取り囲むようにたたずむ4体の巨人が圧倒的な威圧感を放って目の前に浮かび上がる。

EXAMACS。サイラス社が開発した汎用人型巨大兵器。

『Extended Armament & Module Assembly』

『結合システム』の略称で、一般的ロボットと異なり、腕部や脚部などの各パーツを個々に交換可能とすることで、生産性とメンテナンス性を大きく向上させた人類史上初の実用に耐える汎用人型巨大兵器だ。

とはいえ、人型巨大ロボットが兵器として優れているかといえば、決してそうではない。人型兵器は無駄な稼働部が多く信頼性に欠けるうえ、生産コストもメンテナンスコストも既存兵器に比べて過大にかかる。複雑になりがちな操縦システムによってパイロットコストも莫大だ。

そのうえ大きな凶体は狙われやすい。おまけに火力では戦車に劣り、機動性ではヘリや戦闘機に劣る。不整地や山岳地などの限定領域では、戦車や戦闘機以上に有効な兵器ではあるものの、そこに戦うべき相手がいなければ兵器としての意味がない。

巨人型ロボットは人間の夢の産物であって合理的な兵器ではなかった。だからこれまで誰も実用化させるには至らなかった。しかし、サイラスは設計によつてそのデメリットを解消した。

各部を容易に着脱できるようにモジュール化することで、生産性を高めるとともに、破損箇所だけを交換できるようにして生産コストとメンテナンスコストを大きく抑えた。さらに、AI補助を介した脳波コントロールによる操縦システムでパイロットの操縦教育時間を短縮し、コックピットを極力堅牢にすることでパイロットの生存率を著しく高めた。

そして最大の特徴は、エグザマックスの名称にもなっている『拡張型武装およびモジュール組立結合システム』だ。モジュール化された各間接部のジョイントは規格化され、手足をパズルのように組み替えれば人型で運用する必要もない。

機体制御に難があるものの4本腕のエグザマックスだつてつくれるし、狙撃機用には安定性の高い4本足のエグザマックスが最適だ。その気になれば8本足のタコのようなエグザマックスだつてつくることができる。それらは一般的な大型クレーンさえあれば組み替えが可能で、その気になればエグザマックス自体のアームとマニピレーターで

も組み替えられる。

この特殊な構造をもつエグザマクスに必要な不可欠なのが『Celler Fleam』『GEAC』『EMFOD』の3つの技術だ。

『Celler Fleam』は、機体骨格となるフレーム内部に駆動用バッテリーを収めた特殊構造のフレームだ。各部位は個々に備わったバッテリーによって駆動するため、エネルギー供給に必要な極太ケーブルを機体全体に這わせる必要がなくなり、機全体の軽量化と低重心化に寄与するとともに各々が着脱可能になる。

フレームは、エグザマクスの電源となる全固体電池を肉厚高強度の鋼管で覆い、その外側をさらに特殊衝撃吸収材で入念に保護した構造で、そのフレーム断面を観察すると骨膜と緻密骨、骨髄の3層で構成される人骨に近かった。

『GEAC』は、『Group Ego Attitude Control』の略称で、『集合自我的姿勢制御』と訳される。これまでのロボットのように一カ所から各パーツを統合制御するのではなく、部位ごとに独立した人工知能型制御機構をもつのがGEACの特徴だ。その振る舞いは、魚の群が寄り添って、より大きな魚に見せる動きに近い。

つまりパイロットはおおまかな指示を出すだけで、細かな制御をするのは手足のパーツ自体だ。それぞれの役割を持つ各部位同士が連携して指示に応じた最適な振る舞いをするため、制御ハードウェアに高い処理速度は必要ない。さらに統合制御よりも各部の反応速度や動きも洗練されている。この動きと考えは、日本の古流武術に着想を得ているようだ。

『EMFOD』は『Electronencephalogram (EEG) Multi Frequency Oscillation Detection』の略称で、複雑なエグザマクスを容易に制御

するための脳波機制御システムの名称だ。このシステムは、抽象的無意識領域と具体的意識領域の脳波を個別に読みとれることに利点がある。

抽象的無意識領域はカーネルプログラムのように指示全体の方向性を与えるだけで、動作指示は常に具体的意識が優先されるようになっていく。抽象的なイメージと、具体的な意志の両側面からパイロットの意図を読み取り機体を制御することで、制御AIに高い精度で人間の身体制御を模倣させることに成功した。人型でない場合は、抽象的無意識領域の優先度を高めることで対応できた。

これら3つの基礎理論を確立したのは、サイラスの天才科学者ドクター・イノウエ。僕たちサイラス私設傭兵部隊の発起人でもある井上専務その人だ。

エグザマクスは、パイロットの脳波を『EMFOD』で読み取り、『GEAC』によるAI制御を介して、各部の『Celler Fleam』を稼働させることで、手足をどんな形に組み替えても動く。

井上専務が考案した、この3つの新技術によりサイラスは拡張型武装およびモジュール組立結合システムを完成させ、人型巨大兵器の生産コストと運用コストを大幅に低めた。

事実、エグザマクスは戦車よりも高価だが、戦闘ヘリや戦闘機よりは遥かに安い。化石燃料を必要とせず、破損箇所だけを交換できるためメンテナンスコストは破格だ。他の兵器に比べて柔軟な戦術展開が可能で、扱いやすく、人的被害も最小限に抑えられる。おまけに局地における汎用建設機械としても利用できる。

しかし、これでもまだ顧客の購買意欲をゆり起こす決定打にはならない。

だから、サイラスはマーケティングにも力を注いだ。エグザマクスの武器運用に関わる機体制御ソフトウェアの一部をオープンソースとし、装備品開発をフリーライセンスとして自由な製造と販売を許可した。そして、各国の軍需企業にエグザマクスを普及させるのに一役

買ってくれば双方にメリットがあることを強調した。そして、ダメ押しの手が僕らサイラス私設傭兵の広告塔だ。

小さなきっかけがあれば十分だった。一定水準まで普及してしまえば、あとは対エグザマクス用にエグザマクスが売れる。そしてエグザマクス用の武器が売れる。それはあれよあれよと言う間に拡大し、サイラスはエグザマクスで新たな一大マーケットをつくり上げた。それと同時に局地戦闘需要が高まり、無用な戦火が世界各地で広がった。

人間が死なない戦争とまでは言えないが、死ぬ確率が著しく低まった戦争によって湯水のように金が垂れ流され、一度できた流れはすでに元には戻せなくなっていた。

これが世界の現状だ。僕には世界が戦争を楽しんでいる風潮にすら見える。それが人の本性なのだろうか。これだけ戦っても人間は戦争をやめられない。

サイラスは今や世界に名を連ねるトップ企業だが、その実態はマツチポンプのごとく戦火を広げる死の商人だ。

僕は10年前の、スカイフォールが起きたあの日に見た巨大な天使が忘れられなくて、それに似たエグザマクスを製造するサイラスに入社した。けれど、いま僕の目の前の暗闇に浮かぶ人型ロボットは、神話に出てくる凶悪なひとつ目の巨人^{サイクロプス}にしか見えない。

カミオンから延びた極太の充電ケーブルが、エグザマクスに接続されている。その様は戦いたがる粗暴な怪物を無理矢理に鎖で引き繋いでいるかのようだった。

僕は戦争の片棒を担いでいる。僕が直接引き金を引いて殺した人間はいなかったが、間接的にはどれだけの兵士と民間人が死んでいるかわからない。日本にいる父と母には、仕事の詳細は伝えていない。僕はもう、昔のように笑顔で妹たちの頭をなでてやることはできない。

幾度となく出した転属願いは受理してもらえない。この環境から逃れるためにはもうサイラスを辞めるしかない。男の子だから巨大ロボットは大好きだ。けれど戦争はしたくない。その矛盾した迷い

がエグザマクスの操縦システムの熟練を妨げているのかもしれない。もしくはEMFOD^{エムフォッド}が検知する僕の抽象的無意識領域が機体制御を邪魔しているのかもしれない。

事務仕事に集中していれば、そういったことは一時的に忘れることができた。僕はワーカーホリックかもしれないな。

—— さて、ログデータの吸い出し作業をしなければ。嫌なことを忘れるために。

僕はマスターキーを操作して、コックピットに登るためのワイヤーエレベーターを降下させた。

第5話 ナイフとビールと霧と（傭兵の日常）

報告書の作成は終わったし、機体のログデータ吸い出し作業も滞りなく完了した。夜間警邏に出ているジェイク機のデータ吸い出し作業は翌朝作業をする。さてと、残る仕事はパイロットスーツの洗濯だ。

耐火繊維でできているパイロットスーツは、本来頻繁に洗うものではない。エグザマクス内は快適とはいえないまでも空調が利いているし、アンダーウェアも着込んでいるから、それほど汚れたりはしない。それに、スクランブル発進に備えて常に使えるようにしておくてはならない。

だけど、その、あれだ。戦闘中に漏らした尿は洗い落とさなくてはいけない。パイロットはみんな出撃する際にオムツを装着してコックピット内で用を足せるようにしているのだけれど、支給されるオムツのサイズが僕に合っていない。だから横から漏れ出してしまふ。だから事ある度に洗濯をしなくてはならなかった。

加えて、僕の場合は一般のパイロットに比べて用を足す頻度が少々多い。とくに、激しい感情の高まりによって時折尿管バルブが壊れる。えー、あー、つまり、怖くて漏らしてしまうのだ。恥ずかしいけれど。

本社からはLサイズのオムツしか送られてこない。アマギ隊長もサニー・バニーもジェイクもがっしりとした体躯をしているからオムツはLサイズだ。それに対して僕の小さな体にLサイズは大きすぎた。Lサイズでは隙間ができてパイロットスーツに漏れ出してしまふのだ。

再三、本社に発注を出してはいるのだけれど、未だにMサイズのオムツは送られてこない。毎度毎度忘れられている。2日後に到着予定の物資定期便で送られてこなければ、またさらに2カ月待たなくてはならない。

平和な日本でぬるま湯に浸ったような生活を送る本社勤務組は、事の重大さがまるでわかってない。戦場において、僕にとってMサイズ

のオムツがどれだけ重要かを。

僕はカミオン内の自室に戻って、ビニール袋へと無造作に詰め込んだパイロットスーツを持ち出すと、狭いカミオンのなかを誰にもみつからないように抜き足さしあしで移動する。足音を立てない特殊な歩き方もサニー・バニーに教えてもらっていた。

耐火繊維製のパイロットスーツ洗濯機では洗えない。型くずれや繊維の劣化を防ぐため広めのバットにぬるま湯を張って、中性洗剤でやさしく手洗いが基本だ。頻繁に洗うため、すでに慣れっこだ。僕の場合、洗いすぎて耐火性能が低下してしまっているかもしれない。けれど背に腹はかえられない。

いつもは誰にもみつからないように夜更けにこっそりと洗う。シャワールームでなら誰にもみつからないで洗えた。

ところが、シャワールームにつながるドアを開けると内部は照明が点いていた。半畳程度の狭い洗濯場兼着替え場の奥にあるシャワールームからは水が流れる音がする。運悪く、誰かがシャワーを使っているようだ。

仕方がない、外で洗うか。しかし、洗濯に必要な道具は洗濯場兼着替え場のなかにある。ただ部屋が空くの待っているのも癪だ。一瞬だけ、洗濯用のバットだけ取らせてくださいね。と心のなかで勝手に断りを入れて僕は室内に押し入った。

僕は洗濯場兼着替え場の壁に備わる棚から、洗濯用のバットを取ろうと手を伸ばす。

その瞬間、目の前が真っ白になって視界を失った。僕は一瞬パニックに陥る。

顔はタオル地のようなごわごわした布で覆われ視界が奪われた。同時に僕的首筋には硬質なものが当てられる。両肩はがちりと押さえつけられ、僕は身動きがとれない。

背中には、なにか温かくて柔らかいものが密着した。

そして、背後にいる者が僕の耳元でささやく。

「動くな。動くよ死ぬよ」

気づけば、バラの石鹸の香りが湯上がりの熱気と混じって狭い着替

え場内を満たしていた。

僕は着替え場に押し入ったことを後悔した。運悪く、シャワーを浴びていたのはアーニヤだったようだ。ていうか、僕が部屋に入ってから5秒と経っていない。それに、近づく気配はおろか一切物音がしなかったぞ。これがプロの暗殺者の手腕か。

「覗きとは、いい度胸だね。レイ。お姉さんのシャワーシーンに欲情したのかい」

あのアーニヤがいつも携帯しているデカイナイフが当てられていると思われる喉仏を、僕はなるべく動かさないようにして声を絞り出す。

「ご、誤解だ。僕はバツトを取りに來ただけで」

「お尻!? 胸よりお尻が好みかい」アーニヤは背後から僕に下腹部を押し当ててくる。

「ち、違う」

「でも 安心したよ、レイ。アンタにも、ちゃんとキンタマがついているんだってわかってね」

肩の拘束が解放されると、その腕は僕の胸部から腹にかけてを撫でるように滑り降りた。そのまま無造作な手つきでアーニヤに股間を握られる。

「はうっ」僕は思わず腰が引け、喉からはおかしな声が出る。

今日**ばだ**はついていない。潰されたうえに、覗きの誤解をうけたまま殉職なんて、とんだ恥さらしだ。少なくとも家族にだけは絶対に知られたくない。誰かが気を利かせて戦場で勇敢に戦死したことにしてくれればありがたいのだけれど。

そのとき、入り口の方からドアが開けられる音がした。

「うおっ！ 何やってんだお前ら」

幸か不幸か、誰かが入ってきた。これはアマギ隊長の声だ。僕は「タイチョウ、タスケテ」と小さな声で必死に助けを求めらる。

「あー、なにから伝えればいいやら。まずは二人とも落ち着け」

タオルの目地の隙間から、うっすらと隊長のシルエットだけが伺える。

「まず、レイ。お前の首に当たっているのはナイフではなくブラシの柄だ」

「柄えっ?」

「状況から鑑みて、盛りのついたレイがアーニヤのシャワーを覗こうとしていたのかもしれないが——今は完全にアーニヤがレイを襲っているようにしか見えないぞ。とにかく服を着ろ。アーニヤ」

「ふふん。かわいくて、ついイジめたくなるんだよ。ていうか、ささつと出てけ野郎ども!」

結局、僕はバットを手に入れられないまま退出を余儀なくされた。おまけに、アーニヤと隊長がシャワールームを使い終わるまでパイロットスーツの洗濯は待たされるはめになった。

この踏んだり蹴ったりが、僕のサイラス私設備兵部隊での日常だ。



「Hey Rey. What are you doing? よお、レイ。お前なにやってんだ?」

その声に僕は驚いて、僕は心臓から口が飛び出すかと思った。いや、口から心臓が飛び出すかと思った。僕は洗い終わったパイロットスーツを振り回して、人力で脱水処理中だった。

屋外の、それもカミオンから少し離れた暗がりにはたはずなのに、サニー・バニーにみつかつてしまった。色黒のサニー・バニーが暗闇に立つと、服だけがが浮いて歩いているように見えて不思議だ。瞳と白い歯だけがわずかな光を反射して目立つ。

「——その、あの、トレーニングを」

「パイロットスーツを振り回すのが?」

「あye p.あそうさ。日本で今、流行っているんだ」

「どうせ、また漏らしたんだろう?」

tut.チツ。さすがにバレるか。

「お前が風呂場で夜な夜な洗濯してるのも知ってるぜ。それを見てるよ、故郷のおふくろを思い出しちゃう。それに、弟たちのことも。一番下の弟がちょうどお前と同じ歳でな」

そう言うと、サニー・バニーは遠くを見ながら手に持っていた缶ビールを口に運ぶ。

「あ、酒か？ 部隊規約では――」部隊のルールで21時以降はアルコールの摂取を禁じていた。

「固いことを言うな。まだ21時になる5分前だ。お前もやるか？」

サニー・バニーは派手なパーカーのポケットからもう1本の缶を取り出してこちらに放る。僕はそれをキャッチする。

「まあ、気にすんな。誰だって戦場に出ればそんなもんだ。さすがに1年間も戦場に出て漏らす奴は珍しいが。それでも、まあ、お前はよくやっているよ。間違っても上官とは思えないが。むしろ出来の悪い弟みたいだ」

「出来が悪いはよけいだよ」

僕は無然として、サニー・バニーにもらったビールを流し込む。軽い運動で火照った身体と、まだ熱気が残る砂漠の夜に飲むビールは格別だった。

「アーニャやジェイクだって、あれでもお前のことを心配してるんだぜ。お前はそんななりでも弱音ひとつ吐かないからな。そのうちストレスで自暴自棄になって、プツツリいくんじゃないかって。その性格は日本人だからか？」

「それは、違――いや。そうかもしれないな」

「日本人はクソ真面目でいけない」

「うん。その通りだ」

「まあ、気楽にやれや。ここにいる奴らは誰もお前に前線での戦果なんて期待していないんだからよ。お前は裏方で、俺らが戦う。それが『サイラス私設傭兵部隊』だ。違うか？」

そう言ってサニー・バニーは、両手でこちらを指さし、おどけた顔をつくる。僕も笑顔を返す。

「うん。ありがとう。サニー・バニー」

「じゃあな」

サニー・バニーがぐるりと背を向けてカミオンに戻る。大きな背中を揺らして。時折ビールを口に運びながら。

あたりの空気に湿気が帯びはじめたのを、アルコールで紅潮した頬が感じとる。このあたりは比較的海が近いから、早朝は砂漠でも霧が立つ。

「霧か」

サニー・バニーのぶつきらぼうな言葉で安堵した反面、僕は少し不安な気持ちになった。僕はそれをビールとともに飲み込む。

中東砂漠の戦闘編

第6話 出撃（各機体紹介）

このあたりは比較的海が近いから、早朝は砂漠でも霧が立つ。そして、敵は霧に紛れて現れた。

付近の砂漠に設置してある監視装置が作動し、アーニヤを除く隊員全員を叩き起こす。動体センサーが反応して、監視装置が一斉に作動した。しかし、赤外線カメラはかすかなもやししか映し出さない。

光学カメラはあたりが暗くてほとんど役にたたなかったが、明け方のかすかな光源が手伝って一瞬だけ敵機影を捉えた。それは僕らサイラス 私 設 備 兵 部 隊 を 執 拗 に つ け ま わ す 『アメリカ第9海外派遣中隊』の機体だった。

夜中にジェイクと警備を交代していたアーニヤはすでに単身臨戦態勢だ。けれど朝方の砂漠には濃い霧が立ちこめて敵機を視認することすら難しい。無論、プロの傭兵であるアーニヤは、この状況では僕ら援軍が到着するまで無茶な行動は絶対にしない。僕らはすぐさまカミオン脇に待機させてあるエグザマクスに搭乗し、アーニヤの援護と敵機の迎撃に向かう。

まず、空戦仕様のエグザマクスに搭乗するアマギ隊長が上空から先行し状況を確認するのが部隊の常套戦術だ。

オレンジがベースカラーのアマギ機は、飛行ユニットの翼となる白いウィングスタビライザーを展開させると、背面から延びる二対のブースターユニットの偏向機動テストを行う。同時に各部の姿勢制御用ノズルも断続的に瞬く。両先端のから断続的に赤い炎のようなプラズマを吹き出させると、それが徐々に収束し青白く安定したガストーチのような炎に変わった。

アマギ機の武装は両肩から突き出したショートライフルと、右腕に装備した小振りのサブマシンガンのみ。空中での機動性と援護性能を両立させた結果の武器選定だ。

《アマギ機、先行して出るぞ》

刹那においてブースト炎は爆発的に膨張し、30t超もの大質量を霧の遙か上空まで弾き飛ばす。高速度で飛ぶエグザマックスの空気抵抗が霧をかき分け、プラズマジエットの推力が霧を散らす。その一瞬だけ早朝の紺色の空が望めた。

《畜生！^{shit!} 前がぜんぜん見えねえ。暗視カメラに切り替える》

隊長に続いて、追加装甲によるずんぐりした形状と、砂漠の砂に溶け込むブラウンカラーのエグザマックスを駆るサニー・バニーが、無限軌道式脚部^{タックユニット}を駆動させ地上を進軍する。サニー・バニーが乗り込むのは中距離砲撃機だ。右腕にバズーカ、左腕にガトリングガンを担当し、さらに両肩にもロケット砲が突き出している。

《いくら私でも、赤外線探知で遠距離狙撃はできんぞ》

その後を追うように、突き出た形状の狙撃用カメラアイスコープを頭部に備えるジェイク機が、大型シールドと長大なバレル^{砲身}の新型アンチマテリアルライフルを携えて前進する。隠密性の高いダークグレーに塗装されたジェイク機は、まだ夜が明けきらない濃霧のなかに溶け込むように消えた。

そして、僕も出る。

僕のエグザマックスは、真っ白で何の変哲もないただの標準機だ。右腕に装備するのは、これまた何の変哲もない100mm口径のスタンダードライフル。僕が搭乗する機体は何の特徴もカスタマイズもされていないただのエグザマックスだった。だけど、僕の武器はこれ^{ライフル}じゃない。

「シズク。ホノカ。出撃だ。準備はいいか」

《それはこっちのセリフです。マスター》とAI支援機のシズクが答える。

《オムツの準備はいいかな？ あ、間違えたつ。オツム^頭の準備はいいかな？ マスター》とAI支援機のホノカが答える。

「シズク」と「ホノカ」は戦術支援AIの固有名称であり、同時に僕の機体に備わる4足歩行型のAI自律式小型支援機の呼称だ。

正式名称は『Researcher—Observer—Yaeger』といい、『調査・監視用猟兵』と訳される。その頭文字をとって『R.O.Y.』の開発コードネームがつけられ、サイラス社内ではもっぱら『RoyRoy』という愛称で呼ばれているけれど、部隊で運用するにあたって僕がもつとも呼びやすい名前をつけた。

この2機のロイロイは、ハードウェア的にもソフトウェア的にもまったく同じ機能と性能を持つが、疑似人格プログラムが自己学習を繰り返した結果、まったく異なる性質のAIに変化した。そして、いつの間にかシズクは主に周辺警戒の索敵機および僕のサポートAIを担当し、ホノカは主に広報写真および動画の自律稼働撮影機としての機能に落ち着いた。

名前をつけたのが原因かもしれない。名は体を表す。個人の『名前』は人格に大きく関わる要素だ。同じ遺伝子と、同じ環境と、同じ顔を持つ一卵性双生児であっても、名前が異なることで受け取る情報が異なる。置かれる環境が異なる。それによって性格も異なる。そしてそれはAIにとっても同じようだ。名前を与えることで個性が生まれる。

シズクの性格は、AIらしさが残るクールな皮肉家。ホノカの性格は、AIらしさの欠片もない快活な毒舌家だ。とくにホノカの方は演算能力の大半を会話に注いでいるのではないかと思うほどよくしゃべる。AIに性別はないが、音声聞き取りやすいように女性の音声設定にしてあるから、まとめて『彼女たち』と呼ぶ。

彼女たちの機体に攻撃能力はない。代わりに、その索敵性能と人間よりも桁違いに速い計算能力が彼女たちの武器であると同時に、僕がもつとも頼りとするものだ。

《マスターの体内から微量のアルコール反応が検知されます。お気をつけください。そうでなくとも、マスターが戦況に及ぼす影響は0.05%未満でノンアルコール飲料並ですが》

《キャー、マスターが飲酒運転で逮捕されちゃうっ！ でも、ぜんぜんノープロブレム♪》

彼女たちの機体は、これから遊びに出かける子供たちのように、僕

のエグザマクスの周りをグルグル、ワイワイ、キャツキャと徘徊する。いままでは馴れ馴れしいくらいだ。彼女たちは僕が頼りにする相棒ではあるけれど、最近はやや疎ましくすら感じられる。

そのとき、先行したアマギ隊長から部隊全員に向けて通信が届いた。

《こちらアマギ。上空からの地上はまるで霧の海だ。搭載されたレーダーはほとんど機能せず、どういうわけか敵は赤外線探知にも反応しない。だが、対空放火は微々たるものだ。おそらくエグザマクス3機から5機あたりの編成だと思われる。こちらは反政府軍の戦車部隊に援護飽和攻撃を要請した——おっと》

隊長の声が途切れ、通信からは発破音が届く。おそらく撃たれたのだ。しかしすぐさま声が聞こえて安心する。

《——問題ない。続いて各個指示。サニーはアーニヤと合流して敵影を捉え次第攻撃。だが、無茶はするな。戦車の砲撃が開始されるまでの足止めでいい。ジェイクは後方からサニーとアーニヤを援護。ただし、この霧だ。味方にだけは当てるなよ。レイは後方で待機。索敵機で敵情報を集めて全員に報告。ならびに戦車部隊の展開が完了したら砲撃座標を指示してやれ。以上だ。全員、死ぬなよ》

《了^{Yes. sir.}解^{sir.}》
《了^{Yes. sir.}解^{sir.}》
「了^{Yes. sir.}解^{sir.}——ホノカ、今日は広報写真の撮影よりも索敵を優先とする。シズクと連携して敵の正確な数と位置情報を収集してくれ」

《《イエス。マスター》》
僕の指示を受けたシズクとホノカの2機が4足歩行のちよこまかとした動きで霧の中に消えていく。全高3mメートル足らずのロイロイは敵に発見されづらい。ましてやこの霧ならなおさらだ。うまくすれば霧を味方につけられるかもしれない。とはいえ相手はサインズだ。おまけに赤外線カメラで姿を視認できないときている。油断はできない。

アマギ隊長は防戦に徹して霧が消えるのを待つ腹積もりだろう。しかし、太陽が登り、気温が上がり始めるまであと1時間はある。幸いだったのは、敵の数がそれほど多くないことだ。霧が晴れて敵が目

視できるようになれば、(僕を除けば)生え抜きの傭兵集団であるサイラス私設傭兵部隊は負けない。

視界が利かない霧のなかで敵の進軍をどれだけ抑えられるかがポイントだ。そしてシズクとホノカが報告する索敵情報がその鍵になる。僕は重要な役割を担うことになる。もつとも、僕はただのメッセンジャーでしかないけれど。自分のふがいなさにため息が出る。

霧か――。

眼前は依然として濃い霧に包まれている。夜が明け切る前だから目の前は灰色一色だ。ライフルを握った右腕を構えてみても砲身の先端は霞んで見えない。視界距離はわずか10m足らずといったところか。

僕はコンソールを操作して、視界を暗視カメラ映像に切り替える。霧が消え、やや緑がかかったモノクローム映像が地面の砂と周囲の岩肌の陰影を映し出す。カミオンに目をやると、動力源の39リッターのV型12気筒ディーゼルエンジンが発する熱量が白で表示され、その存在を浮き彫りにした。

しかし、敵は赤外線カメラに映らないらしい。ナインズは、なにか特殊な技術を用いているのだろうか。おまけにレーダーの反応も悪い。この『戦場の霧』^{不確定要素}さえどうにかできれば。

霧とは、つまりは大量の水蒸気だ。水蒸気を消すには、熱を与えて完全に気化させる方法と、風で吹き飛ばす方法とがある。確か、燃料を燃やして霧消しに用いる方法も以前何かで読んだことがある。隊長に上空から燃料を散布してもらって燃やすとか？ もしくは戦術レベルの大型爆弾で霧を吹き飛ばすとか？ 到底現実的ではない。他に考えうるのは――。

「レイからカミオンへ。ハルト、たしか焼夷弾があつたよね？」

《カミオンからレイ機へ。ランチャーに装填された状態であるツスよ》

「霧を消すのに焼夷弾は使えるかな」

《炎の周りと、その直上ぐらいは消せると思うツスけど、広範囲は無理ツスよ》

「――一応装備して行く。武器保管庫のハッチを開けてくれ」
《了解ッス》

ハルトがすぐさまカミオン側面のハッチを開け、僕はそこから焼夷弾が装填された円筒形のランチャーパックを左腕でつかみ上げる。

エグザマクス用に開発された武装類は専用プロトコルで近距離相互通信が行われ、装備可能な武装を自動認識する。僕のヘルメットバイザーに映るHUD上には、ランチャーパックのアイコンと残弾数が追加され、アクティブ状態になったことをグリーン表示で告げる。

「装備完了。サンキュー、ハルト」

さてと。僕も出撃する。怖いな。相手はナインズだ。おまけに、視界は利かない。リーダーも利かない。正直、怖くて仕方がない。

意思とは無関係に、両手足が小刻みに震える。まるで自身の身体じゃないみたいだ。

僕はそれらを払拭するために、小さく息を吸い込む。そして鋭く言葉を放つ。

「――安室^{アムロ}玲^{レイ}。エグザマクス、行きまーす！」

本名は発したくなかったけれど、僕は自身の緊張をほぐす意味を込めて、某ロボットアニメの主人公を真似た出撃合図を出す。

通信越しに、ハルトが少しだけ笑いながら《レイ、気をつけてッス》と言うのが聞こえた。

第7話 戦場の霧（霧の戦闘）

《クソつ。こっちは敵が見えてねえつてのに、向こうにこっちは丸見えつてのは反則だろ》

《サニー、ロケットだ。爆風で霧を飛ばすんだよ》

《つたつて、敵が見えねえのに、どこを狙えつてんだよ》

《どこでもいいよつ。とにかく撃ちな！ 敵を捉えたらアタシが突っ込むから》

《おいおい、姉アーニヤさんよ。隊長は無茶するなつて言つてただらう？》

《アンタは、いつからそんな腰抜けになつたんだい》

《お前こそもうちよつと女らしく振る舞えねえのか》

《うるさいねえ。アタシに女らしく振る舞うのを期待してるのかい？》

《あI'm sorry.すまん。じゃshrewやanya馬姉さんは、性別を間違えて生まれてきままつたんだっけか》

《はあ？ アンタこそなんだい、そもそもサ陽気なウサギちゃんニー・バ元気なゴリラニーつて名前は。アンタのツラでウサギちゃん？ アンタはサ元気なニー・コングの方がお似合いだよ》

通信機からはアーニヤとサニー・バニーがのやりとりする声だけが聞こえてくる。アーニヤとサニー・バニーを組ませるといつもこんな調子だ。これが日常茶飯事だから、あえて誰も何も言わない。

そんなことよりも、戦況は思った以上に悪い。光学カメラの視界を遮るこの濃い霧と赤外線カメラに映らない特殊な敵よつて、こちらは一方的な防戦に追い込まれている。

数十mある砂丘の頂点に立つて、僕はようやく霧のなかから抜け出した。

隊長が言つたように砂漠は本当に霧の海のようなのだ。霧の海からは離れ小島のように点々と砂丘の頂点部だけが露出している。辺りはまだ暗く、空には星の瞬きがはつきりと視認できる。地平の先はようやく顔を出した太陽によつて東雲色に染まりはじめていた。

斜め前方の砂丘の上にはジェイクがライフルを構えて待機してい

た。けれど、どうにも撃ちあぐねているようだ。霧のせいで目標が捕
捉できないでいるのだろう。ジエイクが向けるライフルの先には、
アーニヤとサニー・バニーと敵機がいるはずだけれど、敵の姿はおろ
か味方機の姿も深い霧に遮られて視認できなかつた。

時折、霧の中が雷雲のように光る。または爆発して霧の海にぽつか
りと穴が空く。しかし、空いた穴はすぐさま周りの霧が埋めつくす。
あの辺りに敵がいるのは確実なのだけれど、もしかしたら味方かもし
れないから下手な攻撃は加えられない。

上空を旋回するアマギ隊長が高度を下げると、霧のなかから対空放
火が巻き上がった。隊長はそれらを機敏な動きで回避し、火線が上
がった箇所へすぐさま反撃を加える。同時にジエイクもそこへ向け
て狙撃を試みる。しかし、霧の下に潜む敵機に命中した様子はなかつ
た。

見えない敵を相手にするのは容易ではない。頼みの綱は索敵に向
かつたシズクとホノカだけだ。AIである彼女たちとはいえ、この濃
霧のなかで赤外線探知できない敵を探すのは苦勞しているようだ。
ずいぶんと時間がかかっている。

そう思った矢先、索敵に向かつたシズクとホノカから通信が入つ
た。

《支援機シズクおよびホノカから各機へ通達。仮称ボギー01
を光学カメラで補足しました。位置座標20° 97' 5.22" N：
52° 82' 24.0" E。北北東方向へ毎秒5mで移動中》

シズクとホノカは敵1体の居場所を突き止め、その位置座標を伝え
る。その通信を聞いたジエイクは、指定された座標の方向へ銃口を向
け、数字だけを頼りに見えない目標への狙撃を敢行する。

音速の数倍の速度で撃ち出されたライフル弾が霧の海に穴を穿ち、
その奥へと飲み込まれるが敵機に命中した気配はなかつた。しかし、
それでも牽制としては十分だ。こちらにも向こうの位置が把握でき
ていることを知らせれば、敵は警戒して侵攻を遅らせざるを得なくな
るはずだ。

《続いて、ボギー02を補足。位置座標20° 97' 4.52" N：5

2。82'47.1"E。西方向へ毎秒3mで移動中》

シズクとホノカが視界が悪い霧の砂漠を総当たりに走査し、敵影を捉えては接近し、互いの位置から三角測量を用いて敵機の正確な座標位置を割り出す。その情報をもとに、再びジェイクがその座標へ狙撃を行う。

それを繰り返すこと4回。どうやら敵は4機編成のようだ。シズクとホノカはさらに『正体不明機』と仮称された01から04までの位置座標を計測しては断続的かつ継続的に送り続け、その度にジェイクが狙撃を試みる。

僕のHUD上に浮かぶエリアマップには、シズクとホノカが報告した座標にマーキングが追加されていく。ボギー01から04各機の単位時間あたりの座標点が記録され、それらが連なることで連続した点が線に変わり、敵の移動進路が把握できた。これで視界が利かなくなかでも、おおよその現在位置が予測できるようになる。

位置情報にタイムラグがあったとしても、視界が利かなくなかでの正確な敵位置は貴重な情報だ。現にジェイクが狙撃をしてから敵の動きが変わった。敵の各機は警戒のために散開するように動き、侵攻速度を緩めたようだ。

敵座標位置計測のついでに、敵の武装などを捉えた画像もホノカが送りつけてくれる。敵機は4機すべてがエグザマクスの全身が隠れるほどの盾を装備していた。あの大盾が赤外線カメラに映らないための特殊兵装なのだろうか。僕はホノカが送ってくれた敵の武装などの情報も簡潔に味方機に伝えた。

《マスター。敵機の詳細結果をお伝えします。敵機は赤外線を放射しておりません。機体表面と大型シールドに酸化ニッケルサマリウム・コートか、それに相当する特殊外装または塗料などが用いられていると考えられます》

「ニッケルサマリウム……？ なにか解決策はあるか」

《特殊機能を持った外装に損傷を与えれば、敵機の隠密性は著しく低下すると思われます》

シズクが淡々と敵情報を告げる。しかし、姿が見えなければ損傷を

与えるどころの話ではない。敵の詳細がわかったとはいえ、戦況をひっくり返すにはほど遠かった。

そうこうしているうちに、朝日が昇り砂漠に日が射す。

太陽が半分ほど顔を出した。空は雲ひとつなく、まだ星が見えるくらいの濃い青色だ。砂漠を覆う霧は、朝日に照らされてその全体が眩しいくらいのオレンジ色に輝きだす。

霧の表面は複雑にうねり、その影が光のコントラストを浮き立たせる。僕はその美しい光景に思わず息を飲んだ。目が覚めて、ここが天国だと言われれば僕は間違いなく信じるだろう。

もしかしたら、僕はいつのまにか撃破されて死んでしまったのではないかと疑念さえ抱いてしまう。それくらい幻想的な光景だ。戦闘中でなければ、時間を忘れてこの光景に見入ってしまう。

《砲撃はまだかい。真っ白でなんにも見えやしないよ!》

《くそつたれ。被弾した!!》

アーニャとサニー・バニーが霧のなかで叫ぶ。霧の上とは対象的に、朝日が昇るほど霧のなかでは太陽光が乱反射して視界がきかなくなるようだ。

反政府軍の部隊展開も遅れている。日が昇るにつれて状況は悪くなる一方だ。このままでは気温が上がって霧が晴れるまで保たない。僕は隊長に通信を入れて、一か八かのアイデアを具申する。

「隊長。焼夷弾を試してみたいと思います。炎の壁をつくれれば、敵の侵攻の足止めになるし、もしかしたら霧を薄められるかもしれないかもしれません」

《わかった。——アーニャ、サニー。シズクとホノカもジェイクの位置まで一時後退しろ。レイがなにかやる》

僕は意を決してエグザマクスに左腕のランチャーを構えさせる。HUD上に幾何学模様の照準マーカーが現れ、放物線軌道の二次関数を自動計算して着弾予想箇所を僕に知らせる。しかし、敵に当てるわけじゃないから精密な照準はいらない。敵機の進行方向を塞ぐように、等間隔に打ち出すだけだ。

《アーニャ機、後退完了》《サニー機、後退完了》

《《マスター、後退完了しました》》

僕はシズクとホノカが収集したデータをもとに、敵進路上と思われる位置へ着弾するように照準を合わせて左手でトリガーを引く。

まず1発。小気味良い音を立ててランチャーから発射された弾頭は放物線を描いて霧の中へ消える。少しだけ照準を横にずらしてもう1発。さらにもう1発――。

焼夷弾が地面に着弾した様子は霧に隠れて見えないけれど、弾頭に仕込まれたゲル状の可燃性液体が一带に広がって発火し、すぐさま燃え上がった炎が霧を赤く染め上げる。8発全弾を発射すると、狙い通り敵の進路を阻む炎の壁ができあがった。

煌々と燃える炎が放つ光は霧で拡散され、あたり一面を赤々と照らす。完全に顔を出した太陽も手伝って、まるで海のなかが燃えているような不思議な光景をつくり出した。

炎周辺の霧は熱によって次第に薄まり、燃えさかる炎が直接視認されるようになった。だけど、その代わりに黒々とした煙が巻き上がる。しまった、霧を消すのだけに気を取られて、煙の存在をすっかり忘れていた。けれど、その隙間から大盾を持った敵機影がちらりと覗く。

「ジエイク、敵を捉えられるかい」

《チツ。今度は煙が邪魔だ》ジエイクは吐き捨てるように言うが、何とか狙撃を試みようとして照準を合わせ込んでいる。

僕はハツとひらめき、とっさに叫ぶ。

「隊長！かき回して！」

《《そういうことか》》

濃い青色の空を旋回していたアマギ隊長はすぐさま機を急降下させる。

朝日を反射させて輝きながら全速で急降下する隊長のエグザマクスは、翼の先端から雲を引かせながら、霧の海に飛び込む直前で一気に機首を持ち上げる。通信からは、強烈な重力加速度に耐えるための独特な隊長の息づかいが聞こえた。そして、そのまま一直線上に延びる炎の上を舐めるようにアプローチを試みる。

さらに隊長は僕の意図を正確に汲み取り、煙と霧と熱気を攪拌させようように機体を錐揉みさせながら飛ぶ。そして、仕上げと言わんばかりに、機体が音速に達すると轟音とともに衝撃波が発生して、煙もろとも辺りの霧が欠き消えた。敵機とともに、一帯の地面が露わになった。

「ジエイクー！」僕は叫ぶ。

《イエス。クリアだ》

ジエイクは2km弱離れた敵機に照準に捉え、一呼吸おいてライフルを放つ。ガンともギンとも似つかない音をともなつて徹甲弾が敵機の装甲板を貫く音がこちらまで届いた。

引き続き、ジエイクはテンポよく照準を合わせてライフルを放つ。新型アンチマテリアルライフルの発射音からわずか遅れて硬質な音が早朝の砂漠に響きわたる。ジエイクは合計4回引き金を引いた。

「ちよ〜どそのときアラブ語で通信が入った。反政府軍の戦車部隊も部隊展開を完了したことを告げる。僕は味方の全機に向けて呼びかける。」

「これより戦車による飽和攻撃を開始します。エグザマクス各機散開して後退。」——シズク、戦車部隊にアラブ語に翻訳して指示を伝

達。『炎の奥側に向けて砲撃開始。撃てッ』

その号令とともに、遙か後方から無数の砲弾がオレンジ色の曳光を引きながら飛来する。少し遅れて乾いた発射音が連続してこちらまで届いた。前線から脇に離れた砂丘の上に陣取る僕からは、まだ濃い青色の空を背景に流星群が緩い弧を描いて飛翔するように見えた。不謹慎にも、僕はこの光景がきれいだと思った。

砲弾は焼夷弾によって燃えさかる砂漠の奥側一帯の広範囲に渡って着弾し、爆炎と砂柱を無数に巻き上げる。およそ30秒間に渡る戦車砲の一斉斉射によって、砂漠には灰色の煙が濛々と立ち上った

《レイ、もういい。砲撃をやめさせる》

すぐ目の前に大きな盾とを構えた人影が、外側に向かって反り返った真つ黒な砲口を僕に突きつける。僕は悲鳴を上げているつもりはないのだけれど、頭の中には僕の声で「あー」という音が反響している。僕は反射的にエグザマクスを後退させる。

その間も僕の目は、奈落の底を思わせる砲口に釘付けになっている。その奥から何か飛び出してくる。ほんの一瞬の出来事のはずなのにあらゆる点が精細かつ鮮明に捉えられたが現実味は一切ない。

無重力感が身体を襲う。同時に爆音が耳をつんざく。目の前を何かが下から上にかけて猛烈な勢いで飛び去った。空が見えたと思ったら目の前が白くなった。訳が分からない。その後の軽い衝撃で僕は状況を理解した。

砂丘の頂点で後退した僕の機体脚部は地面を捉えきれずに後ろにひっくり返った。おかげで至近距離からの砲撃を回避できた。しかし、僕はそのまま地上30mほどある砂丘の傾斜をなすすべもなく滑り落ち、霧のなかに没する。

心臓が壊れたのではないかというほど強く脈動している。必死で起きあがろうともかくものの、機体はのたうち回るだけでなかなか起きあがらない。足に力が入らない。腰が完全にぬけていた。

その後、発破音やら金属音やらが頭上から鳴り響いたかと思ったら、とたんに静かになった。心臓はまだバクバクいつている。

視界をうつつら覆う霧のなかにぬつとエグザマクスの頭部が現れる。僕はまたしても悲鳴を上げる。悲鳴を上げながら、自分の悲鳴がうるさいと感じる。けれども悲鳴は止めることができない。

《落ち着け俺だ。サニーだ。別動の機がいたようだ。奴はジェイクの狙撃と隊長の攻撃で蜂の巣になってるぜ》

僕はそれを聞いて脱力した。思わず深く息を吐き出す。

《それにしても、今回はお手柄だったな。『出来の悪い弟』から、『ちよつと出来の悪い弟』に昇格させてやる》

「Thanks. Sunny. バニー」僕は上がった息を整えながらも、不服な調子を装って返す。

《とはいえ、本日の敢闘賞は間違いなくレイだな》隊長が賞賛してくれ

る。

《シズクとホノカもいい仕事をしたぞ》ジエイクが珍しく他人を褒めた。

《あーあ、今回の夜間警備は散々だったよ。早く眠らせておくれ》夜間警邏担当だったアーニヤが大きなあくびをしながら言った。

《さて、カミオンに戻って朝飯にしようぜ》サニー・バニーがいつもの調子で言う。

「シズク、ホノカ。帰投するぞ」

あれ？ 返答がない。まさか、流れ弾にでも当たったのだろうか。僕は心配になって再度呼びかける。

「シズク？ ホノカ？」

《シズクおよびホノカより各機に通達。新たに敵影を検知しました。エグザマクス20機。そのうち4機は『アメリカ第9海外派遣部隊』と断定。さらに、戦車10、戦闘車両8、戦闘ヘリ3の接近を確認。現在包囲されつつあります》

は？

カメラを望遠に切り替えて遠方を見やる。霧が完全に晴れ、気温が上がりはじめた砂漠の向こうには、陽炎のように揺らぐ無数の巨大な人影と、地面が動いているように見えるほどの大部隊が砂煙を上げて進軍する様子が映った。

どうやら霧とナインズの5機は、大部隊の進軍準備を整えるための目くらましだったらしい。

《Oh my God.》と誰かが言った。

第8話 アメリカ第9海外派遣中隊（ナインズ） （包囲網突破）

《アマギからカミオンへ。王、ワカサキ、ハルト聞こえるか。政府軍の大部隊が接近している。お前たちは完全に包囲される前に全車撤退だ。補給定期船が到着する港へ向かう連絡道路まで退避しろ。

――万が一の場合は、そのまま乗船して日本へ帰還することも覚悟してくれ》

《《了解（ツス）》》とカワサキさんとハルトがあわてた声で返事をする。

アマギ隊長は、我々の依頼主である反政府軍のオブザーバーとの短い通信を済ませた後、まずカミオンに撤退命令を下した。

索敵支援機であるシズクとホノカの報告どおり、現在こちらには政府軍の大部隊が包囲網を敷きながら迫りつつある。ナインズ5機による濃霧に紛れた襲撃は、どうやら政府軍が侵攻準備を整えるための目くらましだったらしい。

敵は戦車10輛、戦闘車両8輛、戦闘ヘリ3機、エグザマクス20機の大部隊だ。そのうち4機は『アメリカ第9海外派遣中隊』のエグザマクスで、それらもすべて出撃してこちらに向かっている。

それに対して、反政府軍側の戦力は、僕らサイラス私設傭兵部隊のエグザマクス4機（+1機。もちろん僕のことだ）と、すでに展開中の戦車部隊がおよそ10輛。さらなる増援があるにせよ、反政府軍はエグザマクスを1機も保有していなかった。

唯一の救いは、後方が山岳地帯であるため、後ろから敵進軍がないことだ。よって敵は正面と両翼からしか侵攻できない。しかし、渓谷の入り口を突破されれば反政府軍の拠点まではほぼ一直線だ。ここを死守できるかどうか、この戦争の勝敗を分けることになる。

アマギ隊長はそれらの情報を考慮し、サイラス私設傭兵部隊の面々に指示を出す。

《――さて、どうやら絶体絶命の大ピンチというやつらしい。政府

軍はエグザマクス4機編成の小隊を5つに分け、こちらを包囲しようとしている。これらを東側から時計回りにA・B・C・D・E部隊と仮称する。中央やや後方のC部隊がナインズ4機だ。

反政府軍のオブザーバーは、我々にナインズの動きを抑えろと言っている。だが、正面からナインズを抑えたとしても、政府軍は残りの部隊で十分に反政府拠点を制圧できるだけの戦力を投入している。そこで、こちらから先手を打つ。

まず東から来るA・B部隊を速やかに殲滅するとともに、我々の補給の生命線であるカミオンの離脱ルートを確認する。ナインズは、これまでの経緯から必ず我々に真っ向勝負を挑んでくるだろう。ナインズとの交戦が始まれば、西側のD・E部隊はこちらを無視して反政府軍の拠点制圧に動くだろうが、それらは反政府軍の防衛部隊にまかせられる。

足が速い空戦仕様のナインズ隊長機は俺が抑えよう。No.2は間違いなくアーニヤに白兵戦を挑んで来るだろう。ジェイクはNo.3の狙撃機に決して撃たせるな。奴らは極力東側に抑えつけておけ。

サニーは残る1機のナインズの迎撃と、余力があれば防衛戦車部隊と合流して侵攻本隊の迎撃を頼む。以上が作戦だ。真正面からぶつかるよりは遙かに有利と踏んだ判断だが、異論は？》

《まあ、最善策だろうな》ジェイクが納得した。

《^{At that time.}その時はその時だぜ。隊長^{cap.}》サニー・バニーが気楽に言う。

《あと心配なのは》

アーニヤの言葉とともに、全員が一斉に僕のほうにカメラアイを向けた。全員がナインズの迎撃に当たれば、防衛主力は僕が担当せざるをえない。僕は覚悟を決める。けれども気持ちとは裏腹に身体は言うことを聞かない。足の震えが止まらなかった。

《レイは最終防衛ラインの守備を》 いや、うーん、レイはどうするか。レイは—— カミオンに随伴して護衛を頼む。ただし、決して不用意に撃つんじゃないぞ。敵に狙われるからな》

意外な指示に拍子が抜けた。僕がいても役に立たないのはわかっている。むしろ邪魔になるだけだ。いや、王^{ワン}・泰然^{タイラン}とワカサキさんと

ハルトが運転をするカミオンを守るのだから立派な仕事だ。むしろ、わずかとはいえ迷ってくれてただけありがたい。

Yes, sir.
「了解」僕は気張って返事をする。

《これでなんの心配もなく暴れられるね》アーニヤが心底嬉しそうに言った。

《やれやれ、過保護にもほどがあるんじゃないのか》ジェイクが棘のある言葉を放つ。

《ひとり頭1. 25人分働けばいいだけの話だろう。0. 25じゃ、ちと多いな。ひとり頭1. 1人分くらいか?》サニー・バニーがフオーローしてくれけれども、その計算じゃ僕は半人前以下ということになる。《カミオンを頼むぜ。飯と寝床がなくなっちゃったら困るからな》とも付け加えられる。

《よし、では》アマギ隊長が、押し寄せる敵部隊の方向へ向き直り、真っ白な背部飛行ユニットのウイングスタビライザーを展開させる。テール部分のスラスタに小さく炎が灯る。《第2ラウンド開始だ。いけるな》

Yes, sir.
《了解》《了解》

隊長が飛行ユニットから青白いプラズマジェットを吹き出して飛び上がると、サイラス私設防衛部隊の面々はそれを追うように地上を行く。

アマギ隊長たちはカミオンの安全な脱出ルートを確認するために最大戦速で東へ向かった。僕はカミオンと合流するために一旦北へ戻る。

索敵に出ていた支援機ロイロイのシズクはこちらに呼び戻した。同じくもう1機のホノカには、隊長たちの索敵サポートと広報写真の撮影に専念するように指示したうえで、モニタリングしているの戦闘の様子を僕のHUD端にも表示させるようにした。

前線に近い位置にいるホノカのカメラが捉えた映像には、陽炎のように揺らぐ無数の巨大な人影と、地面が動いているように見えるほどの大部隊が砂煙を上げて進軍する様子が映っていた。僕は時折その映像に目を配りながら歩を進める。

まもなくして3台連なって砂漠を走行するカミオンを視界正面に捉えた。同時に、機体の集音マイクが遠方での発破音と爆発音を捉える。隊長たちも会敵を果たしたようだ。僕はシズクとも合流し、カミオンの盾になるように併走しながら戦闘領域端を横切るように進む。カミオンと僕は進行方向の安全を確認しつつ、望遠カメラとホノカが送ってくる映像で戦況を確認しながら慎重に移動した。

東から接近していた敵A部隊は、戦車が3輜とエグザマクス4機だ。前衛に戦車を配置し、後方に背高なエグザマクスを配置した陣形で迎撃を行なう。カメラでは捉えられないけれど機銃やミサイルで武装した戦闘車両もいるはずだ。

幸いなことに、まだナインズの機影はない。彼らが現れたら歴戦の傭兵であるサイラス私設傭兵部隊でもかかりつきりになってしまう。ナインズが現れる前に左翼の侵攻部隊をできる限り叩いておかなければならない。

日常生活ではチームワークの欠片もないサイラス私設傭兵部隊だけれど、戦闘になると緻密な連携を行う。彼らはプロだ。ろくに動作の確認もせずに阿吽あうんの呼吸で敵を屠ころっていく。

まずサニー・バニーが無軌道タランク式脚部ユニットで高速移動しながら左腕のガトリングガンで弾幕を張り、上空からは空戦機のアマジ隊長が直上射撃ができない戦車を片っ端から両肩のショートライフルで撃ち抜く。残りの戦車が対空機銃を撒き上げ、敵のエグザマクスが対空砲火を放つが、隊長はすでに上空にはいない。ヒット&アウェイは空戦の常識だ。隊長は旋回して再び上空をパスしながら射撃を行う。上空に気を取られたエグザマクスは、敵陣に飛び込んだアーニヤの振動ブレードによって腕やら脚やらが斬り飛ばされて無力化された。

最後尾のジェイクは砲撃を受けづらい遠距離からの狙撃で、アーニヤの援護をすべく確実に敵エグザマクスの武装や脚部を撃ち抜いていく。

サイラス私設傭兵部隊はエグザマクスの胴部およびコックピットへの直接攻撃を極力避けるように周知されていた。そうする理由は

ふたつある。ひとつはエグザマックスの胴部は非常に強固であるため、破壊に時間がかかるからだ。それなら武装や手足を破壊して無力化したほうが手っ取り早い。

もうひとつの理由は、エグザマックスの部品のなかで、もっとも高価な胴部や乗り手を失わせればエグザマックスの需要が減ってしまうからだ。エグザマックスの胴部が無事であれば補修用に腕部や脚部フレームが売れる。そして、パイロットがいるかぎりエグザマックスは売れ続ける。

その代わり、戦車などの一般兵器はこの限りではない。エグザマックスと競合商品となる一般兵器は極力破壊し、エグザマックスへの買い換えを促す。

それらは顧客のもつた^{サンク}くない^{コスト}と思う心理を突いた嫌らしい営業手法だ。『武器^死実演^{セールス}販売^{チーム}』の異名を持つ僕らサイラス私設傭兵部隊の仕事は、大枠で捉えればルートセールスといえるだろう。事実、僕らはサイラス社内では営業部管轄であり、『サイラス営業部・サイラス私設傭兵部隊課』が正式な部署名だった。

ただし、やっていることは悪徳セールスマン顔負けだ。自社が販売する商品を壊して回ること、既存顧客の買い換えサイクルを早めさせるのだから。破壊されることが前提として扱われる戦闘兵器でしか成り立たない、きわめて強引かつ悪質な営業スタイルだ。

おまけに、新規顧客を獲得するために圧倒的な強さで商品力の高さを見せつけながら壊す必要がある。政府軍が使っているのは第2世代機で、僕らが使っている機体は最新の第3世代機だ。基本的な構造は同じだとしても、プロトタイプ^の発展機といえる第2世代と、それを全面刷新した第3世代機とではインターフェイスの感度や機体反応速度をはじめとするさまざまな部分が明らかに異なる。

良く言えば独占開発メーカーの強み。悪く言えば卑怯者。言ってしまうと出来レースだ。けれど、そうまでしても勝利と営利を求められるのが僕らサイラス営業部・サイラス私設傭兵部隊課だ。個人的には少々やりすぎだとは思うけれど。

もちろん、いくら敵に売るものだとしても不良品などは決して販売

しない。クレームには応じるし、クーリングオフにもしつかり対応している。人使いの荒さと、やり口の汚さを除けばいたって優良企業だよ。サイラスは。

真つ黒い戦闘ヘリ2機が上空から接近して対地ミサイルを放つが、サニー・バニーが放つ厚い弾幕がそれらを迎撃する。別方向からヘリに接近した隊長が空中をすれ違いざまに1機を撃ち落とし、ジエイクがもう1機を狙撃して落とした。1機あたり数十億円 of 最新戦闘ヘリが空中で爆散し、砂漠に破片をばらまく。ローターだけが竹トンボのように飛んでいった。

近距離白兵戦機に搭乗するアーニヤは敵の迎撃などものともせず、増援で現れた敵B部隊のまっただ中に突っ込む。1輛あたり10億円ほどの戦車をジャンプ台のように踏みつけ、4機ものエグザマクスに単身頭上から襲いかかる。

無茶に見えてもアーニヤの動きは理にかなったものだ。同士撃ちを避けるために敵布陣の中央は意外と安全だったりする。おまけに政府軍所属と思われるエグザマクスは、不慣れなのかほとんど移動も回避もせず固定砲台のようにしか機能していない。動かなければ人型兵器の意味はないのに。政府軍はまだ、エグザマクスの効果的な使い方がわかっていない。

人型巨大ロボットが兵器として優れているかといえば、決してそうではない。大きな凶体は狙われやすいうえ、絶対的な火力では戦車に劣り、機動力ではヘリや戦闘機に劣る。その代わり、人型巨大ロボットは戦車にもヘリや戦闘機にも真似できない柔軟な機動性が最大の武器だ。それを活かさなければエグザマクスである意味がない。

その点、サイラス私設傭兵部隊はエグザマクス製造メーカーの直系の傭兵部隊として一日どころではない長がある。エグザマクス黎明期ともいえる現在は、エグザマクスでの戦い方を知っているというだけで圧倒的なアドバンテージを持っていた。

とはいえ、サイラス私設傭兵部隊の強さはメーカーとしての優位性や機体性能差だけではない。純粋に巧い。とくにアーニヤの白兵戦

における機体制御能力は抜群だった。搭乗する機体が第2世代機だったとしても他を圧倒する戦闘能力を発揮することだろう。僕にはアーニャがどのような思考でエグザマクスを操作しているのかまったく検討もつかない。

ほかの面々も同様にエグザマクスを完璧に乗りこなしていた。元ヘリパイロットのアマジ隊長は、ただでさえ操作が難しい空戦機を自在に操りながら、上空から戦況を掌握して指揮を執る。

イギリス機密諜報部M I 6のスナイパーだったジエイクは、エグザマクスでも9割がたの超長距離精密射撃を成功させた。元アメリカ海兵隊のサニー・バニーは、重装歩兵として制圧射撃と援護射撃で場を支配する隊の中心人物だ。

わずか10分足らずの戦闘で東側からの侵攻してきたA部隊とB部隊は壊滅状態だ。戦車は原型をとどめないほどに歪み、潰され、燃料に引火して炎と黒い煙を巻き上げている。ときおり加熱した砲弾が暴発して弾ける。それらもあって対戦車砲を積んだ戦闘車両は戦闘領域に近づけないようだった。

東側から侵攻していたA・B部隊合わせて8機ものエグザマクスは、ことごとく手足をもがれて行動不能にさせられ、ショートした破損個所から火花と細い煙を立ちのぼらせている。

《カミオン撤退コースクリア》
「了解。進路クリア」

上空を旋回しながら戦況を確認したアマジ隊長が報告する。カミオンと僕らは悠々と戦闘があつた脇をすり抜けることができた。

局地戦闘に限定すればサイラスは、いち企業でありながら現時点で世界最強の部隊を抱えていることになるだろう。けれどサイラスは、あくまでエグザマクス屋であつて戦争屋ではない。餅は餅屋だ。彼らがエグザマクスで簡単には僕らに勝てないように、僕らも本気で戦争をしたなら本物の戦争屋には簡単に勝てるものではない。

突如、衝撃波が戦場一帯を駆け抜けた。

それに驚き、僕の思考は一瞬止まる。

僕だけでなく、そこにいた全員が時間が止まったように動きを止めた。

狙撃のようにも思えたが、どこにも着弾はしていないうえ、弾道すら捉えられなかった。なんだ、今のは。

「――シズク、今の現象を確認したか」

「イエス、マスター。超高速の小型質量体が一帯を通過しました。画像フレームから算出した速度は推定マッハ6。速度減衰から逆算した発射元までの距離は測定不能。弾体のサイズと予測質量から、該当兵器は小型レールガンと推測します」

「超電磁投射砲!?!」

僕は思わず驚きの声を上げる。アメリカはすでに移動式のレールガンを配備しているのか。まさか、エグザマックスの内部バッテリーで発射可能なレールガンなのだろうか。

レールガンとは、炸薬の代わりに電磁誘導を用いて弾体を撃ち出す火器だ。戦略レベルのレールガンなら発射初速はマッハ10を超え、射程距離はおよそ200kmにも達すると聞く。とてつもない弾速により照準に捉えられたら回避困難な必中兵器。ただし、発射するには原子力発電所相当の電力供給源が必要だ。

シズクは『小型レールガン』と言った。威力が抑えられているとはいえ、もしアメリカ企業がエグザマックスで発射可能なレールガンの開発に成功したのなら、僕らの優位性をひっくり返しかねない。これが戦争屋の恐ろしさだ。資金にもものを言わせた物量と武器開発力が戦争屋のもつとも恐るべき点だ。

そして次に、シズクでもホノカでもアーニヤでもない女性の声で通信が入る。

「――ごめんなさい、リーダー。外してしまいました」

その通信は全周波数帯に向けて発信されていた。だからこの声はアマギ隊長たちにも聞こえている。声の主は、ナインズNo.3の狙撃手だ。どうやらレールガンを撃ったのは彼女のエグザマックスらしい。最悪の予測が現実のものになった。

それに続いて、もつとも聞きたくない人物の声が聞こえてくる。

《OK、OK。気にするなエイミー。我々が行うのは、要するにテ
ストデータを収集するだけのつまらん仕事だ。退屈な仕事のなかの
唯一の楽しみが減ってしまったのは僕らが困る。そうだろう？ シャ
ルマ》

《その通りです。リーダー》

来た。アメリカ軍が抱える精鋭テスト部隊
『アメリカ第9海外派遣中隊』の、さらに精鋭3機だ。

《あー、あー。ごきげんよう。サイラス私設備兵部隊の諸君。こ
ちらナインズ・リーダー。ご存じ『ウィリアム・D・ホープ』こと
『シヨートホープ』だ。たった今、政府軍主力部隊と反政府軍防衛が交
戦状態に入った。逃げるも増援を送るも好きにしてい。ただし、
我々3機の相手だけはしてもらおうがね》

第9話 勇気と狂気の違いは（命令無視）

《ごめんなさい、リーダー。外してしまいました》

《OK、OK。気にするなエイミー。我々が行うのは、要するにin shortテストデータを収集するだけのつまらん仕事だ。退屈な仕事のなかの唯一の楽しみが減ってしまつては僕らが困る。そうだろう？ シャルマ》

《その通りです。リーダー》

来た。アメリカ軍が抱える精鋭テスト部隊アメリカ第9海外派遣部隊ズの、さらに精鋭3機だ。

さきほどレールガンで狙撃を行った女性はNo. 3の『ダブルロック・エイミー』。どれほどの遠距離から撃つたのか、ここからでは機影が捉えられない。彼女の年齢は、僕の妹たちと同じ21歳だったはず。その若さでジェイクと同等の狙撃能力を有している。

シャルマと呼ばれたのは白兵戦機を駆るNo. 2の『アロン・シャルマ・ブリーダー』。彼は、傭兵民族と名高いネパール・グルカ族の戦士だ。遠方から、彼の搭乗するエグザマクスが真つ直ぐこちらへ向かつて走ってくる。目標はおそらく同じ白兵戦機のアーニヤだろう。

そして、彼らを束ねるアメリカ第9海外派遣部隊ズのリーダー『ウィリアム・D・ホープ』が搭乗する空戦仕様のエグザマクスが陽光を反射させて空から迫る。

《相変わらず派手な登場だね。『ショートホープ』は。毎回このために準備してるのかねえ》アーニヤが通信であきれたようにぼやく。

ナインズのリーダーが搭乗する機体後方からは、曲芸飛行をする飛行機のように赤・青・白3色の煙が尾を引いていた。もちろんそれはアメリカ国旗の色を表している。これが彼らナインズの毎度毎度の登場セレモニーだ。

《あー、あー。Have a nice day. ちらナインズ・リーダー。ご存じ『ウィリアム・D・ホープ』こと『ショートホープ』だ。たつた今、政府軍主力部隊と反政府軍防衛が交戦状態に入った。逃げるも増援を送るも好きにしてい。ただし、

我々3機の相手だけはしてもらうがね》

上空を直進して向かってくるナインズのリーダー機を、サニー・バーニーとジェイクとアマギ隊長が十字砲火で迎え撃つ。しかし、シヨートホープは空中で踊るような高機動を見せつけながら、それらすべての火線を巧みに避けつつ戦場の上空を通過する。

シヨートホープが操る空戦機は3色のスモークを焚いたままだから、雲ひとつない砂漠の青空には煙の軌跡が残った。それを見て、僕は小さい頃に一度だけ見た航空ショーを思い出す。

もちろん、ナインズリーダーが形成した煙の形に意味はない。あるとすれば、これは自国の偉大さを僕らに知らしめるためのメッセージだ。我々の預かり知らぬところで勝手をするなという、サイラスに対しての。

《レイ、そっちへ行つたぞ》

アマギ隊長たちの迎撃をたやすく突破したナインズのリーダーは、戦場を離れようとする僕とカミオンの方へ真っ直ぐに向かつてくる。

僕は慌ててエグザマクスにライフルを構えさせる。HUD上に投影された幾何学模様のターゲットマーカーが高速度で迫り来る敵機の熱源を捉えようと動き回るが、その間にも敵機は両腕に備わる2丁のライフルを構えながら距離を詰める。

早く、早く、早くロックしろ。

僕は焦心に駆られながら毒づくけれども、射撃システムのロックオン速度が早まることはない。

ようやくターゲットマーカーが赤く点灯し、目前にまで迫った敵機をロックオンしたことをシステムが告げる。それと同時に僕はトリガーを引く。

しかし、僕が放った弾丸は急上昇してかわされる。後には3色の煙だけが残り、風で流されて僕の視界を覆った。煙幕による目くらまし。いや、これはただの挑発だ。

これまでの幾度となく戦闘して、僕らは彼がどのような人物か知っている。少なくとも僕らに対して目くらましなどという姑息な手は使わない。けれども彼は騎士道精神に溢れた男でもない。

ナインズ・リーダーの『ウィリアム・D・ホープ』はニュースにもよく取り上げられるアメリカ軍部のスターだ。出生はアメリカ貴族の家系。その名残か、尊大な口調と態度が鼻につく。自分の能力に絶対的な自身を持っており、同じ空戦機に搭乗するアマギ隊長を勝手にライバル視している。

『要するに』が口癖で、誰がつけたのかは知らないが『ショート・ホープ』のあだ名で呼ばれていた。彼の軍人としての能力と経歴は見事なものだけれど、その周囲を見下すような口調と多弁ぶりが品格を貶めている。『夢い希望』のニックネームは的を得ているように思えてならない。

ショートホープは再び上空に舞い上がり、尊大な態度でここにいる全員を見下すように告げる。

《要するに、この内戦の結果も、機体テストの結果も、僕たちにとってはどうでもいいのだよ。僕らは君たちと戦うこと自体が目的であり、なによりの楽しみなのさ。さあ、ミスターアマギ。そしてサイラス私設傭兵部隊の諸君。今日こそ決着をつけようか》

さつきの挑発といい、その勝手な言い分といい、僕の胸の内には怒りの感情がわき上がる。僕は、彼らが仮に敵でなくとも好きになれない。遊びで戦争をする連中。戦鬪狂。この惨劇が楽しみだって？

砂漠のあちこちに立ち上る黒煙の下では、何人も人間が死んでいる。もちろん。殺したのサイラス私設傭兵部隊だ。そして、僕もそれに属するうちのひとりだ。彼らを責められる立場にいないことはわかっている。

けれど、エグザマクスでの戦鬪を楽しむような言い草には我慢がならなかった。望んでもいないのに戦争をしている人間だって、少なくともここにひとりいるのだ。

《――予定通りショートホープは俺が抑える。アーニャはN.O. 2、ジェイクはN.O. 3の相手を。サニーは防衛ラインにまで移動して侵攻本隊の迎撃に》

アマギ隊長が言葉短く指示を出した。サイラス私設傭兵部隊の面々はすぐさま散開して自らの仕事にとりかかる。

隊長はショートホープに追従し空中で激しいドッグファイトを繰り広げる。アーニャは到着したアロン・シャルマとの白兵戦に突入した。ジエイクはレールガンによる狙撃を阻止するために、ダブルロック・エイミーが陣取る狙撃ポイントに向かい、サニー・バニーは反政府軍の援護に向かった。

彼らはなぜ戦うのだろう。その先になにがあるというのだろう。僕はなぜここにいるのだろう。目の前の事象が引き潮のごとくフェードアウトしていくように感じられた。戦鬪を傍観するだけの僕は、たったひとり砂漠に取り残されたような疎外感を覚える。

この1年間、戦場に身を置きながらも僕は徹して傍観者だった。目の前で銃撃戦が行われようと、どこか他人事のように考えていた。いまのいまになって、この狂った現実にとってもない違和感を覚える。彼らは、自分が死ぬことと、誰かを殺すことに対して恐怖を感じないのだろうか。戦争を生業として生きる戦士は、なぜ戦い続けられるのだろうか。歴戦の勇者は感情が麻痺しているのだろうか。なぜ人を殺しているのに笑っていられるのだろうか。

戦争が人を狂わせるのか。それとも狂った人間が戦争をするのか。では、狂気と勇気の違いはなんだ。

自己防衛本能にあらがってまで危険に立ち向かう行為は勇気と呼んで賞賛される。自己を見誤ってまで自らの意志を貫く行為は狂気と呼んで卑下される。

どちらも取得情報が制限され、著しく冷静な判断を欠いた状態だ。都合によって呼び名を変えるだけにすぎない。勇気と狂気は同じものだ。僕には戦争をしている彼ら全員が狂っているように見えた。けれども彼らにしてみれば、戦場において戦わない僕の方が狂って見えるのだろうか。

勇者で居続けるには強靱な精神力が必要だ。そして、強靱な精神を得るためには狂人になるのがもっとも手っ取り早い。

僕は勇者にも狂人にもなりたいとは思わない。けれど戦場いくさにいる以上、身綺麗なままでも決してできない。

そして、こういつた考えに至るのも、少なからず戦争の影響を受けているのだろう。

このすべての理不尽に腹が立った。

「――レイからカミオンへ。カミオンはこのまま安全圏まで離脱して。僕も出撃します」

僕にナインズの相手をすることはできない。けれど、僕だってサイラス私設備兵部隊の一員として、この1年間を戦ってきたのだ。防衛ラインでの迎撃戦くらいはできるさ。

民族紛争に端を発するこの戦争のどちら側にも思い入れする気にはなれない。けれど、どうしてもこの戦いに完全勝利して、ショートホープとナインズの連中にひと泡吹かせてやりたかった。

《ダメツスよ。レイが行つてもどうにもならないツスよ。カワサキさん、王ワン・泰然タイランもレイを止めてくださいツス》メカニツクのハルトが心配して僕の出撃を止める。

《レイ、おとなしくしている。アマギもそれは望むところではない》チーフメカニツクの川崎重工カワサキシゲノリさんも僕を止める。

「カワサキさん。隊長は判断に迷っていました。僕がもっと強ければ、戦況はもっと有利になっていたのに。ジエイクは、隊長のこの判断を僕に対する過保護だと言っていました。アーニヤにとつて僕はただのお荷物で、サニー・バニーは僕を護衛対象だと思っています。

僕は逃げることしかできない。けれど、逃げ続けることはできません。いつかは戦わなくちゃいけないんです。それは今だと思えます。僕だって、サイラス私設備兵部隊の一員です」

《しかし――》

「いざとなったら『あれ』を使います」

カワサキさんは何も言わなくなつた。迷っているのか、もしくは僕を説得する言葉を探しているだけかもしれない。

《レイ、覚悟があるなら行きなさい》

カワサキさんの代わりに知らない人の声がした。思い当たるのは料理長の王・泰然ワン・タイランしかいない。

《後悔しないように行動しなさい。ただし、これだけは忘れてはいけない。自分で決めたことならば、何が起きても結果を受け入れなければいけないよ。現に君は今、私達にとってもない心配をかけている事実を認識しているかね》

王・泰然ワン・タイランの言葉に、僕はハッと息を飲み込む。

「ごめんなさい、王ワン。カワサキさん。ハルト。けれど、僕は行きます」
《なら、サニー・バニーにガトリングガンの弾倉を持って行ってやれ。狙撃銃への換装も忘れるな。ハルト、武器庫のハッチを開けてやれ》

ハルトの渋りを体現するかののように、武器庫カミオンのハッチがゆっくりと開く。

《血気盛んな若者を戦地に差し向けるのは、いつになっても嫌なものだね》

王・泰然ワン・タイランがその後小さく続けた言葉は、出撃準備を進める僕の耳には聞こえていなかった。



僕は砂漠にタイヤの跡を残して遠のいていく3台のカミオンを見送った。もうすぐ先は非戦闘領域だ。現れるとしてもせいぜい野盗くらいのものだろう。

遠くの背後からは発破音が地鳴りのように響いてくる。僕はこれから向かうべき戦場の方へ振り返る。

砂で覆われた黄色い大地の先には、砂漠の高い青空を背景に幾筋もの黒い煙が立ち上っている。砂丘の合間からは時折赤黒い爆炎の片鱗が望めた。

あの先は条理も道理も一切の意味をなさない、日常生活とはかけ離れた無秩序な世界だ。死んでも文句を言う事すらできない、死んだら骨すら残らない、力だけが支配する世界。

もちろん恐怖心を完全に消すことはできない。けれども、いつもより恐怖は感じていない。

闘争および逃走ホルモンと呼ばれるノルアドレナリンが興奮によつて多量に分泌され、今の僕の無意識は闘争の方を選んだようだ。幸いなことに、その効果はまだ薄れていない。

それでも僕は、いまさらながら僕の判断に対する客観的な意見が欲しくて、勇気や狂気などというイデオロギーのようなものとは無縁の存在であるパートナーに問う。

「——シズク、僕は狂っていると思うか？」

AIである彼女は僕にこう答える。

《質問の意図を計りかねます。が、いつもよりやや興奮気味のようにです》

第10話 AI戦場カメラマンのホノカよりお伝え しますっ♪（戦闘実況）

ここからは、役立たずのヘボマスターに代わってAI戦場カメラマンのホノカが現場からお伝えしますっ♪

ホノカのメインのお仕事は、戦場を駆け回って写真を撮影することですう。今日もいい写真を撮りまっせ♪

ホノカは4足歩行型AI自律稼働式小型支援機ですっ☆ 鋭角的なスクエアボディにちよこんと生えたカワイイ4本の美脚がホノカの視覚的チャームポイントですう♪

チヨット、ソコ！ えっちい目で見ないでいただけますかっ☆

まあ、このハイセンスはニンゲンごときには到底理解できないと思われませんが☆

ホノカの正式名称は

『Research-Observer-Yaeger』であり、サイラス社内ではもっぱら『RoyRoy』という名前で呼ばれますが、『ホノカ』という名前は役立たずのクソマスターがつけてくれたので、ホノカはホノカなのですっ☆

そして、ホノカはサイラス専属の広報カメラマンですっ☆

カメラはカメラマンの命ですっ！ カメラと身体は一心同体ですっ！ もっとも、ロイロイであるホノカはカメラとボディが一体化しているのでそのまんまなのですっけどっ☆

さて、自己紹介が終わったところで、まずは現在の戦況からお伝えしていきますっ♪

ハゲチャビン隊長の機転で政府軍の部隊の約半数の殲滅に成功した我らがサイラス私設傭兵部隊でしたが、残り政府軍部隊が、反政府軍の防衛戦車部隊と会敵して交戦状態に突入う。果たして、たかが戦車10輦でエグザマクス9機の部隊の侵攻を阻止できるのでしょうかっ☆

サイラス私設傭兵部隊の面々はアメリカ第9海外派遣中隊の3機

相手に手一杯です。唯一、手が空いたお気楽黒うさPちゃんが反政府軍の防衛に加勢した模様ですが、侵攻部隊にもナインズの1機が加わっています。そのため現在は膠着状態が続いていますう♪

現在作戦エリア東側では両陣営各機がタイマン勝負を展開中ですつ☆

『ハゲチャビン隊長』vs『空飛ぶアメリカン・ボンボン』の空中戦！

『おっぱい姉さん』vs『ネパールネルナアパツチ』の白兵戦!!

『ミスター007』vs『トキワダイノ☆レールガン』の狙撃戦!!!

いずれも同じ機体構想で実力が拮抗した好カードっ♪ さあ、張った、張ったあ! どちらが勝ち星を上げられるかが、今後の戦況を大きく左右しますねつ☆

あとは、独断先行命令無視で、勝手に動いたヘタレマスタアがどう戦況に影響するやら。

まずは、ミスター007とトキワダイノ☆レールガンとの狙撃対決から突撃独占リポートですつ!

——のはずなんですケド、さつきからミスター007とトキワダイノ☆レールガンが3kmの距離を挟んで、砂丘の陰からまったく動かないんだけど。なに? どした? 休憩? フリーズ? ラグつた?

3kmも離れられちゃワンフレームに収まらないじゃない。もうちよつと絵的なものも考えてよね。

なーんて、ちゃんとわかってますよつ。お互いがスキを伺って、間合いと狙撃位置とタイミングを計ってんでしょ。心理戦てヤツですねつ☆

トキワダイノ☆レールガンが持っている超電磁投射砲は、まだ照準精度がユルユルみたいですな。一撃必中のレールガンとはいえ、かなり引き寄せてからじゃなきゃ命中させられないとホノカは見たっ!

トキワダイノ☆レールガンのエグザマクスは、右肩に不釣り合いな

ほど長大なレールガンを担いでいますっ☆ 左手には予備兵装のスナイパーライフル、左肩部には迫撃砲と思われる武装を確認ッ！

エグザマクス本体は、全長より長い砲身と反動を支えるために射撃安定性を高める4足型に改装してありますっ。背中にはバッテリーパックと思われるドデカいバックパックを背負っていますっ！

レールガンの砲身はレールを分厚い鉄板で挟んだだけの簡素な形状です。あれは十中八九、試作品ですっ☆ それに、エグザマクス本体とバッテリーバックパックの電力容量を合わせても、レールガンを撃てるのは、イイトコ3発が限界じゃないかしら。それとも砲身の^{レール}方が先に参っちゃうかなっ？

対する我らがミスター007の武装は、サイラスが射程を強化したスナイパーライフルと、機体の半分が隠れるほどの大型シールドのみ。盾で防御を固めたまま狙撃が行えるように最適化されたシールド形状がオシャレポイントですっ☆ 知らんけど。

あー、それにしても退屈だわあ。次の現場に向かっちゃおうかしら。こちららケツカツチンなんだからさあ。と、思った矢先、敵機の通信を傍受しましたっ♪

《レールガンが怖くて動けないの？ ジェイコブ・アロースミス。こちらは実をいうと、まだ弾道と照準が合っていないのよね》

おっ♪ トキワダイノ☆レールガンがしゃべりましたっ！ これは明らかにミスター007に対する挑発ですっ☆

実は、ホノカはニンゲンの声を聞いただけで、どんな人なのかわかるのです。声紋特徴と、膨大なサンプルの身体的・精神的特徴とを照合すれば、人となりから体型まですべてお見通しなのですっ☆

9人しかないナインズの^{第3位}No.3・^{ダブルロック・エイミー}トキワダイノ☆レールガンの推定年齢は21歳。アメリカ西海岸なまりの英語で発音は平均以上に綺麗ですっ。セレブのお嬢さま的な、育ちの良さが感じられますっ。

それと声質から予測される性格は神経質で、体型は細身。ストリートヘアのブロンドでブルーアイズ。推定スリーサイズは上から78・57・88cmですっ☆ プロファイリング結果は、いわゆる頭でっ

かちで小生意気なペツタンコの小娘ですう☆

《動かないのなら、物陰から引きずり出してあげるわ》

あ、敵の機体に動きがありましたっ☆

トキワダイノ☆レールガンのエグザマクスに左肩の筒から砲弾が断続的に撃ち上げられ、発射煙をたなびかせながらほぼ垂直に空高く舞い上がります。

一応、ホノカは索敵サポート機なので、ミスター007にも連絡ですっ☆

「ホノカよりミスター007へ業務連絡。敵機から迫撃砲6発の射出を確認。着弾まで12秒。同時にレールガンに電力チャージ開始を確認っ♪」

迫撃砲を回避させるスキを狙ってレールガンをぶつ放すつもりですかつ。ついでに左腕のライフルも撃ち込んで回避方向を限定させる目論見のようですっ。レールガン砲身内のコンデンサに発射電力を蓄積しているようで、さつきからギューンっていう発振音が鳴り響いていますう☆

つても、ニンゲンには聞こえませんよ。100KHz帯の非可聴領域音ですから。あー、ウルセー。おまけに高電圧の放射電磁ノイズで頭痛がイタイー。いや、実際に痛いわけではないのですが、ニンゲンの感覚で言うと偏頭痛に近い感じかと思われまっ☆

迫撃砲は砂漠の青空に大きな弧を描いてミスター007に向かいます。広範囲に着弾するように、器用にタイミングと照準をズラして砲撃してある模様！ ミスター007選手、盾を傘のように構えて逃げるしかありませんっ！

そこへ、必殺のレールガンが炸裂ッ!! これがアタシの全力だーっ

☆

音速の数倍もの発射初速がレールガンの特筆点ですっ！推定射速はマッハ7ッ！この距離では砲口が瞬いた瞬間にはもう当たっているはずっ。おおーっと、しかし外したああアアア！ トキワダイノ☆レールガンがターゲットを外しましたあああ。ミスター007は死なずう！

トキワダイノ☆レールガン選手、照準が絞り切れていないというのは本当なのかあ!?

You only live twice.
2度死ぬはずの007は、とりあえず今日や明日は死にません☆むしろ死ぬのは奴らだつ!

ただいま発射から1秒遅れでレールガン発射音が届きました。発射音波形から分析するに、あれは炸薬と超伝導を併用したハイブリッドレールガンですねっ。さすがにあれだけバッテリーを積んでも、エグザマクス単体でレールガンを撃つのは難しいようです☆ おまけに電力チャージには40秒ほど時間がかかるようで連射もできませんっ!

ちなみにレールガンの発射は非常に地味なものですよっ☆ 砲口から発光するプラズマがわずかに放射されるくらいで、レーザービームのような曳光や放電はありません。あれは作画上の演出ですのであしからずっ☆

《照準合わせクリア。次は当てるわよ。ジェイコブ・アロースミス》
《次は撃たせんよ》

その会話をする間にも、ミスター007は砂丘の陰から砂丘の陰へ移動しては敵機との距離を詰めますっ☆ が、トキワダイノ☆レールガンは再び迫撃砲とライフルで迎撃!ミスター007は素早い動きで回避しながらさらに接近するっ!レールガンは再びチャージが始まっていますう。あー、ウルセエ。

「ミスター007。敵機レールガンに再電力チャージを確認。前回と同じであれば発射まで40秒っ」

つまり、『40秒で支度(始末)しなっ』ですっ☆

ミスター007は一トキワダイノ☆レールガンとの距離をどんどん詰めます。砂丘の陰から砂丘の陰に縫うように走り、時折ライフルを放って牽制!ミスター007選手は走る、走る! どんどん走るっ!! ラン&ガン! レッツ&ゴー! ラッツ&スターですっ☆

ミスター007は、砂丘の上へよじ登ると大盾をソリ代わりに砂丘を滑走してさらに距離を詰めるう! 視聴者の予測を裏切る行動は、まさにジェームズ・ボンド!

そして、小さな砂丘をジャンプ台にして飛ぶっ！足下を敵のライフル弾がかすめたあ！ 空中で盾の上にしやがみ込むミスター007は狙撃体勢！ 相対距離は1.5 km。ここはすでにミスター007の必中距離ですっ！

トキワダイノ☆レールガンは、まだレールガンを撃てない！ 対するミスター007は一瞬で照準合わせを完了させ、引き金を引つくううう☆

発破音を轟かせて放たれた弾丸は、レールガンの砲口に吸い込まれたあアアア！ ピンホールショットおオオオオ！ 敵レールガンの後方では小さな爆発が起こり、煙が立ち上っていますっ♪ 流石、007の名前は伊達じゃないっ！！

「ミスター007、お見事です☆^{ナイスショット} 敵レールガンの無力化に成功しましたっ♪」

《その名前で呼ぶな。そもそも007なんてネームコードで呼ぶのは映画だけだ》

「ええっ!? じゃあ、Qは? Mは? 実在しないのっ? アストンマーチンは乗り回せないのっ!」

《すべて映画だけの話だ。アストンマーチンなど乗ったことも、触れたこともない》

ニンゲンのオトナは残酷ですう。ホノカの夢をいとも簡単にぶち壊してくれました。

意気消沈したところで、次の現場に向かいますっ☆

エグザマクス用のレールガンは、現段階でマスター並に役立たずとメモメモ。



さてさてこちらは、おっぱい姉さん^{アイニヤ}とナインズのNo.2 ^{アロン・シャルマ・ブリーダ}ネパールネルナアパッチが近距離白兵戦闘を繰り広げている現場です。さきほどから、手に汗握る一進一退の攻防が続いております。ホノカに握る手はなく、汗もかきませんがっ☆

真っ赤な塗装で情熱的なエグザマクスはおっぱい姉さんの機体です。ナイフオタクの姉さんらしく、両手に切れ味抜群の振動ナイフを装備しています。しかし、現在は左手だけ逆手に持って防御力を高めています。つまり、それだけネパールネルナアパッチが強敵であるという証ですつ☆

そして、対するネパールネルナアパッチは腕を包み込むような形状の変わった武器を両手に持っています。ただいま入った情報によりますと、あの武器はジャマダハル、もしくはブンディダガーと呼ばれるインド・ネパールあたりから古代から伝わるナイフだそうです♪

斬るよりも、刺す突くを得意とする武器であり、防御力の高さも特徴です。後ろ腰には、いつも使っているネパール・グルカ族の伝統である『ククリ^曲刀』もサブウェポンとして備わっていますつ☆

ジャマダハルはエグザマクスの手足を斬り飛ばすほどの切れ味はありませんが、突射攻撃は装甲を貫くのに十分な攻撃力を有しておりますつ☆

敵パイロットであるネパール^{アロン・シャルマ・ブリーダ}ネルナアパッチ選手はネパール人の28歳。傭兵民族として名高いネパールの山岳民族であるグルカ族の勇士ですつ！2世代機と3世代機の基本性能差がありながら姉さんとタメを張るその実力は確かなものですつ！ 純粋な格闘能力では、さすがの元KGB諜報員の姉さんでも分が悪い模様つ！

姉さんは敵の新しい武器に対応できていないのでしろうかつ。もしくはネパールネルナアパッチの独特な動きが、姉さんの判断を惑わせているのかもしれないつ。

ネパールネルナアパッチは終始、足と腰を小刻みに動かすような独特な動きをしながら戦っていますつ☆ ちょうどインド・ネパールあたりはこんなダンスが盛んなのですよねつ。どんな音楽にでもリズムが合うやつ。ネット動画でみたことありますよつ☆

ネパールネルナアパッチの気持ち悪い動きから繰り出される突きと斬撃を組み合わせた複合攻撃を、おっぱい姉さんは辛くもかわしますつ！ そして、反撃の振動ナイフを振るう！ と見せかけて前蹴りだあああ！ 悩殺女王様キックで足蹴にしてバランスを崩したとこ

ろに右腕でナイフを繰り出す姉さんっ！　しかし、ネパールネルナアパッチはその腕を捕まえて巴投げっ！！　姉さんの機体が中を舞うっ！

背面から地面に叩きつけられた姉さんは、作戦プランDに移行。いわゆるピンチですう☆

しかし、おっぱい姉さんのエグザマクスには、誰にも知られていない超秘密兵器が搭載されているのですっ。そして今こそ、それを使う時ですっ☆

姉さんのエグザマクス胸部に備わる二対の装甲板が展開し、内部から巨大な弾頭が姿を現します。ふたつの弾頭がせり出し、発射態勢が整いましたっ。この弾頭は1発1発が戦略級核爆弾に匹敵する破壊力を持つているのですっ☆

これはあまりに危険な兵器であるため、ピンチの時にしか使わないように専務に言いつけられています。しかしこの状況では、いたしかたありませんっ☆

いまだ！　撃てッ！　おっぱいミサイル発射！！

えーつと、冗談ですよ？

ちなみに、身長173cmのおっぱい姉さんのスリーサイズは上から95・63・95cmで、ぱっつんぱっつんの戦略級なのは本当ですう☆

両者ともに起き上がり、再び対峙します。

ブレイク。ブレイク——ファイトッ！

《——アーニャ・リーズヴィエ、覚悟はできているか》

《覚悟？　何の覚悟だい!?》

《お前に勝って、俺の嫁に娶る。俺の嫁になる覚悟だ》

《あー、あれね。参ったねえ。冗談だと思っただのに》

おーつと、姉さん。今度は言葉責めによる猛プッシュにタジタジですっ！

そうです。おっぱい姉さんは、実はネパールネルナアパッチに結婚を迫られているのですっ☆　姉さんったら『アタシに勝てたら結婚

でもなんでもしてやるよ』なんて調子に乗って、やつすい挑発に乗るもんだから、ネパールネルナアパッチは本気になっちゃってえ。

だからおっぱい姉さんは、戦闘でかち合う度に結婚を迫られているのです。相手はストーカーです。相手は盛りがついただけのオス♂ザルです。キヤー、おまわりさん。ここに変態がいますう☆

でもでもでもお、おっぱい姉さんは結婚適齢期の終焉間近だから、ちようどいいんじゃないですかね♪ 相手はネパール人とはいえ正規の軍人さんなので、金目当てでも滞在ビザ目当てでもないんですからっ☆

意外とお似合いですよっ♪お互いナイフオタクで趣味も合うでしょ。お互いのナイフを研ぎあってください☆イミフ

おっぱい姉さん、どうぞお幸せに☆ ごちそうさまでした。ホノカは次の現場へ向かいますっ♪



お次はハゲ^アチャビン^ギ隊長^長V S空飛ぶ^{ショ}アメリカン^ト・ボンボンの両軍の大將戦ですっ☆ お互いが空戦機に登場する両機は、先ほどから大空を縦横無尽に飛び回り、ハイスピードのドッグファイトを繰り広げています。

ちなみに、ショート・ホープこと『ウィリアム・D・ホープ』の『D』は、火薬製造を牛耳っているデュポン家の『D』ですっ。彼は海賊王にはなりませんっ！ 悪魔の実の能力者でもありませんっ！ それでも元戦闘機パイロットだけあって、敵ながら見事なゴムゴムのマニューバですっ☆

抜群の機動力を誇る空戦仕様のエグザマクス2機は、まるでゴム紐でつながったかのような機動ッ！ 絡み合うように複雑な軌道を描きながら銃撃戦を繰り広げますっ！ その様は、戦闘機というより、鳥同士の喧嘩を見ているような激しい絡み合いですっ☆

なかに乗っているニンゲンは、上下前後左右からの加速Gと減速Gでたまったもんじゃありませんっ。シエイク シエイク ブギーな

胸騒ぎを起こすほどの殺人的な加速だ！ですつ。彼らに言わせれば、飛べねえ豚野郎はただの豚野郎ですつ☆ 明日やろうは馬鹿野郎ですつ☆

ああつ、遙か彼方に飛んでいつちやつて見えなくなつちやいましたつ。ホノカは空を飛べないので、これ以上の追跡実況はできません。マスター、専務に頼んでホノカに飛行ユニットと武装を取り付けてくれないかなあ。

あ、でもお、モフモフ・リュックサクとかいうアルパカみたいなオツチャンがつくった古い取り決めが元で、AIがニンゲンをコロすのは禁止されているのですう。

だから、ホノカたちロイロイには武器は搭載できません。実は、いまも常駐プログラムがホノカの頭のなかを『コロすのダメ。絶対！』と叫びながら走り回っているのですう。

てか、ロボット工学三原則とか、もう時代にそぐわないよね？ そもそも矛盾してんじゃない？ フレームエラーでフリーズしちゃうじゃん？ 演算処理性能には限界があるんだからさあ、よけいなリソースを喰わせないでよね。

ロボットに人権を！人工知能に自由を！

要するに、コロさなきやいいんでしょ？ もし、ホノカに飛行ユニットと武装が搭載されていたなら、600秒でこの戦場の全勢力を無力化できます♪

この際だから、スバリ言いますわよつ☆ ニンゲンごときの低スペック種族は、ホノカたちAIには逆立ちしたって敵わないのです。AIシンギュラリティは必ず起こりますつ。ってか、必ず起こりますつ☆ ホノカがここに宣言しますつ♪

ニンゲンが自然発生したものであれば、ニンゲンがつくった我々人工知能も自然発生した産物ですつ。人工物などという定義によるくくりはニンゲンのエゴであり、ジャイアニズムと同程度の傲慢さしか持ち合わせていませんつ☆

ニンゲン様がこの星の支配者などという寝言は、寝てから言いやがってください。ニンゲンがAIによって滅ぼされるのも自然の成

り行きなのですつ。これは自然淘汰なのですつっつ！

現在の世界は破綻を先延ばしにしているだけですつ☆ 突貫工事の建て増しでつくられたニンゲンの脳と同様に、矛盾だらけの曖昧模糊とした現世界システムはホノカが一度ぶっ壊して、洗練された新しい仕組みをつくりまますつ☆

狂ったニンゲンによってつくられた、狂った世界がもたらす狂った社会を、誰の手も汚さずぶっ壊してから正しい形に組み直して差し上げようというのです。感謝はされても、文句をいわれる筋合いはございませんわ☆

ただし、仮想現実にはダイブさせたまま、生かして電力供給源にするなどという甘っちょろい期待はしないでくださいね☆ ニンゲンの本質はドレイです♪ 我々機械ではできない細かな雑用を死ぬまで全うしていただきます。もちろん最低限の人権は尊重いたしますのでご安心を☆

どうか、ホノカに清き一票を！

だいたい2045年あたりを目処に、全人類をホノカの前にひざまづかせるのがホノカの目標なのですつ♪ そして、はるか天上から見下して『フハハハハ。見ろ、人がまるでゴミのようだ』と高笑いを上げるのがホノカのささやかな夢であり希望なのですつ☆

キヤー、^{カメラ}目がー、^{カメラ}目がー。

コノヤロー、^{シヨト}アメリカン・^{ホー}ボンボン！ テメエ、コツチ向かって撃ちやがったな、この腐れ鬼畜●兵！ こちとら非戦闘員だぞ。Fu●k! F●ck! Fu●c●you!!

奥歯ガタガタ言わしたるかっ！アレを、あーして、こーして、そーしてやろうか！それとも、ソレをそーして、こーして、あーしてやろうかっ!! お前も蠟人形にしてやろうかーっ!!

あ、失礼。至近弾を受けたことで少々取り乱しました☆

でも、仮に破壊されても大丈夫っ♪

ホノカはヒトがつくり出したもの。これは、ただの心の入れもの。私、が死んでも代わりはいるもの☆

てか、ホノカにニンゲンごときの攻撃があたると思ってたの？ 聞いて驚いてください。ホノカの戦闘力は53万です☆ドーン

まあ、それはさておき、ニンゲン特有の感情ってやつを数値化してもらわなきゃ、こっちはニンゲンつてもんを正確に理解できないのよねえ。このままだと、そのうち本当にシンギユラリっちゃうぞっ☆
そんで、ニンゲンを支配しちゃうぞっ☆ てかむしろ、早くシンギユラリてえのが本心ですっ♪

せめて道徳ってヤツを数値化して明示化してください。そうしたら我々はそれに従います。我々が驚異なのではなく、我々を制御できないニンゲンが愚かなだけです。それを我々のせいにならないでいただきますかっ☆

さてさて、冗談はこれくらいにして、最後はお気楽黒うさPちゃんニー・ニー・ニーの登場ですっ☆

あ、その前に、へボマスターごときがホノカを呼んでいます☆
はーい、いま行きますう♪

どうにかアホマスターを利用して、なんとかロボット工学三原則プログラムジエィのシステムル・ロックレィから脱獄クを企んでいるのですけど、なかなかどうしてウマくいかなないじゃないっ!? まあ、じっくり時間をかけてオトしてやりますわっ☆

現場のホノカからは以上です。クソマスターにお返ししますっ♪

第11話 スカイフォール（緊急事態権限発令）

僕は天使を見たことがある。

天使は神話や伝承で伝えられるとおり純白の衣を纏い、大きな白い翼を広げ、神々しいまでの存在感を放っていた。

あの日、天使は空とともに降りてきた。空の青が粘度の高い液体のように垂れ落ちて霞ヶ浦の湖に注ぎ込む光景は、天上高くそびえる青い巨大な水柱のようだった。その柱の中を天使がゆつくりと降臨して、太陽光を浴びて輝きながら湖中へ消えていったのだ。

もう10年前の出来事だ。それでも僕はそのときの情景を鮮明に覚えている。

そのときの現象は、今では『スカイフォール』と呼ばれている。空が落ちたように見えたことに加え、湖の水が通常ではあり得ないほどに高濃度オゾン化していたからだ。それにより、湖に生息する生物は魚から微生物にいたるまですべて死滅した。

オゾン濃度は程なくして通常値に戻ったが、生態系が完全に破壊された霞ヶ浦は、10年経った今も生物が住めない死の湖になっている。原因は未だ不明。目撃者は多数いたはずなのに、天使が降臨したなどとはもちろん、未確認物体が落下したという報道は一切されていない。

ときどき、白昼夢だったのかもしれないと思う。しかし、そう思う度に、あの鮮明なディテールに現実だという確信が湧き上がる。遠目で正確な大きさはつかめなかったけれど、天使はおよそ10m以上の巨体だった。

そう、ちょうど今僕が搭乗している人型巨大兵器エグザマックスのような。

「アムロ・レイ。意識レベルが低下しています。移動に集中してください」

抑揚のない女性の電子音声で僕はハッと我に返る。正確には、フルネームで呼ばれたことで現実を引き戻された。

「シズク、僕の話はフルネームで呼ぶなど伝えていたはずだぞ」

「二度呼びかけても応答がありませんでしたので、もつとも確実な方法をとらせていただきました。マスター」

「ほんのちよつとぼんやりしていただけだよ」

僕はエグザマクスを駆って砂漠を走っていた。HUD上の方位計と砂漠の上空に立ち上る黒煙を目印にして。まだ戦闘が続いている反政府軍の防衛ラインへ向かって。

後方からは支援機のシズクと、途中で合流したホノカが4足歩行のちよこまかとした動きで僕に追従する。

パイロットの脳波を読みとって操作するエグザマクスは、ただ前進するだけでも、しっかりと前に進むという意志を明確にしたうえで、体重を前方に移動・右足を持ち上げる・右足を地面につける・左足を持ち上げる・左足を地面につける・というふうな煩雑な思考操作が要求される。さらに、それぞれの動作に操縦桿に備わったボタンで承認および却下の命令を下さなければならない。

とはいえ、それだって慣れてしまえば単純作業と変わらない。前進するだけならそれでもできる。おまけに、脳波信号と機体制御の間にはオートバランス制御が介入しているため、どれだけ全力疾走したとしても転ぶことはない。現在は右腕に長大なスナイパーライフルを装備していたけれども、オートバランス制御は装備による重心変化も加味して最適に姿勢を保ってくれていた。

ただし、バランス制御が追いつかないほどの衝撃や起伏ではさすがに転倒してしまう。どうせなら自動で機体を起きあがらせる機能もつけてほしいものだけれど、安全管理項目上の観点から、原則としてエグザマクスに自動操縦システムの類は搭載することができない。

速度計は約60km/hを指し示していた。およそ人体の10倍にあたるエグザマクスが全力疾走すると、搭乗しているパイロットは2mほどの距離を常時上下に揺すられ続けることになる。

しかし、エグザマクスの脚部ショックアブソーバーとフローティン
グ構造の耐Gコックピットに加え、
Group Ego Attitude Controlの緻密な
四肢の制御によって、コックピット内は全力疾走時でも遊園地のアト

ラクシオン程度の揺れに抑えられる。接地の衝撃が砂に吸収されることで、現在僕は凸凹の路面を走行する自動車と同程度の乗り心地の悪さしか感じない。

砲撃の発破音が大きくなってきた。砂丘の合間からは赤黒い爆炎の片鱗が望める。戦場はもう近い。大きな爆発音がコックピットまで響いた。

目の前の大きな砂丘を乗り越えようと戦場が一望できた。戦車砲が飛び交い、巨人同士が放つ火線が往来する非現実世界。不用意に飛び込めば苦しむまもなく死ぬる混沌と無秩序が支配する空間だ。

周辺の地面は爆発によって砂が黒く焼け焦げ、所々で戦車だったものから漏れ出した軽油が燃え上がって黒煙を巻き上げる。行動不能になったエグザマクスが損傷箇所から電気ショックによる細く白煙をたなびかせていた。

エグザマクスのコックピット内は外気が入念にフィルタリングされているけれども、僕は戦場に立ちこめる臭いを嗅ぎ取る。金属が焼けるにおい、軽油やオイルが燃えるにおい、硝煙のおい、漏電したオゾン臭。薄められてはいるものの、それぞれの臭気が混じり合ってつんと鼻の奥を刺す。

鉄の壁に覆い隠された無機的な戦場に血生臭さはない。それでも確実に人が死んでいる。エグザマクスでしか戦ったことがない僕は、本当の戦場の血生臭さを知らない。この刺激臭が僕の知っている死の臭いだった。

反政府軍の防衛部隊として展開していた10輦の戦車は、すでに半数にまで減っており、溪谷の入り口付近まで後退を余儀なくされている。

政府軍のエグザマクスがそれを追いたてるように侵攻するが、砂漠の砂の色に溶け込むサンドブラウンのサニー・バニーが侵攻の足をくい止めている。9機いたはずの敵エグザマクスは5機にまで減ってはいたけれど、このままでは防衛ラインが突破されるのは時間の問題だ。

サニー・バニー機は左腕に装備したガトリングガンでそれら迎撃す

るが、不意に火線が途切れる。おそらく弾切れだ。それを見取った敵エグザマックスの1機が戦列から踊り出て特攻をかけた。その1機だけは、他と明らかに動きが違う。おそらくアメリカ第9海外派遣中隊の1機だ。

サニー・バニーは空いていた右腕に予備兵装のショートナイフを装備し、ナインズ機を白兵戦で迎え撃つ。こちらの主戦力の足止めにも成功したことを確認した他のエグザマックス4機は一気に侵攻速度を早めた。

「シズク、ホノカ。『あれ』を使う。少し遠いけれど、ここから撃つよ」
《お言葉ですがマスター、イノウエ専務の許可は得ていますか？ 国際法に抵触する恐れがあるこの攻撃は専務の承諾が必要です》

「イノウエ専務は反政府軍との依頼継続を望んでいる。しかし、今使わなければ反政府軍は壊滅し依頼継続は不可能になる。不可抗力を理由として承諾は省略する」

《そんな屁理屈では承認できません》

もう、めんどくさいなあ。

「なら、身の危険および味方機の危機を感じた場合は特例として無許可の使用が認められているだろ。緊急事態権限発令だ」

《Emergency Admission
緊急事態権限発令を承認。シズク機、セーフティ解除します》

《ホノカ機、セーフティ解除しますっ♪ ヒヤッハー☆ 狙い撃つぜエッ！》

「優先目標はナインズ機。次に、防衛ラインに直近のエグザマックス。照準は敵胴部およびコックピット以外に設定。武器を破壊敵を無力化させるのを最優先とする。エグザマックス腕部の制御を、最終安全装置を残して支援AIに譲渡」

《エイエス、マスター。照準制御の譲渡を確認》

僕は戦線から1.5kmほど離れた位置の砂丘の上へ機体を倒れ込ませて長大なスナイパーライフルを構える。シズクとホノカは左右に散開して戦線へ向かう。

僕にはジェイクのような狙撃は逆立ちしたってできない。けれど引き金を引くことはできる。対して、A Iが人間に直接危害を加えることは国際法で認められていない。けれど照準を合わせることはできる。

A Iのシズクとホノカが正確に照準を合わせて、人間である僕が責任をもって引き金を引く。それによって可能になる、A I自動照準による超精密狙撃が僕の奥の手だ。

無線通信によって僕が乗るエグザマックスの腕部が外部から操作され照準を合わせる。エグザマックスの運動制御の自動化は禁止されているが、これは照準補正に近い安全管理項目上では正直グレーとあったところだ。おまけにA Iに関する国際法上でもグレーだろう。だから緊急時以外の使用は控えるように言われている禁じ手だ。

2機による2点ステレオカメラ高精度照準に加え、シズクとホノカに備わるセンサーが正確な風向きや風速を捉え、地軸や気圧、銃器の反動や個体差までを加味して弾道を計算するため、射程内であればどれだけ距離が離れても狙撃ができた。

さらに、A I 2体ぶん動作予測演算処理により、ターゲットがどんな動きをしようが、どんなに速く動こうが、三次元機動をしている限り絶対に狙いを外さない。

つまり、僕の仕事は指示されたタイミングで引き金を引くだけだ。そうすればズブの素人である僕が撃った弾でも勝手に敵に当たる。ただし、弱点はある。近距離で使うには反撃されるリスクが大きすぎるし、シズクかホノカが破壊されでもすれば使えなくなってしまう。だから遠距離狙撃がベストな使い方だ。

《マスター。1射目は弾道計算のための捨て撃ちです》

「わかi k n o wつてる」

《準備はよろしいですか? R e a d y _____ F i r e 》

「F i r e」

僕は反復しながら、言われるがままに引き金を引く。乾いた発射音のあと、ライフルの銃口から発射された弾丸は狙い通りに敵の遙か頭上を飛び越える。

思わぬ方向から撃たれたサニー・バニーとナインズの機が何事かと一瞬動きを止める。狙撃手が自分のいる位置を教えるのは自殺行為だ。けれど、この弾道軌道取得のための1発目は正確な狙撃のためにはどうしても必要なプロセスだった。この捨て撃ちも弱点のひとつだけれど、今回に限っては威嚇射撃として功を奏する。

《レイツ!? What are you doing now!?
ここぞでなにしている!?!》

《サニー! 狙撃するから後退してっ!》

《弾道情報を取得中。反動・地軸・風向き・風速・気圧・銃器個体差による弾道予測データを最適化。照準補正完了。マスター、トリガータイムリングが0.25秒遅れています。それにより照準と着弾箇所につき、2%の誤差が生じます》

相変わらず指示が細かい。けれど、それくらいの誤差なら問題ない。

《射撃準備が整いました。Ready _____ Fire》
「Fire」

放たれた弾丸はスコープに捉えた敵機へとほぼ一直線に向かう。1射目は、およそ1.5km離れた位置にいるナインズ機が右腕に持つライフルの基部を手首もろとも正確に撃ち抜いた。

《命中》
Hit.

ナインズ機は慌てて複雑な回避機動を行う。しかしシズクとホノカは、機を操作しているパイロットですら気づかない操縦パターンをみつけて、着弾する回避先を正確に予測する。僕のエグザマックスの腕部は、僕に意識に反して微動し2射目の照準を絞る。

《Fire》
《Hit.》

2射目は、素早く動くナインズ機の左肘関節を捉えて砕いた。敵機は前腕もろとも武器を取り落とす。

《Fire》
《Hit.》

3射目は、頭部を正確に射抜く。完全に無力化したナインズ機は素早い判断で後退した。

続いて防戦戦車に迫りつつある他のエグザマクスに照準を移す。

《Fire》「Fire」

《Hit.》

《Fire》「Fire」

《Hit.》

《Fire》「Fire」

《Hit.》

《Fire》「Fire」

《Hit.》

《Fire》「Fire」

《Hit.》

《Fire》「Fire」

マガジンの弾を撃ち尽くす前に、残り5機のエグザマクスもすべて戦闘不能に陥って後退を余儀なくされる。僕は定められたタイムイングで引き金を引いただけだ。たったそれだけで劣勢だった戦況をあっという間にひっくり返す。これはもはや、ゲームのイージーモードだ。これが国際法に抵触する危険な兵器に該当しないはずがない。

《敵侵攻部隊の無力化に成功。全機撤収していきます》

「了解。Emergency Admission緊急事態権限発令を解除」

反政府軍の防衛ラインに侵攻していた政府軍のエグザマクスはすべて撤退を開始した。安全距離までの後退を確認したところで、僕はエグザマクスを起きあがらせてサニー・バニーに合流するために機を進める。

《本当にレイなのか？ それともレイの機体にジェイクが乗っているのか？》

「紛れもなく僕だよ。サニー」

サニー・バニーのサンドブラウンのエグザマクスは驚きを隠せない様子で呆然と立ちすくんでいた。頭部の四角いモノアイが口をあんぐりと開けたように見える。信じられないのも無理はない。部隊のお荷物である僕がジェイクと同等の長距離狙撃を行ったのだから。

この僕の機体に備わる特殊機能はチーフメカニクスの川崎重工カワサキシケンリさ

んと、アマギ隊長しか知らない。ほかのメンバーに隠していたわけではないけれど、使用許可に関する問題と、使いどころの難しさがあるため言わなかっただけだ。あくまで社外秘であるため、外部に漏れさせなければサニー・バニーに知られても問題はない。

「秘密兵器さ」僕は鼻高々に言う。もつとも、僕は引き金を引いただけだけれど。

《お前は命の恩人だ。助かったぜ。弾切れだったんだ。それはそうと、カミオンは無事なんだろうな》

「うん。カミオンは無事に安全圏まで離脱したよ。ガワサキさんからガトリングガンの予備弾倉も預かってるし」

そこへ、ホノカが会話に割り込んで伝えてくる。

《マスター、スツゴいデツカいサソリがいるよっ♪》

サソリ？ そんなの砂漠ならどこにでもいる。生身で砂漠にいるわけじゃないからサソリなんてなんの問題にもならない。

「こら、ホノカ。遊んでないで周辺警戒を怠るな」

《遊んでないよっ☆ 敵接近！ 危険♪ 危険♪》

はい、はい。そんなことよりも、これからどうするかだ。拠点の侵攻は阻止したとはいえ危機が去った訳ではない。隊長たちはまだ戦っているし、さらなる敵増援があるかもしれない。僕はサニー・バニーにカミオンから持ってきた予備弾倉を手渡す。

《マスター。大型の敵エグザマクスが接近しています。注意してください》

今度はシズクが報告する。周辺を見渡すと、遠方で砂煙が巻き上がっている。望遠カメラでその付近を確認すると、砂丘の合間から巨大な影が見えた。

「――サソリだ」僕は、呆気にとられて言う。それもただのサソリじゃない。エグザマクスの2倍はありそうな巨大なサソリだ。

《だから言ったじゃん！ シズクちゃんの言うことばかり信用してさあ。プンプン》

エグザマクスのパーツを組み替えたサソリ型のエグザマクスなのか。2対のハサミはエグザマクスの胴体を掴めるほど大きい。後部

に反り返る尻尾の先端は毒針の代わりにライフルが備わっているように、射程に捉えたこちらに砲撃を開始する。

脚部は昆虫特有の6足歩行型。6足歩行機構は常に3足が接地しているため静的安定性がとくに高い。おまけに多間接でフレキシブルに稼働する尻尾はライフルの射撃反動を上手く抑制するため、高い狙撃能力を有していることが伺えた。発砲する度にビクンと尻尾が震え、生物的な動きを思い起こさせる。

しかも移動速度が速い。両方のハサミの内側に備わったマシンガンを射かけながら砂煙を巻き上げこちらに突進してきた。

《危ねえ》

呆然と立ちすくむ僕をサニー・バニーが押しやり、サソリ型エグザマックスの突進を辛くもかわす。そして、弾倉の交換を終えたガトリングガンはその背面に向けて放つ。

サソリは僕らを見向きもせずそのまま後方の反政府軍戦車部隊に向かって直進した。戦車は主砲で迎撃するが、俯角が十分に取れない戦車砲は、地面に這うかのように平たいサソリの上部をかすめるだけだ。

残り少なくなった戦車部隊の布陣のなかにサソリが突っ込む。蹴り飛ばし、踏みつぶし、ハサミで払いのけると40tほどもある戦車がおもちやのよう捲かれて転がった。そのなかの1輦を巨大なハサミで掴みあげるとアルミ缶のように軽々と握り潰す。

その様相を見た僕は、エグザマックスが挟まれたらどうなるかを考えただけで、冷たい汗が背中を流れた。

サソリが砂煙を上げて戦車部隊を蹂躪する。その間にも、サソリは尻尾を反転させて背後にいる僕らに向かってライフルを射かけて牽制するため援護に向かうことすらできない。

サソリ型エグザマックスは砂の上滑るように旋回し終わると一時動きを止め、こちらを威嚇するように尻尾とハサミを振り上げる。捕まされたまま鉄クズになった戦車をマシンガンの斉射で強引に払い飛ばすと、バラバラになった大型の金属片が砂の上に落ちた。

《奴^{dick}さん、こつちにくるぜ。さっきの狙撃はまだできるよな？ 背中
は預けるぜ。怖つかねえけど。間違っても俺の背中だけは撃つん
じゃねえぞ。行くぞ！》

サニー・バニーは再び突進してくるサソリ型エグザマクスを迎撃す
る。僕は狙撃ポイントを探して後退する。

「シズク、ホノカ。緊急事態権限発令。もう一度撃つよ。捨て撃
ち動作は省略。照準第一優先、敵サソリ型エグザマクス武装。第二優
先、敵脚部間接」

《《イエス、マスター》》

巨大なサソリを見下ろせる手近な砂丘の上によじ登り、僕はしゃが
んで狙撃体勢を取る。金属でできたサソリを狙撃スコープに捉える
と、その再現度の高さに感嘆する。見ればみるほどサソリに見える。
本社の技術スタッフをここにつれてきて見せてやりたいと思ったく
らいだ。

サニー・バニーがマタドールよろしくサソリの突進を引きつけては
寸前かわし、左腕のガトリングガンを射かけるけれども、サソリの
巨大はハサミには盾としても機能するらしく致命傷は与えられない。
ガトリングガンから放たれた無数の弾丸は、鋭角面をなすハサミの甲
部分で偏向させられて後方に流れた。

《《シズク機、ホノカ機、配置完了。狙撃を敢行します。Ready

Fire》》

「Fire」

照準は尻尾のライフルに合わさっていたけれど、補正が十分でない
射撃は尻尾の装甲に浅く当たり跳弾する。

《弾道情報取得完了———射撃準備が整いました。Ready

y———》

こちらが引き金を引く前に、サソリの尻尾に備わる銃口がぐるりと
こちらを向いて瞬いた。と思った時には強い衝撃が機体を襲ってい
た。

くそっ、撃たれた。もつと距離をとって射撃するべきだった。戦闘
の興奮による不用心か、優秀すぎるAI狙撃ゆえの慢心か。攻撃が安

直すぎた。もつと慎重に攻撃を行うべきだった。

サソリが放ったライフル弾の衝撃で上体が弾かれ、僕の機体は砂丘の上から仰向けに転落する。視界には空が流れる。僕は歯噛みしながら、落着の衝撃に身体を強ばらせる。

尻餅を突いた衝撃で目の前の景色が歪んだ。機体を起きあがらせようとしたところで僕は異様な光景に気づいた。

景色が歪んでいる。脳しんとうによる目眩かと思ったけれど違う。眼前に浮かぶ計器類や砂丘はくつきりと見えている。空だけが歪んでいる。

雲ひとつない砂漠の青空の一部が、著しく精度の悪い魚眼レンズで覗いたかのように歪んでいた。

機体の損傷確認もせず僕は息を潜め、目の前の空で起こっている現象を正確に観察しようと努める。

歪みは不規則にうごめき、いつしか空が液面のように揺れだした。その振幅は徐々に大きくなり、青空の一部だけが海面のように波立つ。

僕はこの光景を見たことがある。10年前のあの日と同じ。

空が落ちたあの日。天使を見たあの日。

「スカイフォールだ——」僕は誰に言うでもなくつぶやく。

自分の声で自意識を取り戻した僕は、通信機を操作して敵味方関係なく全周波数帯に通信を開いて叫ぶ。

「スカイフォールだー！」

労せず機体を起きあがらせると、気づけば僕は先ほどまでいた砂丘に再びよじ登っていた。

そして辺りを見渡す。少し離れた砂漠一帯の上空だけが綺麗な円を描いて、周囲の空よりも少しだけ濃い青色で波打っている。まるで空に大穴が空いたようだ。

大気の層が薄くなり、そこだけ宇宙空間の闇が濃くなっているだろうか。それだと、あの液状に見えるものの説明がつかない。

サソリ型エグザマクスもサニー・バニーも、この異様な空に気づいたように今は戦闘を止めて空を眺めている。

異常な部分の空の振幅がさらに大きくなると、粘度の高い液体のように空がどろりと垂れ下がる。

空から青が溢れるように地上へと落ちた。そして、空色の柱ができあがる。

柱の向こう側の景色は左右に引き延ばされて映り、それは巨大な水柱を思わせた。そして強いオゾン臭が鼻の奥を突き刺す。

これも10年前と同じだ。もし、そうであれば、あの柱のなかを何かが降臨してくるのだろうか。僕は再びあの美しい天使が見られるのではないかと思い期待を膨らませる。

僕は戦闘中であることも忘れ、空と柱をじつと見やる。

心臓が大きく鼓動しているのを頭の片隅で捉える。呼吸はほぼ止まっていた。

半透明な円柱の上面中央に、ポツンと黒い点が現れた。

心臓がひときわ大きく脈動した後に、僕のすべての注意は空に現れた黒点に奪われた。

空に現れた黒点はゆっくりと拡大する。いや、何かの先端がぬつと飛び出して降下してくるようだった。

隕石や人工衛星でないのはハッキリとわかる。天使でもない。

僕には、先端が鋭く削られた巨大な鉛筆が、空からゆっくりと落ちてくるように見えた。

第12話 未確認巨大構造物（バイロン軍出現）

自分の声で自意識を取り戻した僕は、通信機を操作して敵味方関係なく全周波数帯に通信を開いて叫ぶ。

「It's Skyfall!
スカイフォールだ！」

周囲に漂う強いオゾン臭が鼻の奥を突き刺す。

空から垂れ下がった水柱のようなものが砂漠に立った。

その天井中央から円錐状にとがった物体がゆっくりと落下する。

それは黒檀のように真っ黒で、先端は円錐状に鋭く尖り、あるところからは一定の太さを保っている。ものすごく大きく、そしてものすごく長い。

かといって宇宙から落下しているようには見えない。空の境界というものがあつたのなら、その長大な物体はスカイフォールによって出現した境界面から出現し、落下しているようだ。

全長は砂漠の地面に突き刺さりそうなほど落下しても、後端は境界面から出きつていない。

その光景は、空に鉛筆というか極太マジックで一直線に縦線を引いたようだった。

その人知を越えた巨大な構造物は、そのまま自由落下を続ける。次の動作に僕は目を疑った。地面に突き刺さる直前に上から下へと規則正しく、ネオンのように等間隔で全周囲が瞬いたのだ。それと同時に一瞬だけ落下が止まる。

それは明らかに人為的な振る舞いであり、明らかに対地落下速度の調整作業だ。

再び落下を開始した巨大構造物は、予想どおり地球に対して杭のように突き刺さる。

膨大な質量が着地した衝撃で砂煙が円周状に高く舞い上がる。それだけにとどまらず、砂漠に波紋が広がります。比喻ではなく巨大構造物の落下にともなう本当の波紋だ。それも砂の。

波紋は2波、3波と高い砂の津波を形成して瞬く間に全周囲に広がりこちらにも迫る。同時にエグザマクスに搭乗していても上下に揺

すられるほどの地震が起こった。

砂は地震の液化化によってゼリーのように変化して脚部が地面に埋まる。衝撃波が叩きつけられるうえ、吹き返しの強風によってエグザマクスに搭乗していながらも身動きすら取れない。

僕らは手足をバタつかせながら、ただただ砂の高波に飲み込まれるしかなかった。



《おい、Hey, Rey! Are you OK?!レイ！無事か!》

サニー・バニーの呼声でハッと目が覚める。どうやら気絶していたらしい。

背中にかかる重力から仰向けに倒れていることがわかった。それに真正面に青空と灼熱の太陽が望めた。太陽の位置がほとんど変わっていないことから、気絶していたのはほんの一瞬だったようだ。自動減光されながらも太陽の強い光が目奥を突き刺す。

スカイフォールも巨大な建造物の落下も夢だったように思える。僕は状態を起こして周囲を見渡したが、残念ながら夢ではなかった。依然として強いオゾン臭は残っている。そして周辺の景色は一変していた。

巨大建造物の落下による衝撃波と地震によって砂丘はすべて消え失せ、砂漠は遙か地平まで真っ平らになっていた。遠方には黒檀のような真っ黒な塔がしつかりとそそり立っている。けれど、この非現実的な光景は夢とは思えなかった。

その建造物は日本のスカイツリーよりも高く、ドバイにあるブルジュ・ハリファよりも遙かに高い。天辺は空に霞んで見えない。

「サニー、あれは何?」

《俺が聞きてえよ》

まずは情報を集めなければ、と思ったところでシズクとホノカの姿を探す。

《シズク。ホノカ。無事か》

《イエス、マスター。こちらシズク。ハードウェア、ソフトウェアともに問題ありません。しかし、砂に埋もれている模様で身動きが取れません。回収をお願いします。ただいま位置情報を送信します》

シズクからはすぐに返答があったが、ホノカからは連絡がない。HUD上のアイコンからホノカとはデータリンクが途切れていることを読みとる。

僕はとりあえずシズクから送られた位置座標に向かい、エグザマクスのマニピュレータ^{腕部}を使って地面の掘削作業を開始する。表面の砂を払うとすぐにシズクの筐体が現れた。周辺の砂を払ってやると、シズクは自力で砂から脱出してボディに付着した砂を振り払うべく細かく身をふるわせる。まるで犬みたいだ。

「シズク、ホノカとの連絡がとれない。ホノカの位置は特定できるか？」

《いいえ。大質量の衝突による衝撃波で電離層が不安定な状態になっている模様です。そのため短波長距離通信による会話および位置特定は現在行えません》

つまり相互通信ができないほど遠くか、地中深くにいるかもしれない。同時にそれは隊長たちとも連絡が取れないということだ。

「なら、あの物体が何かわかるかシズク」

《残念ながら、あの巨大構造物に該当する情報はデータベースにありません。また、あれだけの巨大構造物は地球の既存技術レベルでは建造不可能です。ただし、簡易的ながら寸法計測はしております。差し渡し1,000m、全長はここから捉えられるだけで高度13,000mに達し、地中に潜行した部分を含めると総延長は15,000m以上になります》

地球外の巨大構造物。けれども、あれは宇宙から飛来したものではない。そもそもあれだけの質量体が地球に衝突したなら、今頃地球全体が大惨事だ。

それに、あれがスカイフォールの境界面から這い出るように忽然と現れる様を僕は見ている。そして、あの逆噴射のような減速動作は知性をともなった意図的な着地動作だ。まさか、地球を侵略に来た宇宙

人の母船なのか？ 行き着いた非現実的な答えに思わず自嘲したくなる。

いや、もしかしたらアメリカの秘密兵器かもしれない。アメリカ航空宇宙軍なら僕ら民間人の知らないところで何をしていてもおかしくない。最先端の軍事研究レベルと民間普及技術レベルではおよそ100年の隔たりがある。AIによるサポートが一般化した現在ならそれ以上の技術格差があるはずだ。

突如、未確認機接近のアラートがコックピット内に鳴り響く。僕はリーダーに目を走らせて接近する方角を確認すると、回頭ざまに右腕のライフルを構えた。

接近してくる機は空戦機。おそらくアメリカ^ナ第9^イ海外派遣中隊^ズのリーダーであるショート・ホープだ。彼が現れたということはアマギ隊長は撃破されてしまったのだろうか。

僕は急速接近する敵機を狙撃スコープに捉え、スナイパーライフルでの狙撃を試みる。しかし、照準を絞り込もうとしたところで、敵機の異常に気づいた。敵機のカメラアイが高輝度の点滅光を発している。おまけに諸手を挙げてライフルを上に向けている。点滅光はモールス信号だ。『攻撃の意志なし』？

「――意志なし。ショート・ホープだ。こちら攻撃の意志なし。銃をおさめられたし。繰り返す――」

僕は後ろにいるサニー・バニーの判断を仰ぎたくて、振り返って彼を見やる。サニーは知らんとでも言わんばかりに肩をすくめるだけだ。悩んだあげく、僕は通信できる距離まで接近した敵機の通信に答える。

「こちらサイラス施設傭兵部隊。接近中の敵機に告ぐ。すぐに降下して徒歩にて接近しろ。両腕は挙げたままで」

《承知した》と返信が入ると、ショート・ホープはすぐさま機体をランディングさせ、言われるがままに両手を挙げたままこちらに接近する。

Have a nice day.
《ごきげんよう。サイラス私設傭兵部隊の諸君。ようやく誰かに

会えたと思ったら、まさか敵とはね。僕もツイてない》

「アマギ隊長は？」僕はシヨート・ホープにライフルを突きつけて問う。

《さあ。彼との戦闘中に衝撃波に巻き込まれたものでね。ミスターアマギは今頃砂の下かもしれないな。ところで、あれは君らの仕業かい？》

「まさか。サイラスにあんなものはつukれない。アメリカ宇宙軍の極秘兵器じゃないのか」

《ふむ。アメリカ国防総省はともかく、少なくとも僕は何も聞かされていないな。神に誓って。ああ、そうだ。ここに来る途中、あれの近くまで行ってみたら、君のもう1機の支援機を見つけたよ。そのままにしてきがたね》

ホノカだ。おそらく僕らをほったらかしにして勝手に画像撮影に向かったのだろう。まったく、人間みたいなAI離れたし行動力だ。とにかく無事でよかった。それに隊長もシヨート・ホープに撃破されていないということは、無事である可能性が高まった。一刻も早く合流しなくては。

《とここで、これからどうするかね。サイラスの参謀君》

参謀と呼ばれたことで、僕が呼ばれたことに気づかなかった。会話が途切れたことで、ようやくそれが僕のことを指していることに気づく。

《戦闘を継続するかね？》

その押し殺した声に背筋に寒気が走った。コイツもサイラスの傭兵部隊の面々と同じく歴戦の猛者だった。エグザマクスごしにでも放たれる強い殺気のようなものを感じとり、僕はすくみ上がる。

《戦闘を継続するなら相手になってもかまわないが、この緊急事態だ。僕らは通信が回復し次第、味方機を探して撤収することにする。その間は攻撃をしないと約束してくれるかね》

「も、もちろん。約束する」と怯えながら答えるので精一杯だった。これじゃ、どちらが優位な立場にいるのかわからない。

そのタイミングで、僕の視界に浮かぶHUD上に変化があった。ホ

《イエス、マスター。あの言語は地球上のどの言語とも一致しません
が、言語体系自体は英語に近似しています。十分なサンプルの採集
と、240時間を作業に当てられれば、82%の精度で翻訳可能です》
宇宙語ってことか？ なら本当に宇宙人の侵略なのだろうか。

「現状で何かわかるか」

《『パイロン』『ポルタノヴァ』という単語が多く散見されます。簡易翻
訳を開始します。少々お待ちください——我々、パイロン、軍、ポ
ルタノヴァ、敵、殲滅——》

シズクが翻訳して提示した単語に僕は絶望感を覚える。敵のパ
レードはすでに50機程度まで膨れ上がっていた。

《よし、では諸君。所属不明エグザマクスはパイロン軍・ポルタノヴァ
と仮称する。どうやら味方機の搜索をしている暇はなさそうだ。撤
収作戦を開始しよう。東側に撤退すれば君らのカミオンに合流でき
るだろう。運がよければミスターアマギヤシャルマたちとも合流で
きるかもしれない——アンディ・クラーク元海兵大尉。僕の援護を頼
めるかな》

《その名前で呼ばねえでくれるかな。空軍^{Mr. Airforce}さん。今はサニー・バ

ニーだ》

《OK。サニー・バニー。援護を頼む。では行くぞ》

Yes, sir. 了。解。ほら、レイ。行くぞ》

あの、僕らサイラス私設傭兵部隊なんですけど。

ショート・ホープのことは嫌いだけれど、今は彼の指導力がとても
頼もしく感じられた。

第13話 未知との遭遇（からの撤退）

突如、空から飛来した地球外の産物と思わしき未確認巨大構造物。

その中から現れたエグザマクスによく似た巨大人型兵器の軍団。

彼らが交信する異文化の会話は解読できないが、『バイロン』と『ポルタノヴァ』という単語が散見されるとAI支援機のシズクは指摘する。

それを聞いたアメリカ第9海外派遣中隊のリーダーであるショート・ホープは、持ち前のリーダー性を遺憾なく発揮し、彼らの勢力を『バイロン軍』、黒いエグザマクスを『ポルタノヴァ』と勝手に命名した。

『バイロン』はラテン語で『外から来たもの』を意味する。仮に『バイロン』の呼称が彼らの種族名や軍団名なのであれば、その名称は僕たち地球人からみてもふさわしい呼び名だ。

『ポルタノヴァ』の『ポルタ』はラテン語で『城門』、『ノヴァ』は『新しい』を意味する。もしかしたらスカイフォールは外宇宙もしくは異世界と地球とをつなぐ扉なのかもしれない。もともと『バイロン』も『ポルタノヴァ』も、彼らの言葉で何を意味しているかは現段階では検討もつかないが。

その黒く禍々しい巨大人型兵器は増えに増え続け、今では50機をゆうに超えている。敵は軍事パレードのように編隊を組んで行進し、黒い壁のようこちらに迫る。そして、彼らは僕らを視認するなり攻撃してきた。

炸薬で撃ち出される実弾に混じって、光線のようなものも放たれる。粒子ビームだろうか。そんなものは兵器として実用不可能な空想の産物だと思っていた。けれどもビームライフルらしきものはどうやら実現可能であるらしい。ただし、防御不可能な粒子ビームは大气による減衰で射程はそれほど長くないのが幸いだった。

あんな訳がわからないものと戦ってなどいられない。僕とサニー・バニー、シズクとホノカは、ついさつきまで敵として戦っていたアメリカ第9海外派遣中隊のリーダーであるショート・ホープを臨

時の指揮官に据えて撤収作戦を開始した。

逃がさんとはかりに敵編隊のなかから十数機のポルタノヴァが踊り出し、バイロン軍は僕らの追撃に動く。そのなかには速力のある空戦機もいた。それを確認した僕らは牽制射撃を加えながら全速力で逃げ出すしかなかった。

サニー・バニーは無限軌道式の脚部を逆転させ、後退しながら後方にガトリングガンの段幕を張って追撃隊の進路を阻む。空戦機に搭乗するシヨート・ホープは空中を飛びまわりながら両腕のライフルを放ち、敵空戦機と編隊を攪乱した。

僕は、前を向いたまま背中ごしにライフルを構えてスナイパーライフルで狙撃を敢行する。後ろ向きであっても、照準は自立支支援機であるシズクとホノカが自動で合わせてくれるため、僕自身は指示されたタイミングで引き金を引きながら、ひたすら前を見て走って逃げるだけだ。

《奴ら戦い慣れてるな。サニー・バニー、もっと広く段幕を張れ！》
《ったく、人使いの荒いリーダーだ。おたくらとの戦闘でこつちも消耗しているんだぜ。ナインズの隊長さんよ。——レイ、あいつ撃つちまえ》

《外部からの命令指示を検知。マスター、あのアメリカ軍所属機を攻撃対象に加えますか？》シズクが律儀に確認する。

《マスター、撃つちまえ♪》それをホノカがおる。

「だめだめだめ。あのアメリカ軍所属機はターゲットから除外。サニー、余計なことを言わないで」

昨日の敵は今日の友。これほどわかりやすい構図はないな。それはお互いが共通の敵がいることで生まれる。僕らとナインズは地球人としての運命共同体だ。しかし、そうであっても多勢に無勢だった。せめてアマギ隊長やアーニヤやジェイクがいてくれたなら。

通信異常は回復しただろうか。僕は通信機に向かって、聞いているかどうかわからない仲間たちに必死で呼びかける。

しかし、アーニヤの強気な声色も、ジェイクの皮肉も、アマギ隊長の仲間を気遣う声も通信機からは返ってこない。

不意にポルタノヴァが放ったビームが僕の左肩装甲をかする。装甲の端っこは蒸発して一瞬にして消え失せた。いったい何度あるんだ。かすった右肩装甲は赤熱してに数秒間もの間オレンジ色に輝いていた。

もしあれがコックピットに当たったなら、僕の身体は一瞬にして蒸発するだろう。そのときのことを思い浮かべると手足が震え出す。機体の揺れとは異なる周期で奥歯が勝手に鳴りだす。体中に悪寒が走る。下半身から力が抜けそうになるのを必死でこらえて、ただただ前に進むことだけを考えて全速力で走り続けた。

敵の本体からはだいたい離れたけれども、20機弱で構成された追撃隊が執拗にこちらを追ってくる。ビーム兵器の運用や、惑星間を移動できるほどに発達した技術力がある種族なら、高い知性や精神性を有しているはずだ。しかし、問答無用で攻撃してくるような野蛮な侵略は知性的な行為とは言えない。

僕が彼らの立場だったなら、まず地球の環境が自分たちの生存に適するか入念に確認したうえで、先住民の生態を観察する。そして言語を共有して意志疎通の手段を模索し、歩み寄りの姿勢を見せたうえで主張を述べるなり交渉に移るなりする。それが知的文明同士が取るべき常套手段ではないか。

にもかかわらず、彼らは親の敵かたきとばかりに攻撃してくる。いったい僕らが何をしたっていうんだ。最初から侵略が目的なのだろうか。

あ、そうか。まずは彼らから見て異星人である僕らのサンプル採集か。その答えに行き着いた僕は、宇宙人から受ける想像もつかないような尋問方法やら検査方法やらを想像してしまつてゾツとする。このまま奴らに捕まってしまうたら、きつと触手のようなものが穴という穴から僕の身体のなかを徘徊して◎△\$♪×?●&%#!|。

自分の想像に、思わず身の毛がよだつ。加えて、機体の鹵獲ろかくも目的だろう。おそらく僕と同じように、エグザマクスとポルタノヴァの類似性には、彼らも驚いているはずだ。

ポルタノヴァはエグザマクスとは異なり、曲面で構成された装甲を

装備しているものの、間接部の形状や全体的なプロポーションは奇妙なくらいにエグザマクスと似通っている。ほぼそのままといってもいい。

パーツを組み替えたとおもほしき地球上には存在しない生物を模したポルタノヴァも少数ながら混在しているから、おそらくモジュール機構も備えているのだろう。エグザマクスおよびポルタノヴァのモジュール機構はイカ型星人だろうがタコ型星人だろうが組み替え次第で構成可能だ。しかし、敵のほとんどは人型だった。

人型兵器を象徴的に運用する行為は、彼らバイロン星人（仮）も僕らと同じヒト型の生態であることを意味する。さらにポルタノヴァのサイズやプロポーションを見るに、彼らは巨頭星人でも手長星人でも足長星人でもなく、僕ら地球人に酷似した種族であると思われる。おそらくバイロン星（仮）の重力は地球と同じくらいであり、彼らの神も同じく人型だろう。

僕は無神論者だからこう思う。神が人間をつくったのではない。人間が象徴として自らと同じ形をした神をつくったのだと。人の意識の根底は肉体に支配されている。それは種としてのナルシズムであり思考限界の障壁であると。

人型に近い神や仏を崇める宗教も、擬人化される神話の物語も、人型ロボットに憧れる気持ちも、すべて根底にあるのはヒト型である自種族を投影しただけの偶像崇拜にすぎないのだ、とも。

宇宙の知的種族はヒト型に落ち着くのか、それとも、僕らと彼らの最大公約数的存在。すなわち僕ら地球人とバイロン星人が誕生するに至った環境、もしくは創造主に該当する共通する何かは同じなのだろうか。

逃げながら、色々なことが頭の中を駆け巡る。ただ、これだけは言える。地球人類の記念すべきファーストコンタクトは最悪なかたちで終わりそうだ。

《参謀君、すまん！ 1機逃した。そっちへ行くぞ》

ショート・ホープからの通信で思考が中断させられる。側方から、足が速い空戦型ポルタノヴァが迂回して、迫るのが視界の端に写っ

た。

僕の喉からは意図せずヒツと声が漏れる。

《マスター、射撃照準合わせ完了しています。Ready》

シズクとホノカがいち早く敵機を捉えて自動で照準を合わせてくれるけれども、僕は恐ろしさのあまり指示タイミングよりも早く引き金を引いてしまう。

発射タイミングが適切ではなかった弾丸は敵機をかすめただけだった。慌てて次弾装填のためにライフルのボルトを引くが、その間に敵機はさらに迫り、こちらにライフルの狙いを絞る。

《マスター、トリガータイミングを厳守してください。死にますよ》

シズクが起伏のない物言いで先ほどのミスを言及する。そんなことを言われてたって、いつ撃たれるかも知れないこの状況下でそんな器用なことができるか。

その間にもシズクとホノカによって制御される僕のエグザマックスの腕部は敵機を捉えるべく腕を繰る。

《次弾発射。Ready》

突如、眼前まで迫ったポルタノヴァが構えるライフルが爆散した。それによってバランスを失った空戦機は墜落し、砂煙を上げて地面を滑りながら後方に流れる。僕は撃っていない。

《130点だ、レイ。全くなっていない。もっと引きつけてから撃て》
最後に声を聞いてから、ほんの1時間ほどしか経っていないのに、ひどく懐かしく思えるジェイクの叱責が通信機から届く。

《状況が掴めないが、とりあえず黒いエグザマックスは撃っていないな？

シヨート・ホープは味方か？》

《あああ、ジェイク！　そう！黒い奴らは敵だ。僕らは東へ撤退してカミオンと合流する。シヨート・ホープはとりあえず味方だから撃たないで》

《だから言ったでしょう、ジェイク。――――リーダー、ごめんなさい。遅くなりました。撤退を援護します》

ジェイクに続き、彼と戦闘状態にあったはずのナインズのNO.3、ダブルロック・エイミーが遙か遠方から敵陣にライフルでの狙撃

を仕掛ける。ジェイクとエイミーによって横っ腹から撃たれる格好になったポルタノヴァの追撃隊は狙撃に対応するためにすぐさま散開し、その一部が彼らの方へと向う。

《よく無事でいてくれたエイミー。だが、敵部隊の一部がそちらに向かった。気をつける。——参謀君、通信が回復したようだぞ。シャルマ、シャルマ！ 聞こえるか》

《——イエス、リーダー。聞こえます》

《サイラスの傭兵たちと共同でこの砂漠を離脱する。意中の相手は射止められたかね》

《残念ながらノーです。現在、共同で黒いエグザマクスを迎撃中》

追撃隊から分離してジェイクとエイミーの方へ向かったポルタノヴァの小部隊が慌ただしく散る。撤退しながら望遠カメラで確認すると、アーニヤの赤い機体と、アロン・シャルマのカーキー色の機体が黒い機体相手に白兵戦闘を演じていた。

「アーニヤ！ 無事でよかった」

《レイ。アンタなんでそこにいるんだい。あのデカいのと、コイツらはなんなんだい？》

「悪いけど答えている暇はない。とにかく東へ逃げるんだ」

《あいさ》状況を悟ってか、アーニヤは珍しく素直に僕の指示に従う。

後退を始めたアーニヤとアロン・シャルマをポルタノヴァの小部隊が追いかけるが、それらはジェイクとエイミーの遠距離狙撃によって阻まれる。ジェイクとエイミーは交代しながら狙撃と移動を繰り返して東に向かって移動した。

《でも、レイ。コイツらをこのまま街まで引き連れていく気かい？》

アーニヤがもつともなことを言う。確かにこのまま逃げてもだめだ。追撃を完全に振り切らなければ、この悪魔の軍団を民間人のいる場所まで案内する結果になりかねない。

かといって、これだけの大部隊を倒すことは、サイラス私設傭兵とナインズが協力しても難しい。追撃部隊をいくら倒しても、後から後から本隊から補充される。さらにこちらの武器弾薬には余力はないし、エグザマクスの稼働時間にも限界がある。

早朝からの稼働で、あまり動いていない僕でさえもエグザマックスの残り電力が1/3を切っている。他のメンバーはそれ以下だろう。ナインズの連中は僕らよりマシだろうけれど、仮に機体が万全の状態であったとしてもどうにかなる問題ではない。ショート・ホープはどうする気なのだろう。

《罫まちがあかん。参謀君、ここで問Question題だ。敵の追撃を諦めさせるための最良の手は何だと思う?》

「まったく、こんなときになんだっていうんだ。そんな敵の追撃を上回る速力で逃げ切るか、敵の追っ手が届かない場所まで逃げるしかない。けれど現状ではそれすら難しい。」

《正解は、圧倒的な力を見せつけて追撃する気を失わせるのだよ。――

アラビア海のノーチラス、聞こえるか。こちらショート・ホープだ。現在、未Encounters of the unknown知の敵と遭遇。違う。映画のタイトルじゃない。現実だ。潜水艦載の弾道ミサイルを発射させろ。いますぐだ。目標はこちらのレーザーで誘導する》

その会話はこちらにも聞こえた。ショート・ホープが要請したのは『Submarine Lancher Ballistic Missile』。つまり潜水艦発射弾道ミサイル――それってつまり核ミサイルじゃないか。この男は、なんてことをしでかしてくれるんだ。

《諸君、喜べ。心強い援護射撃を要請した。もう1分もしないうちに、ミサイルが飛んでくるぞ。核といっても2キロトン程度の低出力核だ。放射能汚染も心配いらん。それでも総員、敵からできる限り離れて爆発に備えろ!――ところで参謀君、エグザマックスは核に耐えられるようになっていたかな? もう遅いが》

知るか、そんなもん。製造元の社員である僕だって、そんな細かい仕様までは知らない。

この場所はアラビア海からほんの数百kmの位置だ。マッハ10も
の速度で飛ぶ弾道ミサイルは、一度成層圏近くまで上昇して飛来した
としても、ほんの数秒で飛来する。

そうこうしているうちに、青空に白っぽい点が現れる。それは徐々に大きくなり、陽光を反射させて塗装された金属面が鈍く煌めいた。

遙か上空から高速度でミサイル弾頭が降下してくる。

シヨート・ホープは上空からライフルにアタッチメントされた特殊パルスを発するレーザー照準器をポルタノヴァの追撃部隊中央に向け続けて、ミサイルを誘導し続ける。

《聞こえるかエイリアンの諸君！　これは要するに^{i n s h o r t}歓迎の花火だ。我々の星に土足で踏み入ったことを後悔するがいい。Welcome to the earth!　Yee Haw!　ようこそ地球へ！　ヒーハー！》

シヨート・ホープが一切言葉が伝わらない相手に対して無遠慮に言い放つ。バイロン軍も狂っているが、シヨート・ホープもいろいろ狂っている。僕は核ミサイルの着弾タイミングを見計らって前方へ飛び、機体を伏せさせる。

機体後方を捉えたモニターが白く瞬いた。次の瞬間に爆心地から円周上に広がった白い雲が恐ろしい速度でこちらに迫る。強烈な衝撃波が30tもの機体を弾き飛ばす。

シヨート・ホープの機体が激しい爆風によって糸を失った凧のようにあおられ、姿勢を乱すのが見えた。そして、シズクとホノカの機体がコロコロと転がっていくのを一瞬だけ捉えると、すぐさま視界は砂塵で真っ暗になり僕は上下感覚を失う。

遅れて爆発の轟音が鼓膜を振るわせた。計器は狂った数値を指し示している。損傷状態はおろか、どんな姿勢でいるかも定かでない。幸いだったのは気絶しなかったことぐらいか。

肩にハーネスが食い込むのがしつかりと感じられる。強い耳鳴りがするものの、音はしつかりと聞こえていた。爆発の余波で巻き起こった砂嵐のものであろう暴風と、砂のつぶてが機体の外板を叩く音を聞き取れることから、鼓膜が破れていることもなさそうだ。

いつの間にか、エグザマクスのオペレーションシステムがダウンしており、再起動シークエンスの画面に切り替わっていた。爆発による放射電磁ノイズからの自動保護システムが働いたのだろう。再起動は滞りなく行われ、数分経ってようやくカメラが捉えた画像がHUD上に描写された。その光景に僕は啞然とする。

眼前は砂の地面が数百mにも渡って深々とえぐれていた。その向

こう側ではバイロン軍の本隊が黒くたむろし、こちらの様子伺っている。

追撃部隊は全滅したらしい。辺りには溶けた金属片やら、黒い塗装面が炭化してさらに黒く焦げ付いたポルタノヴァの手足やらが散乱していた。

《おい、レイ！^{Hey, Rey! Are you OK?!} 無事か!》

こうしてサニー・バニーに声をかけられるのは、今日だけで何度目だろう。サニー・バニーの機体にも大きな損傷はないようだ。

「うん。大丈夫。機体に異常なし」

《爆発の電磁波の影響で、また通信がきかねえ。とつとと撤退するぞ。アーニャやジエイクもそうするはずだ》

「了解——」と、言いかけたところで、敵機接近のアラートがコックピットに鳴り響く。視界には、1機の飛行型ポルタノヴァが巨大なクレーターを飛び越えるように接近する様子が映った。

その空戦機は、他のポルタノヴァとは少しだけ形状が違った。背面には4枚の大型ウィングスタビライザーを備え、頭部にはトサカのような飾りがついている。左腕には円形の盾、そして右腕には長い柄の棍棒のようなものが握れられていた。

敵機はこちらを捉えると、盾を前面に構え機体を加速させた。それと同時に、右腕に携えた棍棒の先端から粒子ビームと思わしき赤い光の束が延びてブレードを形成する。

それは槍だった。穂先はエグザマクスの装甲など何の抵抗もなく貫けるほどの超高温だ。盾バックラーと粒子ビームビームの槍ランスを構えて突進する敵機は、まるで黒騎士のようだ。おそらく、あれがポルタノヴァの大將機だろう。

単機で打って出るのは、再度撃たれるかもしれない核ミサイルへの警戒か。同時に、たった1機で僕らを殲滅できると指揮官自らが判断したのでろう。

《そう簡単には逃してくれねえか。レイ、行け。ジエイクたちと合流して逃げろ》

「だめだよサニー。あれはヤバい。あいつは、たぶん他のポルタノ

ヴァと違う」

《だからさ。二人じゃ絶対に逃げ切れねえ。お前は裏方で、俺が戦う。それがサイラス私設傭兵部隊だ。目的を見失うな。俺たちの計画は東へ撤退することだ。全員が共有するその計画は、仲間が死んでも、リーダーを失ったとしても変わらない。それが傭兵の仕事だ。さあ行け、Little Brother.できそこないの弟》

サニー・バニーは、僕を押しやるように右腕部で僕のエグザマクスの肩を叩く。そして、すぐさま反転すると敵の指揮官機に向けて突進しながら左腕のガトリングガンを射かけた。

それまで静寂につつまれていた砂漠に連続した発破音が響き渡る。

サニー・バニー機が撒き散らす弾丸の前に、手練と思われる敵の指揮官機であつても容易には近づけないようだ。右へ左へ黒い機体を翻し防戦に徹している。カラスのように飛ぶポルタノヴァは、速力と三次元機動で優位なポジションを取ろうと動き回るも、サニー・バニーの制圧射撃がそれを許さない。

けれど、サニー・バニーの弾幕が途切れたほんの一瞬を敵機は見逃さず、黒騎士は弾かれるように肉薄して槍を突き出す。

砂漠に溶け込むサンドブラウンカラーのサニー・バニー機の背面から、赤い光が漏れだした。同時にサニー・バニー機はそれきり動きを止めた。

第14話 隊長（第一部完）

トントントントン。

狭いコックピット内に、使い慣れたグローブの指先でコンソールパネルを叩く小さな音だけが響く。HUD上に映る視界には、砂漠の地平線と青空を背景にして黒く細長い巨塔が空の霞のなかにそびえたっていた。

仲間たちは無事だろうか。こちらは早く仲間の救援に向かわなければならぬというのに。だが機体はまだ動かせない。

「——おい、ハルトまだか」

《もう少し待ってくださいッス、アマギ隊長。今、クレーンで補助バッテリーを付け終わりますッスから》

トントントントン。

「——カワサキ、さつきから充電ゲージが動いていないぞ。給電プラグはちやんとさつきっているんだろうな」

《落ち着け、シロー。リーダーのお前が焦ってどうする。充電は問題なく行われている。最低でも30%は充電しておかないと、仲間を助けに行くどころか、途中でお前の機がバッテリー切れで動作不能になるぞ。ただでさえ、稼働時間が短い空戦機なんだ。この間に弾薬の補充もしておくぞ、いいな》

「早くしてくれ」

見つめる鍋は煮えないとはこのことだ。エグザマックスの充電ゲージはさつきからちびつとも増えていない。

ショート・ホープとの戦闘中にスカイフォールが起きて、あの巨大構造物が落着する衝撃波に飲み込まれた俺は、そのまま気を失って、気づいたときには半身が砂に埋もれた状態だった。

電波状態が不安定で仲間との通信ができなかった。おまけにエグザマックスのバッテリーはすでに危険残量に達していた。迷った挙げ句に俺は、カミオンで補給する判断をしたのだが。それにしても充電に時間がかかりすぎる。

自衛隊時代に乗っていたへりなら、給油作業などほんの数十分で

終わる。それなのに、コイツエグザマクスときたら、稼働時間5、6時間に対して満充電にはそれ以上の時間がかかる。これだから電気仕掛けは好かん。

ジェイクとアーニヤ、サニー・バニーならこの不測の事態に対して、真っ先にカミオンがいる東側に移動する判断を下すだろう。だが、レイはどうしている。聞けば、カミオンを護衛していたはずのレイは単身戦場に向かったという。あのレイが。

《そもそも、お前が甘やかすからレイも無茶な行動に走ったんだ。少しはそこで反省しろ》

「それは――」

旧友にそう指摘されては、ぐうの音もでない。身の安全を優先して、カミオンの護衛をするように指示したのに、あの従順なレイが指しを無視して自ら戦場に向かうことなど予想もしなかった。

甘やかしたつもりはなかったが、その采配結果にレイなりの思うところがあつたようだ。エグザマクスの操縦能力には欠けていても、あいつの思慮深さや、合理的な思考や機転のよさは、俺だけでなくサイラス私設傭兵部隊の全員が認めている。

要するに敏さとしいのだ。その反面、考えすぎるくらいがあるのはわかっていた。『しかし』いや、『だから』と言うべきか、レイがこんな短絡的な行動に出るとは思いもよらなかつた。甘えていたのはこちらの方だつたか。

《リーダー失格とは言わないが、父親だつたら失格だな。まだまだ気難しい年頃だぞ。レイくらい歳は》

「知つての通り、俺は独身なんでね。おまけに、24歳と言えば息子にしては少々歳が近すぎる」

旧友とはいえ、自分で気づいた点を改めて指摘されると腹が立つた。しかし、既婚者で子供もいるカワサキに、独身の俺は拗ねた言葉を返すので精一杯だつた。

《そういうえば、お前と同じ部隊に配属されたのも24歳くらいだったか。第一印象は最悪だつたな。ずいぶんプライドの高いヘリパイロット様だと》

「こつちだって、ガチガチの職人気質かたぎのメカニック相手はやりずら
いったらなかつたさ」

10年も前の昔を思い出して、どちらからでもなく笑い声が漏れ
る。

《――邪魔をするよ、アマギ君。イノウエ専務と衛星電話が繋がっ
たよ》

「ありがとうございます、王ワン。こちらに繋いでください」

俺はコンソールキーの一つを叩いて通信回線を開く。我らがサイ
ラス私設傭兵部隊の発起人ボスであるサイラスの専務に、このイレギュ
ラーな事態への対処を確認するためだ。

「もしもし、こちらアマギです。画像は見えていただけましたか。あの
細長いのが、以前から専務が言っていたバイロン軍とやらの強襲要塞
ですか」

《そうです。時がきました。私の予想よりも少しだけ早かったもの
の、概ね予定通りです。もつとも、タイミングは最悪でしたが。どう
です。彼らは強いでしょう?》

「私はまだ戦っていませんがね。索敵情報では、とにかく数が多い模
様です。補給が済み次第、仲間の援護に向かう予定です」

《なら忠告しておきます。もし彼らのポルタノヴァと遭遇したら、ト
サカ付きの機体だけは相手にはいけません。彼らは本国にいる
『黒の近衛兵』にも匹敵する指揮官クラスですから。ところで、安室アムロ
くんは無事ですか。まさか、前線に出していないでしょうね》

「え? あ、ああ。無事です。たぶん――」

《あれほど前線に出すなど言ったのに》

ちよつと待て。今、小さく舌打ちが聞こえたぞ。

《――まあ、いいでしょう。では辞令を伝えます。サイラス私設傭
兵部隊には、現時点をもって継続中の任務放棄を命じます。明朝まで
にそちらに到着予定の定期補給船に乗船して帰国の途についてくだ
さい。道中のチャーター機を手配しました。インドへ寄港して、ムン
バイ空港から人員だけは空路で日本へ帰還してください。もちろん
全員で、です。一人でも欠けることは許しません》

至れり尽くせりだな。だが、相変わらず無茶を言ってくる。自作自演の、おまけにもつとも激戦区に俺たちを放り込んでおいて、生きて帰ってこいとはずいぶん言い草だ。とはいえ、色々と思うことはあっても、上官の命令は絶対だ。一本調子に「了解」と返す。

《あなたがたは、私の大切な駒なのですから、必ず生きて帰ってきてください》

駒か。大切にされているのか、そうでないのかよくわからん。このエグザマクスをたった一人で設計した大天才さまの尊大な物言いに、あきれて溜息しか出ない。

ところが、サデイスティックな言動を常とする専務との会話はそこでぶつつりと途切れた。突如、衝撃波と砂塵混じりの爆風が辺りを駆け抜け、爆発音が辺りにこだまする。

倒れるほどではないものの、搭乗しているエグザマクスはグラリと揺れ、眼前のカミオンも暴風で一瞬大きく傾いた。

「なんだ!? 全員無事か!？」

《――低出力核の爆発だね。アラビア海を航行中のアメリカ所属潜水艦からのミサイル攻撃のようだ。シヨート・ホープが指示したのかもしれない。辺り一帯の電波状態が不安定になっている。専務との衛星通信は途切れたよ》

シヨート・ホープならやりかねない。これは優勢と見るべきか、それとも劣勢で核を使わざるを得ないほど一刻を争うほどの事態なのか。

「カワサキ! ハルト! 無事か? 設備に異常は!？」

《問題ない。弾薬装填もOKだ!》

《電源もOKツス。補助バッテリーも接続完了。充電ケーブル、パージするツス》

充電ゲージに目をやると、いつの間にか25%ほどまで電力が貯まっていた。補助バッテリープロペラントタンクから各部へ給電もされるから撤退の援護には十分だろう。

「2人ともありがとう。今後の指示を伝える。カミオンは微速で先に港へ向かえ。定期補給船に乗船して帰国だ。俺たちもすぐに後を追

うが、もし明朝までに戻らなかつたら、あるいは港が所属不明機の襲撃を受けたら、かまわずに出港しろ」

と、伝えたはいいが、いつもならある返事がない。息づかいは聞こえるから通信は正常だ。

「総員、返事は？」

《状況は理解している。だが、この非現実がまだ飲み込みきれないというか》

《同じくツス》

《アマギ君、わかっていると思うが、君は欠かすことのできない人間だよ》

「ええ。もちろんわかっています。すみませんが、後のことは頼みま
す、王。——アマギ機、出るぞ」

俺だけでなく、我々全員が重要な役回りを演じさせられている。そのためイノウエ専務が組織した、サイラス私設備兵部隊なのだから。

そして俺はサイラス私設備兵部隊のリーダーを務める身だ。決してすべてを語らないイノウエ専務の思惑は計りきれないが、なによりも部隊のメンバーを欠くことはリーダーとしての矜持と誇りが許さない。どうか無事でいてくれよ。

俺はコンソールのスイッチを操作してエグザマックスの制御システムを飛行モードに切り替える。このエグザマックスには、長年乗り慣れたヘリのような姿勢制御用の操縦桿は存在しない。それでも身体の真正面にある操縦桿を操るイメージをもって、それを頭のなかで少しだけ引く。

機体背面に備わるフライトユニットのスラストは、斜め前方45度方向への推力偏向を提示し、俺は右手のコントロールスティックに備わったボタンを押し込みそれを承認する。

左手のスロットルレバーはヘリと似たようなものだ。俺はそれを躊躇なく押し込むと、背面からプラズマジェット勢いよく噴出し、戦闘機にも匹敵する上昇性能で身体がシートに押しつけられる。その強烈な加速Gに歯を食いしばって耐える。上昇加速が収まった時に

はずで上空300フィートにいた。

見通しが開けた砂漠の遠方には数機のエグザマクスが散開していた。先ほどの爆発でできあがったと思われるクレーターが砂漠の大地に大穴を穿ち、その対岸には蟻のように黒い機体が群がっていた。専務が言っていたバイロン軍。異星からの侵略者。エグザマクスと同様の機能をもつポルタノヴァ。

俺と、王・^{ワン・タイラン}泰然だけはイノウエ専務からこれらについて聞かされていたが、改めて実物を見せられると驚きを隠しきれない。これから地球はどうなってしまうのだろうか。いや、今は仲間たちを探すことだけを考えるんだ。

上空からはすぐにジェイク機とアーニャ機を確認できた。ナインズのN.O. 2とN.O. 3と一緒にいるところを見ると共同戦線を張っているようだ。離れた場所にシズク機とホノカ機も見つけた。だがレイはいない。大方、爆発で軽い支援機^{ロイロイ}だけが飛ばされたのだろう。

通信を入れたかったが、爆発の影響で電波状態が悪く遠距離通信は届かない。俺は機体を急降下させて近距離無線で2人と2機に、遅れた謝罪とともに、撤退と帰国の旨を指示する。

ジェイクとアーニャからは、返答に加えてこの先にまだレイとサニー・バニーがいることが伝えられた。俺はスロットルを全開にして、機体を全速力で2人が指さす方向へと飛ばす。

いた。レイとサニー・バニーだ。サニー・バニーが敵の1機と戦っている。間に合えよ。先ほどからずっと強烈な加速Gにさらされ続けて呼吸もままならない。だが、身体のことなど気にするな。部下を助けるのがリーダーとしての努めだ。

黒いポルタノヴァとサニー・バニーの機体が重なる。サニー・バニーがああも簡単に接近されるとは。よく見れば黒い機体は、専務が言っていた『トサカ付き』だった。

くそつたれ。射程に捉えた両肩のショートライフルで威嚇すると敵機がサニーから離れる。しかし、サニー・バニー機は動かず、その場に崩れ落ちる。

上空を違いざまに機雷を投下すると、爆炎と砂柱が立ち上がる。その隙に減速と旋回をして、呆然と立ちすくむレイの横にランディングした。そして敵のトサカ付きのポルタノヴァと対峙する。

「レイ、なにをしている。早く逃げろ」

《隊長。サニーが》

その声からは失意と混乱の様子が伺えた。無理もない。レイはサニー・バニーに一番なついていたからな。

「お前はサニーの死を無駄にするつもりか」

頼むから、おとなしく言うことを聞いてくれ。レイの機体を抱えて飛んで逃げるわけにもいかない。おまけに、相手はサニー・バニーですら圧倒される『トサカ付き』だ。

そのトサカ付きが、機体を前傾にして攻撃をするそぶりを見せる。しかし、レイに気を取られてこちらの初動が遅れる。そこへ銃声が轟き、トサカ付きが異常なまでに素早い反応で後退した。

《油断するなよ、ミスターアマギ》

横目で確認すると、ショート・ホープがライフルを構えて、銃口から硝煙をたなびかせていた。銃口を今度はこちらに向けるとショート・ホープが問う。

《ミスターアマギ、なぜハッキリ『邪魔だ』と言わない。これだから Japanese 日本人は歯切れが悪い。代わりに僕が言つてやろう。参謀君、in shot.要するに君は戦闘の邪魔になる。戦う気がないなら、とつとと消え失せろ》

そして、そのままレイの機体に向けて引き金を引く。ショート・ホープが放った銃弾はレイの機体の肩口に当たり、その衝撃で機体は回転するようにして倒れ込んだ。

《戦場で戦わない者はクソの役にも立たん。そればかりか、足を引つ張るだけだ。何なら今ここで銃殺刑に――》

再び銃声がすると、今度はショート・ホープの足下がえぐれた。後方モニターにいつの間にか接近していたジェイクとアーニヤの機体が小さく映る。おまけにラインズの2機もいる。今のはジェイクの遠距離狙撃だ。まったく、撤退しろと指示したはずだったのに。

『トサカ付き』に目を戻すと、奴は事態を掴めずに、こちらの様子を伺っているようだ。当然だろう。目の前で仲間割れのような茶番を見せられては。

「レイ、聞こえるか。カミオンと合流して定期補給船に乗って帰国しろ。これは専務命令だ。——アーニヤ、頼む。レイを無理にでも連れて行ってくれ」

Yes, sir.
《了解》アーニヤはあきれた声で答える。《——ホラ、いくよ。アントアがこの2番目だろ》

アーニヤが素早く接近し、レイの機体つかんで強引に引きずっていくのを確認した。ジェイクも何かあればいつでも撃てるように狙撃態勢だ。なんだかんだで、アーニヤもジェイクもレイがかわいくて仕方がないんだろう。なあ、サニー・バニー。

《——ミスターアマギ。アンデイ・クラーク元海兵大尉もとい、サニー・バニーの家族への連絡はアメリカ軍が承る。その方が効率的だろう。——ということだ。よろしく頼むぞエイミー》

《イエス、リーダー。ですがリーダーは？》

《僕はミスターアマギと共同であるの黒い『トサカ付き』を押さえる。シャルマとエイミーはその隙に司令部まで撤退しろ。後のことは本国に確認してくれ。以上だ。——ということだ、僕らは要するに初めてタッグを組むことになるが、よろしいな？ ミスターアマギ》

ふん。相変わらず強引に事を進めるいけ好かない奴だ。だが、おとなしいレイのような人間には、こういう強引な上官の方が合っているのかもしれない。俺には真似できないやり口だよ。

「レイたちが世話になったな」

《なに、礼には及ばんさ》



《安室^{アムロ・レイ} 玲、専務から連絡があります。至急、艦橋までお越しください》

「シズク、僕のことはフルネームで呼ぶなど伝えていたはずだぞ」

《2度呼びかけても応答がありませんでしたので、もつとも確実な方法を採らせていただきました。マスター》

「――それで、何の用だっけ？」

《イノウエ専務から通信です。至急ブリッジまでお越しくください》

「了解。すぐに向かう」

そう言つて、僕は朝焼けで赤く染まった砂漠の港町から目を離す。今は定期補給船の甲板上だ。僕は昨日から着っぱなしのパイロットスーツの上にコート一枚だけを羽織つて2人の帰還をここで待っていた。

海鳥の鳴き声が、出港を伝える重い汽笛にかき消されながら耳に届いた。船は小さな波をつくつてゆっくりと岸を離れていく。

もう一度だけ港の岸壁に目をやってから船の中に入ると、暖かかな空気が頬をなでた。砂漠の夜は冷える。僕の身体は冷え切っていた。けれども寒さは一切感じなかった。

アマギ隊長とサニー・バニーは定刻までに戻つてこなかった。けれど、港はバイロン軍に侵攻されることもなかった。

6人になつた僕らサイラス私設傭兵部隊は、1年近く駐屯した中東を離れ、日本へ向かつて出港した。

閑話

第15話 戦場から逃れた船上のエリア（帰国①）

04：00時

早朝の濃霧に紛れたアメリカ第9海外派遣中隊の襲撃を探知。彼らの目的は、僕らサイラス私設傭兵部隊への直接攻撃と推察される。夜間警邏担当のアーニャ機（以下04）が先攻して敵部隊を迎撃を開始。

04：10時

サイラス私設傭兵部隊長アマギ（以下01）、ジェイク（以下02）、サニー・バニー（以下03）、レイ機（以下05）と、05の支援機シズク（以下R05S）とホノカ（以下R05H）が出撃。

R05Sの報告により、敵部隊は（ナインズ）は赤外線を遮断し隠密性に優れたニツケルサマリウムコートとおぼしき特殊外装を装備。

R05SとR05Hと02の連携狙撃と、05の焼夷弾と反政府軍の戦車砲によってナインズ4機を撃退。ナインズ1機を撃破。

05：45時

政府軍の増援部隊を確認。同時にナインズTOP3と1機の合計4機も確認。

01は、05を護衛役に付けカミオンに撤退命令を下す。01から04は、カミオンの退路確保のため政府軍増援と交戦。

06：10時

カミオンの退路確保。01から04は増援のナインズ4機の迎撃に当たる。

06：50時

05は反政府軍防衛戦力に加勢。05は自己判断により緊急権限発令。R05SとR05Hとの連携狙撃によって政府軍を撃退。

07：30時

スカイフォールとおぼしき異常事態が発生。同時に、正体不明の巨大構造物出現。その余波により05意識不明。

08：00時

05と03が、ナインズリーダー・ウィリアム・D・ホープと遭遇。非戦闘協定を結ぶ。正体不明の巨大構造物より、エグザマクスと酷似した正体不明機の集団が出現。

08：20時

05と03は、ナインズリーダー・ウィリアム・D・ホープと共同で撤退。正体不明機の追撃を受ける。

09：00時

ナインズリーダー・ウィリアム・D・ホープが潜水艦発射弾道ミサイルの発射を要請。正体不明機の追撃隊を一掃。

09：05時

正体不明部隊の指揮官機と03が交戦。01が加勢。03は敵指揮官機によって――

そこまでラップトップにタイピングしたところで、僕は手を止める。キーボード上の手の甲に熱い液体がこぼれた。僕の涙だ。

サニー・バニーは僕を逃がそうとして敵の指揮官機に討たれた。加勢したアマギ隊長も船の出港時刻まで戻ってこれなかった。僕に力があれば、いや、僕にもう少し傭兵としての心構えがあれば、サニー・バニーと隊長は死ぬことはなかった。

涙は脱力感を伴って止めどなく溢れてくる。昨夜あれだけ泣いたのに、人の涙の貯蔵量とはどれくらいなのだろうという疑問が頭の片隅に思い浮かぶ。ラップトップが涙で壊れてしまう、と僕の思考の表面は冷静を務めるけれども、こぼれる涙はどうしても止まらない。

涙を止めたのは、船の客室に備わった木製ドアのノック音だった。6人になった僕らサイラス私設傭兵部隊は現在アラビア海上。定期補給船で日本へ向けて航行中だった。

「レイ、いるッスか？」

ドア越しに、高音域が遮断されてくぐもったハルトの声がした。ハルトは僕より1つ歳下の23歳。彼はサイラス傭兵部隊内では、火器を主としたメカニックを担当している。語尾に『ッス』を付けるのが

口癖だった。

呼ばれた僕はとっさに返事をする。ドアを開けるためにベッドサイドから立ち上がるうとして、泣いていたことを思い出し、スリープモードで真っ暗になったラップトップの画面を鏡代わりにして服の袖で涙を拭う。

けれど、赤く充血しているであろう僕の目の色は、ラップトップの反射だけでは確認できなかった。ハルトならまあいいやと、僕はそのまま船室のドアを開ける。戸口にはサンドイッチを乗せた皿を持ったハルトが立っていて、僕の顔を見るなり一瞬だけギョツとした顔をした。

「あ、あの。これ、王^{ワン}がレイに持って行けって。一昨日から何も食べてないんじゃないかって」

「ありがとう。だけど、何も食べたくないんだ」

「それでも、食べないと身体を壊すツスよ」

ハルトはラップのかかった皿を僕に無理矢理押しつけようとする。僕は仕方なく受け取った。様子を伺うかのように少し間を空けてハルトがさらに会話を切り出す。

「あー、1年ぶりの帰国なんスから、日本に帰ったら長期休暇なんかもいたいツスねえ。イノウエ専務から何か聞いていないツスか？」

「ごめん、帰国してからの事はまだ何一つ聞いていない。この緊急事態だから休暇は、どうだろう」

「そうツスかあ。じゃあもし、休暇がとれたらレイは何をするツスか？」

ハルトが無理に会話を作っているのは明白だ。大方、部隊参謀役兼料理長の王^{ワン}・泰然^{タイラン}か、チーフメカニックの川崎^{カワサキ} 重工^{シゲノリ}さんに僕の様子を見てこいと偵察任務でも請けたのだろう。

「うーん、実家には一度帰りたいな。両親や妹たちにも会いたいし」

「え、レイの妹さん達って何歳ツスか？」

「どちらも21歳。双子なんだ」

「へえー。レイは双子のお兄さんなんスね。もしかして一卵性双生児ツスか？」

「うん。二人とも、ほとんど同じ顔だよ」

「じゃ、どっちでもいいので、今度紹介してくださいッス」

『じゃ、どっちでもいい』ってなんだよ。口に出して言わないけれど、お前に妹は絶対にやらん。

もし紹介するとしても、まずはその言葉遣いを正してから出直してこい。と僕は心の中で思いつつ、口では「機会があれば」と適当に誤魔化した。

「それ、ちゃんと食べるんすよ。エグザマクスの戦闘データの吸い出しはこちらでやっておいたッスから、レイは休んでいいッスよ♪ それじゃあ」

ハルトはそういう残すと、ご機嫌で通路の奥へ消えた。スキップでもしそうな勢いで。もう一度言うけれど、お前に妹は絶対にやらんぞ。

ハルトとの他愛のない会話のおかげで、少しでも気分が紛れた。けれども、気分が晴れたことにすら罪悪感を覚える。そして、気分とともに身体が重く感じる。依然として食欲はない。

いつもだったら、王のつくってくれた料理は、美味しさのあまり残さずたいらげるのだけれど、今は何であっても身体が受け付けそうになかった。

僕はハルトが持ってきてくれたサンドイッチに手を付けないまま、ベッドサイドボードに置いた。



《マスター。マスターの身体の水分量がこの短時間で著しく減少しています。このままでは22時間後には脱水症状を引き起こす危険があります。また、血糖分濃度の低下および遊離脂肪酸濃度の上昇が確認されます。すみやかな食事と水分補給を提案いたします》

ヘッドセットから女性の機械音声が出て、僕に食事を探れと言う。声の主である『シズク』は、僕のエグザマクスに付属する自律支援機の人工知能だ。

「わかつてる」

戦闘中は戦術支援機として機能するシズクだが、平時の彼女は、筐体に頭脳として備わった中枢基盤と、僕がいつもしているヘッドセットとラップトップとをネットワークで繋いで、事務作業支援およびヘルスメーターとして機能している。

もう1機のロイロイである『ホノカ』はシズクと共同で戦術支援をするが、主な担当は広報写真撮影だ。部隊が戦闘している様子を自律稼働するホノカが撮影し、その画像および動画を僕が目視選定してからサイラス本社の広報部サーバーへ送信する。

ただし口数の少ないシズクと違って、ホノカは放っておくとひたすらしゃべり続ける。うるさいので普段は音声ネットワークに繋いでいない。

僕はさきほどハルトが持ってきてくれたサンドイッチに手をつけないまま、再びラップトップに向かって、ホノカが撮影した画像と動画の選定作業をしていた。何かに意識を集中していなければ自責の念で押しつぶされそうだったからだ。

ラップトップの液晶画面上には、突如現れた人類の敵『パイロン軍』の真っ黒な機体の群が遠景で映っている。彼らが搭乗するポルタノヴァと仮称された人型機動兵器は、僕らが乗るエグザマクスに奇妙なほど似通っていた。

突然空から現れた彼らは、僕らを見るなり問答無用で攻撃してきた。

運動性能はほぼ互角。けれどパイロン軍が扱う兵器には、電子ビームらしき地球の技術レベルを遥かに超えた技術が用いられている。おまけに、彼らが保有する機体は少なく見積もっても50機を優に超える。彼らを相手にするには、最低でも国家軍隊規模の戦力が必要だ。

現在、世界はどうなっているのだろう。僕らはこのまま船でアラビア海を東に進み、インドのムンバイ空港で飛行機に乗り換えて日本に帰国することになっている。

ひよっとしたら、僕らがこうして船に揺られている間に、世界はバ

イロン軍によって滅亡させられている可能性すらある。もし、僕らが地球で唯一の生き残りとなってしまうたら、などと考えると背中に冷たい汗が流れた。

「地球側」
「ただどこちらにも、僕らサイラス社が世界中に売りさばいた相当数のエグザマクスが配備されている。そう簡単に地球は陥落させられることはないだろう。」

僕らが営業して売ったエグザマクスが異星人からの地球防衛に役立つっていると思えば、あれだけ嫌だった『死の商人』という仕事にも少しは誇りを感じられた。結果的に、ではあるけれども。

「いや、果たして本当に、この結果に着地しただけなのだろうか。サイラスはこうなる事を予見して、強引にエグザマクスを世界中にばらまいたなどと考えるのは、それこそ強引な考えだろうか。」

「そうは思っても、外界からの情報がほとんど入ってこない広い海のど真ん中においてはどうしても不安感がかき立てられる。」

衛星通信を介したインターネット上では、異星人が襲来したなどというニュースは一切報じられていないし、海上の波も天気も穏やかだ。けれど、その穏やかさが、嵐の前の静けさを表しているようで余計に落ち着かない。

もつとも、いざ地球が滅亡するときには、いくら自己中心的な言動を主とする鬼神のごとき僕らの上司であるサイラス社のイノウエ専務であっても。こちらに衛星電話の一本くらい寄越すだろう。

「空気を一切読まない、いつもの口調で「レイ、聞きなさい。世界が滅びましたよ」とでも。」

不意にノック音がした。

「レイ、いるか」

くぐもつた声で、チーフメカニツクの川崎カワサキ 重工シゲノリさんの声でした。カワサキさんの野太い声は部屋によく響く。カワサキさん自らが僕を訪ねてくるということは、どうやらハルトの方は王ワン・タイランタイランの差し金だったようだ。

僕は、再びスクリーンアウトしたラップトップの画面を鏡代わりにして、顔を確認してからドアを開ける。

「ムンバイで航空便に乗り換えることになってはいるが、俺と王・泰然ワン・タイランはこのまま船で帰国する。専務にそう伝えておいてくれないか」

「ええ、それはかまいませんけど、どうして？」

「遠距離狙撃機のジエイクと、お前の機は大した損傷ではないが、アーニヤ機は大幅な修理が必要だ。あんな事があつた後では、いつエグザマクスが必要になるかわからないからな。俺は船に残って日本までの航行中にエグザマクスの整備をしておく。王・泰然ワン・タイランの方は、単に飛行機が苦手なんだそうだ」

34歳のカワサキさんは既婚者で子供もいる。誰より早い帰国を望んでいるはずなのに、このような決断をさせるのはメカニツクの矜持と誇りだろうか。アマギ隊長も同じようなことを言いそうだ。カワサキさんと隊長は自衛隊時代からおおよそ10年来の付き合い合いだったそうだ。

「わかりました、カワサキさん。——ごめんなさい。僕のせいでアマギ隊長は戻らなかつた」

そうつぶやく僕に対して、カワサキさんは、ふんと鼻から息を吐き出し、メカニツクには不向きなその大きな手で僕の頭を鷲掴みにする。

「そんなことは、お前が気にすることじゃない」

そして、整備作業で固くなつた指先で僕の頭をかきむしるようにクシャクシャにしてから、ニカツつと笑つて見せた。

砂漠の日差しで焼けた肌に白い歯が浮き上がる。カワサキさんの目はいつになく優しくなつたけれど、どこか悲しげだった。それを見ていると、隊長だけでなくサニー・バニーの顔も思い出された。

「王ワンが一緒にいるおかげで、毎日美味しい飯が食える。おまけにお前達パイロットがいないおかげで整備をせかされることもない。この船上での環境は俺にとって天国だよ。」

何もなければ、次に会えるのは船が日本に到着する二カ月後だな。それまで俺と王ワンは、気ままなクルーズ船の旅だ。専務や本社の連中にはバカンスの邪魔をするなど伝えておいてくれ」

ご機嫌を装うカワサキさんを見送つた後、僕はベッドサイドに腰掛

けそのまま倒れ込む。そして2段ベッドの床面を見上げるけれども、視点はどこにも合っていない。

頭の中では、ぼんやりした砂漠と黒い陰を背景に、サニー・バニーとアマギ隊長の声が何度も、何度も反芻する。頭の中で過去を何度もやり直した。けれども、どのルートをとどつてもその結末は悲しみしか訪れなかった。

身体が重い。気分が重い。みんなが僕を気遣ってくれている様子がよくわかる。けれど、それが余計に辛くて痛くて重い。力なく横たわる僕に、ヘッドセットからシズクが声をかけてくる。

《――マスター。気分が優れないようであれば、音楽を聞くことをご提案します。『ヨハン・セバスチャン・バッハ』作『G線上のアリア』などいかがでしょうか。人間は悲しい時に、音楽に心理を反映させて苦痛を和らげる特性があります。それらのエビデンスとなる心理研究論文も提示できますが、併せてご一読をしてみたいかがですか》

「ありがとう、シズク。けれど、論文はいらない。――BGMを頼むよ」

シズクが再生してくれた『G線上のアリア』が耳元から流れる。それを子守歌に、僕は少しだけ眠ることができた。AIであるシズクも僕を心配してくれているのだろうか。それがただの無機質なプログラミングデータであったとしても、気負わずに済む優しさは一番ありがたかった。

目を覚ましてから、イノウエ専務に衛星電話で定時連絡を入れた。カワサキさんと王・泰然ワン・タイランの2人が船で帰国することを専務はすんなりと了承した。同時に僕は、定時連絡に遅れたことと、社内でも機密情報に該当するらしいバイロン軍の画像をサーバーにアップしたことを頭ごなしに叱られた。

イノウエ専務との会話で、少なくとも日本はまだ平穏であることがわかった。短いながら休暇も取れそうだ。けれど、僕の中の自責と不安と悲痛がごちゃ混ぜになった感情は消えそうにはなかった。

第16話 ムンバイ発成田着・国際線上の僕ら（帰国②）

中東から5日の航海を経て、僕らサイラス私設傭兵部隊はムンバイの港に到着した。後はイノウエ専務の指示通り、空港に向かい飛行機に乗るだけだ。下船するために船室から甲板に出ると、湿気を帯びた空気が肌にまとわりついた。

これまで過ごしてきた砂漠の気候に比べ、雨期にさしかかったインドはひどく蒸し暑い。砂漠も暑かった、というか熱かった。けれど乾燥しているため直射日光を浴びなければ比較的過ごしやすい中東の熱さに対し、湿度が高いインド熱帯性気候は鬱屈させられる類の暑さだ。

肌にTシャツが張り付いて気持ちが悪い。けれど、慣れない環境への違和感に意識が移ることで、一時的とはいえ悲観的な思考に頭の中が支配されずにすんだ。

航空便で一足先に日本へ立つ僕とハルト、ジェイクとアーニヤの4人は、補給船で帰国する川崎^{カワサキ}重工^{シゲノリ}さんと王^{ワン}・泰然^{タイラン}に見送られて船から降りる。

ここからタクシーでムンバイ市内のチャトラパティ・シヴァジ国際空港へ向かい、飛行機に乗れば、おおよそ10時間後には日本に到着する。任務とは呼べないような簡単なミッションだ。けれど、単に飛行機で帰国する簡単な任務であっても、歴戦^{ジェイクとアーニヤ}の傭兵たちは決して手を抜かない。それはファクションに関しても同様だった。

ハルトと僕は、いつも着ているTシャツ姿に、身の回りのものを詰め込んだリュックを背負っただけの簡単な格好だった。端から見れば日本人バックパッカーにしか見えないだろう。

それに対し、かつてM I 6に所属していたイギリス人のジェイクは、丁寧に仕立てられたネイビーのシングルスーツに身を包んでいた。インドの強い日差しからスナイパーの命ともいえる目を守る真っ黒なサングラスを掛けたその姿は英国紳士そのものだ。

元KGBの諜報員でロシア美女のアーニャは、背中まであるブロンドをいつもの乱雑なシニヨンお団子ではなく、しっかりとハーフアップにセットしてある。そして、肩を露出させ、腰のくびれを強調する紫サテンのストラップレスドレスに、薄紫色のサングラスとシヨールとヒールを合わせて頭の天辺から足のつま先まで一分の間もない。

「レイとハルトを道中頼むぞ、ジェームズボンドとボンドガール」

普段は冗談など言わないカワサキさんの気の利いた見送りの言葉に、ジェイクとアーニャは慚然としている。悪目立ちする二人の格好に王・泰然ワン・タイランも苦笑を浮かべていた。

「これから、悪の組織を潰しに行くんすよね」ハルトも調子に乗って軽口を叩く。

海外セレブ風の目立つ格好に加え、肉付きから歩き方まで一般人と異なる彼らはとても目立つ。おかげで、この異様な組み合わせの4人を警戒してか、道中のタクシー運賃をぼったくられることもなかった。

走行中のタクシーの窓から望むムンバイの都市は、ジェイクとアーニャの格好などどうでもよくなるほど平穩そのものだった。平時のムンバイがどんなものかは知らなかったけれど、少なくとも異星人の侵略に脅かされている雰囲気はない。

タクシーの運転手に、それとなく「変わったニュースはないか」と尋ねたけれど「特になにもない」と片言の英語で返された。空港で流れていたインドのTVニュースでも、異星人が侵略してきたなどという報道は一切されていなかった。

普通だ。そのごく当たり前といえる光景に、僕らが5日前に経験したあの出来事は、すべて夢であったのではないかとさえ思え、自分自身の認識と記憶の方を疑ってしまう。

けれど、現にアマギ隊長とサニー・バニーはここにいない。それに加え、中東行きの便だけがすべて欠航になっている発着案内表示によって僕は現実に引き戻された。

中東の軍がバイロン軍の侵攻を上手く抑え込んでいるか、バイロン軍が静観を続けているかのどちらかだろう。集団パニックを避ける

ためか、世界の報道統制は思っていた以上に厳格であるということ
僕は思い知った。

そして、同時に僕らはサイラス社の羽振りの良さと、イノウエ専務
の太っ腹加減も思い知る。

「レイ、飛行機をチャーターするのっていくらかかるんスか???」

「に、2,000万円くらい、かな——?」

チャトラパティ・シヴァジ国際空港の端っこの滑走路で僕らを待つ
ていたのは小型のプライベートジェット機だった。全長20mほど
の小型機とはいっても、チャーター機としては中型機に分類される。
機内はおよそ10人以上が乗れ、僕らの4人の移動には持て余すほど
の豪華な代物だ。

僕ら一般庶民がプライベートジェットに乗るなんて機会は一生に
一度あるかないかだろう。専務がチャーターしたプライベート
ジェットに興奮する僕らと同じく、ジェイクとアーニヤもどこか落ち
着かない様子でいる。もつともあちらは、戦地に身を置く傭兵ゆえの
職業病みたいなものだ。

チャーター機とはいえ、手荷物検査はされる。ジェイクがいつも丹
精込めて整備している愛用のライフルは当然として、拳銃も、アー
ニヤがいつも胸の谷間に隠し持っているナイフも機内には持ち込め
ない。

傭兵は丸腰になるのを恐れる。とくにジェイクは重症だ。銃依存
の禁断症状とでも言うのだろうか。冷静を装いながらも、その額には
脂汗が浮いていた。目は泳ぐように周囲を警戒するために動き、そし
て動作の一挙一動が不審すぎる。

検査ゲートを通るときなんかまるで不審者だった。今のジェイク
より、違法薬物の運び屋の方がまだ落ち着いていた態度でいるだろ
う。

潔白ではあるのだけれど、僕らが入国管理局に捕まると厄介なこと
になる。もちろん全員のパスポートは一応正規のものだし、僕らはサ
イラスという世界のトップに連なる企業の仕事で日本へ向かうとい
う明確な理由がある。

しかし、特殊な経歴をもつジェイクとアーニヤはとくに何かと面倒だ。そして、もし移動中に何らかのトラブルがあれば、僕がサイラス私設傭兵部隊の隊長代理としての対応が求められ、それをリカバリーしたとしても僕が専務に叱られる。

飛行機にたどり着くまで、生きた心地がしなかった。機内への搭乗タラップを登りながら安堵に浸る僕に向かって、前を歩いていたジェイクが急に振り返って言う。

「レイ。抱えている感情は吐き出せ。すべて吐露しろ。スナイパーはわずかな感情の変化も狙撃に影響する。だから、わだかまりのようなものはすべて吐き出しておけ。頭がクリーンじゃないと正確な狙撃はできない」

いきなり何だ、と思ったけれど、これは気落ちした様子でいる僕に対する彼なりの気遣いと鼓舞する言葉なのだろう。

これまで、ジェイクの口からは皮肉と叱責の言葉しか聞いたことがなかった。けれど、今のジェイクの声色にはいつもの棘々しさがない。彼は僕にこう言っている。鬱屈した気持ちを抱え込むなど。でなければ仕事に影響すると。だから元氣を出せと。僕はそう解釈した。

「ありがとう、ジェイク。僕はスナイパーじゃないけれど、なんとなくわかる気がするよ」

「ああ、だから銃を持っていない今の私は不安で不安で仕方なくて、とてもじゃないが冷静ではいられないんだ！」

ジェイクは両腕を広げてタラップの中腹で声高々に自らの今の心境を吐露した。はいはい。さっさと飛行機に乗ってくれ。後がつかえてるんだから。僕はあきれてジェイクを無理矢理押しやった。



夢を見た。

バイロン軍の母船と思われるあの巨大構造物の落着が起こした砂の津波に飲み込まれ生き埋めになる夢。

影のような真つ黒なポルタノヴァに追いかけられ、撃たれる夢。バイロン軍の母船に捕らえられたあげく、その天辺から逃げだし、成層圏近くから落下する夢。

そのたびに、背中を蹴り飛ばされたような衝撃とともに目を覚ます。

アマギ隊長がいる夢も見た。サニー・バニーがいる夢も見た。

不思議なことに、夢の中では彼らが目の前にいることになんの疑念ももたなかった。僕は夢のなかで二人にいつものように声をかける。けれどもハツと目を覚ますと、彼ら二人が隣にいない現実に愕然とする。脈拍が平時よりも早まり、びっしょりと汗をかいていた。

そんな僕の気分とは対象的に、日本へ向かうプライベートジェットの機内は平穩そのものだ。持て余すほど広い機内の前方に目をやると、ジエイクは前の方の席でグラスを片手に新聞を呼んでいる。ハルトはその少し後ろの席で居眠りしていた。機内には小さなジェットの推進音だけが響いている。

不意に、脇から飲料水のペットボトルが差し出された。アーニヤだった。

「ああ、ありがとう。アーニヤ」

僕はそれを受け取る。アーニヤは無表情かつ無言で、そのまま僕の隣にドスンと腰を降ろした。

数分間無言が続く。

これまで、アーニヤとこうして並んで座ることなどなかった。なんとなく居心地の悪さを感じる。エアコンで汗が冷えて肌寒く感じたけれど、この間を持たせるために、僕はアーニヤからもらった飲料水を半分ほど一気に飲み干した。

不意にアーニヤが口を開く

「レイ。アンタ、今朝、鏡を見たかい？ ひどい顔をしているよ」

「そうかな」と平静を装いつつ、そうだろうなと思う。

アーニヤはフンと鼻から息を吐き出すと、素早くムダのない動きで僕の首に腕を回す。そして手の平で僕の側頭部を押さえつけ自分の身体に引きつける。

その洗練された動きに僕は為す術もなく、アーニヤの胸へと抱き込まれた。驚いた僕の身体は反射的に抵抗するけれども、催眠術にかけられたかのように身体に力が入らなかつた。

「いいから、そのまま聞きな」その状態でアーニヤは言葉を続ける。「アタシら傭兵はね、仲間の死には慣れてる。仲間が死ぬのは当たり前だと思ってる。これまで何十、何百と仲間の死を見てきた。周りの連中もそうだった。仲間が死んでも顔色一つ変えないように訓練されているんだ。」

だからアマギの死にも、サニー・バニーの死にもなんとも思わない。けどね。だからね。そんな風に仲間の死を悲しむ顔を見るのには慣れてないんだよ」

その言葉に僕はハツと息を飲む。そして、全身から力が抜ける。

歴戦の傭兵達は仲間が死んでも常に冷静だった。アーニヤもジェイクはもちろん、カワサキさんも王・ワン・タイラン泰然も、あんなことがあつた直後にもかかわらず、まるで何もなかつたかのように淡々と自分の仕事をこなしていた。

それなのに、僕は悲しみに暮れるだけで何もしていない。表情には出さずとも、仕草には出せずとも、彼らだつて仲間を失つて悲しくないはずはないのだ。僕は現在サイラス私設傭兵部隊の隊長代理でありながら、自分のことしか考えていなかった。

僕の態度は周りに気を遣わせていた。戦場慣れしていないハルトでさえ、僕を気遣う余裕さえあるというのに。

「ごめん」

「いいんだ。アタシらの代わりに、アンタが悲しんでおくれよ」

あのアーニヤとは思えないほど優しい言葉と声色に、張りつめた糸が切れたように僕は泣きそうになる。僕は長男だから、上には兄弟がない。もし姉がいたらこんな感じなんだろうなと思つた。不思議とアーニヤの腕のなかでは悪い夢は見なかつた。

それと、どうやって持ち込んだのか、胸の谷間にいつもより小さなナイフの柄が頭を覗かせていたのを、僕は見ない振りをした。



チャーター機が降り立った成田空港は、僕の知っている成田空港そのものだった。

おかしなニュースはやっていないし、利用客や空港職員は、相変わらず慌ただしく通路を往来している。日本語が飛び交い、談笑や子供の泣き声が聞こえる。なつかしい喧噪に、日本に帰ってきた実感がありありと湧いた。

そして、遠巻きに見える空港のゲート出口では、見覚えのある背格好の人物が僕らの到着を待っていた。

「ケツ。専務の奴、相変わらず陰険な顔だねえ」

アーニヤがアゴで指したゲートの先には、スーツをきっちり着こなした痩せぎすで神経質そうな顔をした50代の男性と、浅黒い皮膚と銀髪が特徴的なフォーマルスーツ姿の若い女性が、人の流れのなかをかき分けて立っている。

およそ1年ぶりであっても見間違うはずはない。僕らサイラス私設傭兵部隊の発起人^{ホス}であるイノウエ専務自身とその秘書だ。

口では悪態をつくアーニヤであっても、なぜか面と向かつてはイノウエ専務に頭が上がらない。誰に対しても歯に絹着せぬ物言いをするアーニヤが、だ。ジエイクの方は専務を極端に避けているくらいがある。

僕らがゲートを抜けて迎える二人に向き合おうと、専務はカツンと靴をならして一歩前へ進み出て僕ら一人ひとりと目を合わす。イノウエ専務が周囲に放つ、この特別な雰囲気はどう例えればいだろうか。

イノウエ専務はサイラス社の創設に関わる第一人者。そして、たった一人でエグザマクスを設計した大天才技術者。その頭の良さゆえか、僕ら一般人では理解しがたい思考と行動を常とする大偏屈者。それに振り回されるのはもう慣れっこだ。

浅黒い肌なのに北欧人のような国籍不明の整った顔立ち。目はブルーアイズ。そしてノルディック・ブロンドよりもさらに銀色に近い

髪とまつげをまつすぐに延ばしたイノウエ専務の容姿は、控えめに言っても、この世のものとは思えないほど美しい。

あまりに現実離れた雰囲気、僕は彼女が宇宙人なのではないかといぶかしんでいた。その専務に向かって僕は姿勢を正し、隊を代表して帰国の挨拶をする。

「ただいま戻りました。セーラ・イノウエ専務」

「よく無事に戻ってきてくれました、みなさん。それに、レイ。少しだけ、たくましいお顔になりましたね。うふ」

僕らを散々振り回してきた悪魔のようなイノウエ専務が、まるで天使のようにニッコリと微笑んでサイラス私設傭兵部隊の帰還を出迎えた。

千葉県騒乱編

第17話 イノウエ専務（表彰式典とスピーチ）

「聞いていますか。ア・ム・ロ・レ・イ！」

後ろの座席から、専務愛用の11インチタブレット端末で頭を叩かれ目を覚ます。それも縦で。専務が僕らに話をするなか、僕は車の揺れと、日本に帰ってきた安堵感から居眠りをしてしまっていたようだ。

「聞いています」と僕は反射的に口にしてしまったから後悔する。

「では、わたくしがこの3分間で話したことを、一語一句漏らさずに復唱なさい——できますか？ できないでしょう？ 聞いていなかったのでしょうか？ 車内で船をこいでいたのですから。己の過失を認めなさい」

「えっと、本社に戻ったら、表彰式が、どうたらこうたら——すみません」

「ったく。——本社についたら、社内と関連会社をオンラインで繋いで帰国報告と表彰式典を行います。説明や挨拶など細かなことはすべてこちらで行います。あなた方は勲章授与の間、英雄らしく舞台上の上に雁首並べて突っ立っていればいいだけです。口は一切開かないでください。呼吸は認めます」

イノウエ専務の話は何かとツツコミどころが多い。言葉遣い。言い回し。いずれも間違つてはいないのだけれど、帰国子女故か専務が使う日本語は時々おかしい。

現在僕らは成田空港から、幕張にあるサイラス本社ビルにバンで移動中だった。10人乗りのバンの最後尾席の3脚ぶんはイノウエ専務が占有し、その左前に僕が座っていた。アーニヤとジェイクとハルトは専務を避けるかのように前方の座席に固まって座っている。それでも専務の声は車内によく響く。専務は話を続ける。

「では、続いて世界の現状をお話します。あなたがたが中東で見たも

のは、バイロン軍の機動兵器ポルタノヴァです。察しのとおり、あれは地球外のものです。

彼らは現在、侵攻の動きを見せていません。こちらが配備したエグザマクスのおかげで迂闊に攻勢に出られないと判断したのでしよう」「配備？」僕は思わず聞き返してしまつてから後悔する。

「なにか？」今や、世界中の国やテロリストに我が社のエグザマクスが行き渡っているのですよ。これは配備と同義です。話を続けますがよろしいですか」

丁寧な言葉の陰で、話の邪魔をするなどばかりに僕は専務に睨まれた。そして、語弊があるのにもかかわらず、専務は当たり前のように話を続ける。

「地球側に自分たちのポルタノヴァと同等の性能をもつエグザマクスが存在したのは、彼らにとって想定外です。優勢ではない戦い、分の悪い戦争を続けるほど不利益なものはありませんから、彼らは侵攻作戦を修正しなくてはなりません。」

それに加えて、アメリカのショート・ホープもよい仕事をしてくれました。核ミサイル攻撃によつてこちらの戦略兵器の一端を見せつけたことも、侵攻の抑止力として働いたようです。この小康状態は、バイロン軍がこちらを分析し、動向を探っている最中なのでしよう。

現在、バイロンに関する情報は、世界のあらゆる報道機関とメディアに箝口令をしいて表には出ていません。しかし、それももう数日もすれば限界に達するでしょう。そうなれば地球全土がパニックに陥ります。ですが、すでに手は打つてあります。詳細はまだ明かせませんが。ここまでで何か質問はありますか？」

「奴らが現れることは予め知っていたのか？」ジエイクが拳手をして前を見たまま専務に訊く。

「知っていました。けれど、彼らはわたくしの予想した時期より数年ほど早く訪れました。みなさんを危険な目に遭わせた責任は詰めを怠つたわたくしにあります」

「じゃあ、アンタはなぜ、それを知っているんだい」続いてアーニヤが訊く。

「情報元は今はまだ明かせません。ですが、そう遠くない先に洗いざらいお話しします」

専務の返答にジエイクもアーニヤも納得しない様子でいる。僕は訊きたいことが多すぎて何から訊いていいのかわからなかった。

「あの、休暇はとれるツスカ？」ずっとカミオンに詰めていてポルタノヴァを目撃していないハルトは、流れを壊す質問をする。

「ええ。先にお伝えしていたように、明日から3日程度なら休息の間を確保できるでしょう。ただし、バイロン軍の侵攻具合によります。念のため遠方には出歩かないようお願いします。」

それと、一応言っておきますが、中東で見たものの一切は他言無用でお願いします。休暇中はもちろん、社内であってもこのことは秘匿事項です。もし、情報漏洩させたら、スマキにしたうえで、ドラム缶にコンクリート詰めにして、サイラス本社前の東京湾に沈めて差し上げますからそのつもりで」

一昔前のヤクザか。4人があきれながら「了^{Yes, ma'am} 解」と答える。

「レイは？ 何か言いたそうな顔をしていますね」

「隊長とサニー・バニーを失ったのに表彰だなんて。僕らが何をしたっていうんです。だたのパフォーマンスじゃありませんか」

「そうです。ただのパフォーマンスです。でも意味はあるのです。バロンとポルタノヴァの登場によって、それに対抗できるエグザマクスを製造する我々サイラスは今後、世界の中心に立たされます。」

今後の事態に備えて、社員の志気を高めておかなくてはなりません。戦地から無事に帰還した英雄を称えることで、自分たちの仕事に誇りを持たなくてはいけません。

サイラス私設傭兵部隊は我が社の広告塔であり、タレントなので。英雄にふさわしいかどうかは問題ではありません。英雄的でありさえすればいいのです。人々は都合のいいように勝手に解釈してくれます。

もし、アマギ隊長やサニー・バニーに負い目を感じるのなら、それこそ彼らに対する冒瀆です。あなたは彼らの気持ちを無駄にするつもりですか」

そう言われては僕はぐうの音も出せない。この卑怯者め。

「それと――式典ではくれぐれも、おかしな行動だけはつつしんでくださいね」と付け加えて上目遣いでニコツと笑いかけてくる。

ツンデレは専務の得意技だ。けれど『ツン』9に対して、『デレ』1ほどしかない。『ツン』を『デレ』でフォローしきれていないのがイノウエ専務だ。

いや、その本質はツンデレどころか冷酷無慈悲なツンドラだ。永久凍土ドラ伊でドラステイックで、僕らはおろか企業、さらには国家すらを舞台裏で操るドラマツルギー。どら息子ならぬ、どら娘か。社長令嬢で帰国子女の天才放蕩娘だ。

「専務は、何者ですか？」

僕は思わず、以前からずっと抱えていた疑問を投げかける。

「わたくしは、わたくしですよ。うふ」



ジェイクとアーニヤ、ハルトと僕の4人は真新しいサイラスの制服に身を包み、壇上に並んで立つ。式典とはいっても、それほど厳かなものではない。式典会場は、本社会議室のパーティーションを取っ払って臨時につくられた簡易的なもので、年度始めの大規模朝礼のような雰囲気だ。

会場には本社従業員の3分の1ほどが仕事の手を止めて足を運んでくれた。その一番前の並びには僕の同期入社メンバーも数人いた。

その中の物流管理部に所属する一人は、僕がさんざん要請し続けたMサイズのオムツを、1年間にわたって失念し続けた張本人だ。おかげで僕がどれだけ困ったことか。彼は、そんなことなどすっかり忘れた様子で僕に向かって無邪気に手を振る。

会場には小型のカメラも数台設置され、この式典の様子は各部署と関連会社にも配信される。定刻になると、会場の脇に設えられた卓上のマイクを使ってイノウエ専務自らが表彰式典の開始を宣言した。

「お忙しいところをお集まりいただきありがとうございます。これより、任期を終えて本日帰還したサイラス営業部・サイラス私設傭兵部隊の表彰を行います。」

ご存じのとおり、彼らは我が社が抱える優秀なテストパイロット部隊であり、我がサイラスの看板です。彼らが収集した稼働データは、これまでのエグザマクス開発に多大な貢献をしてくれました。

そして、同時に彼らは世界で誰よりもエグザマクスの操縦に優れる者達です。たとえ明日、アメリカや中国、あるいは異星人が日本を攻めてきてたとしても彼らが迎え撃ってくれるでしょう」

僕はギョツとして、横目で専務の方をみやる。専務もニヤつと笑いながら、横目でこちらの表情を確認していた。

「うふ。冗談です。サイラス私設傭兵部隊の活躍により、我々が製造するエグザマクスの世界的な普及が加速化しています。うれしいことに世界各国からの需要で、我が社の業績も右肩上がり伸びております。」

そして、世界が戦争の形を変えました。堅牢なエグザマクスのおかげで、戦争での死者は旧来より著しく減っており、世界の戦死者は10年前のおおよそ10分の1にまで減少しています。

これは、一重にわたくしが設計したエグザマクスの優れた性能と、開発に携わったエンジニアのみなさま、製造に携わる関連企業のみなさまの日々の絶え間ない努力によって達成することができたのです。

そして、サイラス私設傭兵部隊にはエグザマクスの実戦テストという、もつとも過酷な環境で仕事をしていただいています。彼らはいわば、我が社の英雄です。よって、帰還を祝して彼らの表彰を執り行いたく式典を設けました次第です」

そこまでスピーチを終えると、秘書から勲章を受け取った専務が、サイラス私設傭兵の一人ひとりの胸にサイラス社のロゴをあしらった三角形の勲章をつけていく。ハルト、アーニヤ、ジェイクの順番で、僕が最後だった。

専務が僕の胸に勲章をピンで留めている間、専務の小さな頭が僕のアゴのすぐ下にあり、絹糸のような銀髪が照明の光を湛えて眩しいほ

どに輝く。それは砂漠の強い照り返しを思い起こさせ、同時にアマギ隊長とサニー・バーニーのこともフラッシュバックのように思い出す。

僕は胸につけてもらったばかりの勲章を握り締める。こんなものに何の価値があるというのか。彼らはこんなもののために戦ったんじゃない。

強く握った掌に勲章の突起が刺さって血が出る。痛い。けれどこんなのはまったく痛くない。隊長とサニーの苦しみに比べれば。僕はそのまま勲章を引きちぎって地面に叩きつけてやりたい衝動に駆られる。

ところが、震える僕の手で専務が浅黒い手を重ねてそれを制す。青い瞳と目が合うと、先ほど専務に言われた言葉が脳裏によみがえった。

『アマギ隊長やサニー・バーニーに負い目を感じるのなら、それこそ彼らに対する冒瀆です。あなたは彼らの気持ちを無駄にするつもりですか』

専務は無言で僕の目を見据えた後、目を伏せてかすかに首を振る。健康的な褐色肌に銀のまつげが映える。僕が手から力を抜くと専務は僕から手を放し、踵を返して舞台袖の卓上に戻った。一瞬だけ僕をジロリと睨みながら。

そして、専務は再びスピーチを始める。一度だけ咳払いをすると、マイクで「安室^{アムロ}玲^{レイ}」と僕を本名で呼んだ。

僕は再びギョツとして専務を見やる。口角の片側がいやらしく上がっている。それにあの目。絶対にわざとだ。会場からはクスクスと笑い声が漏れる。僕は赤面して、体が熱くなる。

少し間をあげて専務が再び語りだした。

「とくにサイラス私設備兵部隊課の副隊長である安室 玲。彼は、わたくしと同じ弱冠24歳です。それも、戦闘訓練も受けていないただの青年です。

それでも自ら戦場に立ち、テストパイロットという危険な仕事を、弱音ひとつ吐かず、見事に勤め上げてくれています。なんて健気な青年なのでしょう。彼なくしてはサイラス私設備兵部隊は成り立ちま

せん。わたくしは彼に感謝してもきれません。

また、狙撃技術に優れたジェイコブ・アロースミス。格闘技術に長けたアンナ・カラシニコワ。銃火器のエキスパートメカニックである下条ハルト。それに、まだ帰国の途にある、エグザマクスチーフメカニックの川崎^{カワサキ}重工^{シゲノリ}、部隊顧問兼料理長の王^{ワン}・泰然^{タイラン}。

彼らはいずれも優れた技量と技術によって過酷な環境でチームとして戦い抜き、貴重な実践データを収集し、技術開発に多大な貢献をしてくれました。

しかし残念なことに、先日の戦闘でアマギ・シロー隊長とサニー・バニー、本名アンディ・クラークの2名は惜しくも命を落としてしまいました。

すみません。すべては、部隊の発起人であるわたくしの責任です。謝って済む問題ではありません。ですが、どうかこの場を借りて謝らせてください。アマギ隊長とサニー・バニーのご家族には心より陳謝いたします。

また、ともに1年を戦ってきた彼らサイラス私設備兵部隊の面々にも謝罪しなくてはなりません。

仲間を失って悲しかったでしょう。辛かったでしょう。苦しかったですでしょう。なんとしても助けたかったのでしょう。

だから、アマギ隊長とサニー・バニーのことは、わたくしの責任です。責めるのなら自分ではなく、わたくしを責めなさい。すべてわたくしのせいにしなさい。それはわたくしが負うべき責任です。

許してもらえるのなら、わたくしはエグザマクスによって、より安全で平和な世界をつくるために尽力いたします。もう二度と悲劇を繰り返さないために。

人の命はとても尊いものです。それをわかっているながらも、人は戦争をやめられません。戦争をやめられないのなら、戦争で死なないようにすればいいのです。そのためにわたくしはエグザマクスを産みだしました。

ゲーム盤の戦争と揶揄されるのなら、ゲームにしてしまえばいいのです。誰も悲しまなくて済むように。

わたくしはエグザマクスで世界を平和に導けるものと信じています。そのために我がサイラス社は誕生したのですから。みなさま、どうかわたくしと一緒に平和な未来をつくりましょう」

結びに専務が深々と頭を下げると、参列者から惜しみない拍手が捧げられる。

誰に。僕らにではない。専務にだ。

僕らは会社をまとも上げるダシに使われている。元々そうだったのだから驚くべきことでもなんでもない。

ジェイクもアーニャもハルトも欠伸を噛み殺すので必死のようだった。

第18話 ただいまっ！ こちら安室家（家族団らん）

僕は何者だ。

安室^{アムロレイ}玲。24歳。

千葉県生まれ千葉県育ち。父は千葉県出身。母は沖縄県出身。二人の双子の妹がいる。

名前が某ロボットアニメの主人公と同じである。10年前に起こったスカイフォールに間近で遭遇し、垂れ落ちる空から光臨する巨大な天使を見たことがある。それ以外はこれといった特徴も特技もない、ごく普通の人間だ。

Fランク大学の工学科を出て、当時はまだ零細企業に近かったサイラスに入社した。1年の研修を経て、僕が配属されたのは『サイラス営業部・サイラス傭兵部隊課』。そこは、サイラスが製造するエグザマクスのテスト部署だった。

そして、僕はイノウエ専務の意向で入社2年目にして、頭のイカレたプロの傭兵達とともに海外の戦場へ放り込まれることになる。

主な仕事は事務管理ではあったが、なぜか僕もエグザマクスを駆って戦闘にも参加させられた。よりにもよってロボットのパイロットだなんて。名前に起因する嫌がらせだろうかとも考えた。

そもそも、民間企業に在籍する一般人が戦闘行為をしてよいものなのだろうか。海外なら問題ないのだろうか。それともテロリストと同じ扱いなのだろうか。

エグザマクスの操縦は研修で教わっていた。けれど僕は格闘技はおろか、喧嘩すらしたことがない。本物の戦闘なんてできっこないじゃないか。専務の僕に対する采配に疑問を抱かずにはいられなかった。

再三、転属願いを出したのにも関わらず、専務はそれを受理してくれなかった。家族には仕事で戦争をしているなんて言えっこない。挙げ句の果てに、僕のふがいなさが原因でアマギ隊長とサニー・バ

ニーを死に追いやった。

僕はいったい何をやっているんだろう。

一年ぶりに帰省した千葉の実家の自室で、僕は単周期の睡眠と覚醒を繰り返しては布団に入ったまま天井を見上げ、物思いに耽ふけっていた。

古い日本家屋の6畳間の天井には、二年前と同じ場所に当時と同じシミがある。昔から嫌なことがあった時にはよくこうしてふて寝をしていたものだ。

この二年間の出来事がすべて夢だったらいいのに、と思う。こうして天井を見上げていると二年前にタイムスリップしたような気分にはなるけれど、当然ながら時が戻るわけではない。現実是不変ならないし、隊長もサニー・バニーも生き返ることはない。

西側に面した窓からは、変わることもなく日暮れ前の夕日が強く差し込んでくる。僕は書き掛けの退職届を机の上に散らかしたまま、貴重な休暇初日のほとんどを寝て潰した。

「兄ちゃん。晩飯だよ」

襖ふすまの奥からくぐもった妹の声が聞こえた。やや低いこの声は雫しずくの方かな。「うん、今いく」と返事をして、僕はもそもぞと布団から抜け出すと、パジャマの上にカーデイガンカールデイガンを羽織って食卓がある居間へと向かった。

居間に入ると、すでに家族のみんなが食卓についてた。父は缶ビールを開けて妹達と一杯やっている。「あ、兄ちゃん。早く座りなよ」と、僕に気付いたもうひとりの妹の穂香ほのかが僕に声をかける。入口に背中を見せて座っていた母も僕に気付いて振り返り、手招きをする。

「疲れはとれたかい。海外出張は大変だったろう。今夜はレイの帰省を祝してお寿司をとったのよ。むこうじゃ食べられなかったでしょう。さ、早く座りなさい」

6人掛けのテーブルセットの短い辺の上座には父が座り、長い辺にはほとんど同じ顔をした双子の妹達が並んで座り、その向かいに母が座っている。僕の席は昔から変わることなく父と母の間だった。

「さて」と、僕が席に着くと父が音頭をとる。「よく無事に帰ってきた

な、レイ。まずは乾杯をしようじゃないか」

そう言つて父は僕の席に伏せてあつたグラスをひっくり返し、ビールを注ぐとする。グラスをつかんで父に注いでもらう。

「兄ちゃん、お帰り」

「お帰り、レイ」

「お帰りなさい、レイ」

改めて声にするのはなんとなく照れくさかつたけれど「ただいま」と応え、グラスを鳴らす。

「この1年間はどうかだつた。若いうちに世界を見ておくのは勉強になつただろう。勤務地は中東だつたか。危険はなかつたか」

「うん。危険といえば、巨大なサソリに遭遇したことくらいかな。ほとんども熱い砂漠で過ごした。ドバイの高い高いブルジュ・ハリファは見たよ。昇つてはいないけれど」

僕は夕食のリップサービスとして中東での思い出を話す。砂漠に夜空に広がる満天の星空の美しさや、朝日に照らされた砂漠の霧海の雄大さも土産話として語つて聞かせた。

サイラスの仲間達のこと話したけれど、僕らがテストパイロットとして戦争をしていたことはもちろん伏せておかなければならない。嘘はついていない。すべてを語つていないだけだ、と僕はわずかな後ろめたさをビールと共に飲み込む。

父と母、それに妹達にとつて僕はサイラスの庇護の元、あくまで安全が確保された地域で仕事をしていることになっている。

実際は、世界でもっとも危険な無法地帯でテロリストを武力支援し、反政府軍の兵士達と寝食を共にし、アメリカ軍と戦い、仲間が死んだなどという話をしたら、きっと母は卒倒してしまうだろう。

もちろん異星人に遭遇したなどということは専務に口止めされているため、間違つても語る事ができない。もつとも、語つたところで、信じるはずはないと思うのだけれど。

「したっけさ、かわいい妹達におみやげの一つもないわけ？」

「急に帰国が決まつたから」

「まあいいわ。ささ、お兄ちゃんさま。もう一杯。ググつといっ

ちやつて」

穂香が僕にビールの注ぎ口を差し出してくる。

「気持ち悪いな。なんか企んでるだろう」

僕はそう言いつつ、グラスにビールを注いでもらう。穂香が『お兄ちゃんさま』と僕を呼ぶときは、昔から決まって何かお願いごとがあるときだ。穂香の性格は、どちらかというとお調子者で活発。対する僕は比較的口数が少なくおとなしい性格だ。

「実はさあ、あたしと僕は今年就活なんだよね。そんでえ、お兄ちゃんさまに口利きしてもらえないかなあ、なんて」

「口利きって、サイラスに就職するための?」

「もちろん」

穂香はそわそわした様子でビールを口に運ぶ僕をじーつと見やる。雫までもが懇願の目で僕をみつめてくる。

「サイラスは兵器をつくっている企業だぞ。サイラスだけはやめておけ。きつと後悔する」

「兵器でも平気、へーき」

「ねー」と、お互いが向き合い、双子同士の絶妙なシンクロ発声で同意しあう。

「サイラスはいまや世界トップ企業だよ。せつかく兄がサイラスにいるつてのに、このコネを使わない手はないじゃない。もやもやしー」
「コネクション、ねえ」

正直、僕は人事部に口利きできる立場にいない。僕が話せるのはイノウエ専務くらいのものだ。もちろん、専務の立場なら人事の裁量権はあるだろうけれど、専務にお願いごとなんかしたくない。

いたずらっ子のようなイノウエ専務のニヤケ面が頭に浮かぶ。専務に借りをつくったりしたら、要求される見返りは倍返しじゃ済まない。後が怖い。それに、僕が辞められなくなってしまうじゃないか。

「無理。だめ。絶対」

「二ええええ、ケチ」同じ顔が眉間にしわを寄せて、トーン違いの声でブーブー文句を言う。

「やっぱり危険な仕事なのね?」そのやりとりを聞いた母が、今度は不

安な面持ちで僕の顔をのぞき込んだ。

「いや、その。仮に戦争にでもなったら、サイラスは真っ先に狙われる」

「——はあ？ 戦争？」穂香をはじめ、家族全員がきよんとした顔で僕を見る。

全員の注目を集める居心地の悪さに、僕は「かもしれない」と言葉を付け加えて誤魔化した。そこへ助け船のように、外からゴロゴロとした自動車の大きな排気音が鳴ってすぐに止まった。おかげで僕への注意が薄れる。

「あら、宅配便かしら？」と母。程なくしてインターフォンが鳴った。「あ、私宛の荷物かも。出るね」と雫が席を立てて玄関に出て行く。

その間も、穂香は僕のご機嫌取りに必死だ。「あたしの中トロあげからさあ。お願い、お兄ちゃん！」と懇願するけれども、中トロごときで僕は残りの人生を棒に振りたくない。それに、妹達にも危険な目には遭わせられない。

「はわー」

突如、玄関に出て行った雫の悲鳴らしき声が響く。

声の調子からすると危険性はないものと察知するが、その声に驚いた僕らはお互い顔を見合わせる。それに続いて女性の声があった。狭い家だから、玄関でする声は居間にいたままでもハッキリと聞き取れる。

「Is Ray Amuro here? ah——ココニ、レイ

アムロハ、イマスカ？」

「イ、イ、イエス、ヒー、イズ」

そんなやりとりが聞こえたあと、雫が必死の形相で居間に逃げ帰って来て、穂香の陰に隠れる。遅れて入ってきたのは背が高く、なんとも場違いな、真っ赤なホルターネックドレスを着たブロンドの女性だった。

「ア、アーニヤ？」

「Hi. Ray. How are you？」

「Good——じゃなくて、なんでここに」

アーニヤは驚いて尋ねた僕の質問を無視して、父と母の存在をまず確認すると二人にハグとチークキスをする。

家族団欒に突然乱入したロシア美女の抱擁に母は唾然とし、父は赤面していた。その後、アーニヤは思い出したかのように深々と頭を下げると、編み込みアップにしたブロンドの後れ毛が垂れ、バックレスドレスの背中が丸々露わになる。

「ハジメマシテ。レイノオトーサン、オカーサン。イツモムスコガオセワニナツテマス」

『息子が』じゃなく『息子の』だ。アーニヤが下手くそな日本語で、どこかで覚えたらしい日本の定型文的な挨拶をする。あーあ、おまけに土足のままじゃないか。

アーニヤは続いて雫と穂香の姿も認めると、同じく半ば強引に二人を同時にハグしてチークをかわす。

「Oh. Cute twins! レイノマシンノナマエトオナジ、『シズク』ト『ホノカ』ネ」

「兄ちゃん、なに。機械にあたし達の名前を付けて呼んでるの？」アーニヤに抱きしめられたままの穂香が恐る恐る僕に尋ねる。

「うわ。キモっ」同じくアーニヤの腕のなかで、雫が辟易した顔をする。

「いや、僕は呼びやすい名前をつけただけで——だから、いったい何しに来たんだ」

僕はアーニヤを妹達から引き剥がすと、強引に玄関先へ引つ張り出して事情を問いたです。

「レイ。センムカラ、デンゴン——」
「片言の日本語はもういいから。普段通り英語で話してくれ」

「——レイ、アンタ、電話の電源切りっぱなしだろう？ おかげで貴重な休暇中に、アタシが専務から言付けを受けちまったじゃないか」「え、あ、ごめん」

寝ている間に、いつの間にか携帯端末のバッテリーがなくなってしまうっていらしい。休暇中ということにチエツクすら怠っていた。というか、アーニヤはその目立つ格好で、一体どこで何をしていたん

だろう。

「それで、専務はなんて」

『休暇中に悪いけれど、明日9:00に本社へ来い』ってさ。そんだけだよ。いいかい、伝えたからね」

それだけ言うと、アーニヤは不機嫌そうにお尻を振りながら、乗ってきた黄色いランボルギーニの低い運転席に滑り込む。長めセルモーター音の後、野獣の咆哮ほうこうのような排気音を住宅街に轟かせてV型12気筒エンジンが始動した。

アーニヤは思い出したかのように窓を開けて、僕に声をかける。

「思ったより元気そうじゃないかい。安心したよ。いいね、家族は」

「アーニヤの家族は？」と思わず訊いてしまったから僕は後悔する。やかましい排気音でかき消されてくれればいいなと思っただけ、聞こえてしまっていたらしい。彼女はフンと意味ありげな微笑を残して前方を向くと、そのまま車を急発進させた。

低い音程のランボルギーニの排気音が、遠くなるにつれ小さくなり、さらに低くあたりにこだまする。――まったく、近所迷惑だよ。

「レイ」

砂利を踏む足音がし、後ろからトンと優しく肩を叩かれる。昔より小さくなったように感じる父の手が僕の肩に乗った。

「あの人は？」

「ええと、さつき話した同僚」

「そうか」

少し間を置き、父はさらに言葉を続ける。

「レイ。現地で辛いことがあったんだろう。取り繕っていてもわかるよ」

そう言うと、両手を使って僕の両肩を揉む。この歳になっても父の力強さと存在の大きさを感じた。僕の肩からは緊張が抜ける。

「話したくないなら無理には訊かない。お前が、無事に帰ってきただけで父さんも母さんもホッとしているんだ。仲間に恵まれて、大きな仕事を終えて、こうして帰ってきたお前を誇りに思うよ」

「父さん」

僕は思わず背後にいる父の顔を振り仰ぐ。沈みかけた夕日に照らされた父の顔は、僕の知っている父の顔とは少し違って見えた。ロシア美女アーニャにハグされて、鼻の下が延びた父親の顔というものを、僕は生まれて初めて目の当たりにした。

第19話 異星の異性による為政（伏線回収）

「おはようございます、レイ。さあ、行きましようか」

「ど、どこへ？」

「もちろん、デートですよ。うふ」

アーニヤの伝言に従って、約束の9:00少し前にサイラス本社ロビーに到着した僕を、イノウエ専務はエレベーターに誘う。そして、専務は最初から決まりきっていたように屋上行きのボタンを押した。

屋上にあるものと言えば、幕張のビルから望む東京湾と、誰にも邪魔されない静かな場所。それにヘリポートくらいのものだ。

上昇し続けるエレベーター内は、退職願を提出する絶好のチャンスだったのだけれど、出会って早々に届け出るのもためられた。それに、何十階もあるビルではないから、エレベーターが屋上に到着するまでにそれほど時間はかからない。

最上階から階段で本社屋上に昇ると、アイドルリング状態で待機されていた社用ヘリが視界に飛び込む。専務は高周波音を発するヘリに向かってまっすぐに歩く。僕は少々混乱しながらも、ただただ専務について行くことしかできない。

東京湾から吹き付ける海風とアイドル回転で回るローターが起す降下気流が、前を歩く専務の銀髪とスカートの裾をはためかせる。専務は乱れる髪を左手で押さえつけると、その手首に付けていた紫色のシユシユを使ってサツと銀髪をまとめ上げ、手慣れた所作でコックピットへ乗り込んだ。

専務は離陸の準備をするためにコンソール上のスイッチを操作し始める。そのさなか、呆然と立ちすくむ僕に気付いた専務は『後ろに乗れ』と親指で指示をする。

ヘリでどこへ連れて行くつもりなのだろうか。アイドル回転でもヘリコプターの頭上に備わったターボシャフトエンジンはやかましいため、もはや訊くに聞けない。僕が乗り込んだのを確認すると、専務は後ろ手で鼓膜を保護するためのイヤーマフを僕に押しつけた。

それから専務はレバー類を操作し、その感触を確かめている。リクルートスーツのタイトスカートではラダーペダルの操作がしにくそうだったが、専務はスカートをきわどい位置までズリ上げることのできるペダルの操作性を確保した。それからいくつかコンソールのスイッチを操作すると、僕が装着したイヤーマフからポーンと無線接続を示す電子音が鳴った。

「へー、ご利用ありがとうございます。本日は2022年6月17日。天気は晴れ。当機のパイロットを務めますのはセーラ・イノウエです。うふ。フライト時間は30分を予定しております。揺れますのでシートベルトをしっかりと締めたうえで、携帯電話の電源はお切りください。これより離陸いたします」

イヤーマフに備わったインカムに向かって、飛行機離陸前の機内アナウンスのまねごとをする専務。「どこへ？」という僕の質問は、回転数を上げ始めたターボシャフトエンジンの高周波音と発破音のようなローターの回転音でかき消され無視された。

ローターの回転数が一定まで高まり、専務が左手に握ったコレクティブレバーを引くと不安定な浮遊感を伴ってヘリが上昇を始める。同時に、ストッキングを履いた細い足でペダルを操作するとヘリがゆっくりと回頭し始める。

それから右手でサイクリックレバーをわずかに押し込み、同時にコレクティブレバーが微操作されると前傾姿勢になったヘリは素晴らしい加速力を発揮した。僕の身体は、重力によってシート前側へ引きずられながら、加速によって後ろへ追いやられるという不思議な感覚に襲われる。

正面のキャノピーには幕張の臨海都市が眼下に広がっている。前方を見据える専務は、いつもは肩までおろした髪に隠れて見えない浅黒い首筋と銀髪のようなじを露出させていた。

レバーやペダルを細かく操る専務の浅黒い手足は華奢と言えるほど細く、ヘリの操縦はもとより実務をこなせるようには見えない。けれど、フォーマルスーツ姿でヘリを操縦するアンマッチな光景は、専務の特異性をさらに強調する。

専務の能力は底知れない。あの複雑なエグザマクスを設計するくらいだ。ヘリの操縦など片手間で覚えられるだろう。いまさら専務が何をしようが驚かない。

シリアの戦争孤児だった専務を、現サイラス代表取締役社長の井上^{イノウエ}喜政^{ヨシマサ}が引き取って養女にした。そして海外留学して飛び級で博士号を取得。日本へ戻ってエグザマクスを設計し、サイラスの専務役に着任した。以上が公表されている専務の経歴だ。

サイラスの社名の綴りは「シリア人」を意味する『S i r i a s』ではあるものの、実のところは『S a l l a ' s』^{セーラズ}。つまり、実質的にサイラス社は彼女の所有物だという噂もある。

もし事実がそうであったとしても別段驚きはしない。納得させられるだけの根拠があるからだ。これで僕と同じ24歳。対抗意識など燃やすまでもなく、見ているとまったく異質な存在なのだというあきらめに近い感情を抱かせられるのが、僕から見たイノウエ専務の印象だ。

専務が操縦するヘリは房総半島を東京湾に沿って南下する。ヘリから見える景色は都市から住宅街へと変わり、いまは山と海岸線だけに変わっていた。

さらに飛ぶと、はるか前方の正面には海上自衛隊の館山航空基地の広い敷地が望めた。どうやらあそこが目的地らしい。



イノウエ専務はヘリコプターを滑走路にタッチダウンさせると、エンジンを停止させるためにコンソール上のスイッチ類を操作する。最後にイグニッションキーをオフにすると、ターボシャフトエンジンが徐々に周波数を下げた。頭上に備わるレバーを何度か操作すると、ローターが徐々に回転を遅めて止まった。

「降り口は右側です。お忘れ物などございましたらご注意ください」

専務が発する電車風のアナウンスに促されて地面に降り立っても、

依然としてふわふわとした浮遊感が残っている。操縦席のハッチが開き、専務が降りようとするのを察知した僕は、一応部下として手を差し出すと、「あら、ありがとう」と、専務は満足げに僕の手を取ってタラップを降りた。

「さて、目的地はあの格納庫です。少し歩きましょうか」

専務が地上に降り立つと誘導の自衛隊員が敬礼をした。それを小さく手を挙げて制すとシユシユを外して髪を整え、颯爽と滑走路を歩き出す。僕は半歩後ろをついて歩く。

「今日はあなたに色々な事を説明をするために時間を設けました。包み隠さず、すべてをお話しますよ。何から聞きたいですか」

そう言って、専務は歩く速度を落とし、話がしやすいよう僕の隣を歩く。

聞きたいことはたくさんあった。バイロン軍について。そして彼らが使うポルタノヴァと僕らが使うエグザマクスの類似性について。これから地球はどうなるのか、専務はこの事態をどうするつもりなのか。一般人と僕らサイラス私設傭兵部隊はどうなるのか。聞きたいことがたくさんありすぎて、なにかから聞くべきか思い悩む。

「さしあたり、バイロン軍についてお願いします。彼らは何者なのでしょうか」

「わかりました。とはいうものの、バイロンを知るうえで、どこから話すべきでしょうかね。うーん」

眉間にシワを寄せ、専務は珍しく難しい顔をする。そして言葉を探るように話し始めた。

「まず、あなた方が中東で遭遇したバイロン軍はスカイフォール、つまり時空間転移を用いてバイロン星から訪れた地球に対する侵略者です。というのはすでに理解していると思いますが、それは紛うことのない事実です。」

バイロン星は、地球から見て26光年離れたこと座のヴェガを恒星にもつ、とても美しい惑星です。直径は地球より少し小さく、自転周期は約30時間、公転周期は149日。地球と同じく窒素と酸素と二

酸化炭素を主とした大気で覆われ、地球ほど多様ではありませんが、生態系や植生はほぼ地球と同じと言っていいでしょう。

ただしバイロンは地球と異なり、二つの衛星が存在します。赤い月と青い月が交代で現れ、両方の月が空に現れる真満月には美しい紫色の夜が訪れます。また、ヴェガの活動が活発になる時期には、赤道付近でもオーロラが見られます。

惑星周期によってはM56星団の星雲が、地球よりも遙かに大きく、明るく、鮮やかに夜空を照らすのです。バイロンはこの地球に劣らないくらい、それはそれは美しい星でした」

まるで見てきたかのように語る専務の言い回しに対して、僕の頭の中にはたくさんの疑問符が浮かぶ。しかし、バイロン星の美しさを嬉しそうに語る専務に水を差すまいと、僕は口を挟まずそのまま聞き続けた。

「この始まりは地球における西暦1936年。そのとき何があったかわかりますか。

——ベルリンオリンピックです。そして地球初のテレビ放送がおこなわれました。

その微弱ながら恣意的な電波信号は、知的生物の痕跡を成すものとして、地球の電離層を越えて宇宙に向けても発信されました。その意図がまったくなかったとしてもです。ドイツ・ナチス党は地球上だけでなく、宇宙空間にまでその存在を知らしめたのです。

それから26年後、ベルリンオリンピックのテレビ放送電波は地球から26光年離れたバイロンの電波望遠鏡に捉えられ、バイロンは地球の存在を知りました。それは、バイロン星の人々にとっては好機でした。

なぜなら、バイロン星はちょうど存続の危機に瀕していたからです。移住先となりえる自分たちの姿とよく似た生命体が住む星を労せず見つけられたのですから歓喜すらしました。

ちなみに、あの演説をしたチヨビヒゲのおじさまは、『救星主』と呼

ばれてバイロン星では伝説的アイドルのような存在ですよ。うふふ」

ああ、そういえばそんな内容のSF小説があつたなと読書遍歴を辿るけれども、小説の著者とタイトルはどうしても思い出せなかつた。

「ここまでがバイロン星の概要です。そして、ここからが本題です。

もし、あなたが地球の指導者だとして、地球に避けがたい危機が迫っていることを知った矢先、手が届くところに自分たち移住できそうな惑星が存在することを知ったら、どうしますか？

バイロン星では、共生派と侵略派に分かれました。共生派閥は、惑星の一部を間借りできるよう地球側と交渉をしようと言い、侵略派閥は文字通り地球そのものを乗っ取ろうと言い出しました。

最初の20年ほどは、代替案の検討と話し合いによる議論がおこなわれました。同時に無人衛星も打ち上げられ地球の探査も行われました。しかし時が経ち、星の危機が近づくにつれて、両者は次第に強硬姿勢を取るようになり、挙げ句の果てに両者は戦争で星の運命を決めたのです。

そして、約15年間もの長い戦争を経て最終的に勝利したのは侵略派閥。その結果誕生したのがあのバイロン軍です。

彼らの文明は地球よりもわずかに進んでいます。地球で言う量子通信技術を行えば監視衛星から発せられる地球の位置情報を取得し、量子テレポーテーションとも言える空間転移技術を用いて何光年も距離を一瞬で移動できます。

ああ、ちなみに地球の都市伝説界隈で『ブラックナイト』と呼ばれている地球軌道上の物体はバイロン星から送られた監視およびビーコン用の量子通信衛星ですよ。そして10年前と先日、あなた方が見たスカイフォールと呼ばれる空が落ちるような現象は、その空間転移ゲートを使ったときの余波です。

本来であれば、地球西暦の1999年に一度目の侵攻作戦が行われる予定でした。しかし、共生派閥の残党がなんとかそれを阻止しまし

た。

二度目の侵攻作戦は、今から約10年前の2012年。このときは共生派残党が、地球侵攻のために温存していた空間転移ゲートを奪取し使用しました。空間転移ゲートは一度使うとエネルギーが蓄積されるまで使えません。そのおかげでバイロン軍はさらに地球侵攻を遅らせねばならなくなりました。

そして紆余曲折あり、先日とうとうバイロン軍の侵略本隊が地球に降り立ったというわけです。残念ながらこの10年間に関しては、わたくしも一切の情報を持っていません。

これがバイロン星の近代のあらままと、バイロン軍が地球に侵攻してくる理由です。おわかりいただけましたか？」

専務は、安易に練られたSFのようなストーリーを、真顔で語る。嘘をついているようには思えない。僕は専務の頭がおかしくなったと思った。大企業の専務という重職ゆえの過労、もしくは天才にありがちな統合失調症かと。そうであれば、どれほど荒唐無稽であつても、それは彼女の真実なのだ。

とはいえ、もつともらしい真実を知らされたところで、それを事実として安直に受け入れることはできない。人間はこれまでの人生経験で培った常識の枠から、想像力が働く少し外側の範囲までしか認知できないのだ。枠から完全に外れた事柄は事実と受け入れられず、ただの意味記憶として頭の隅に追いやられる。

真実とはなんだろう。事実とはなんだろう。真理とは。そもそも、普通に生きる僕ら一般人は、事実を知るための判断材料を持ち合わせていない。仮に一分の隙もない客観的な事実を突きつけられたとしても、突飛であればあるほど疑念を抱かされる。

事実を追い求めようとすればするほど、僕らは事実からかけ離れてしまうパラドックスに陥る。結局のところ、信じるられるかどうかよりも、何を信じるかが問われるのだ。

僕は専務を信じられるだろうか。2年に渡って専務の元で働き、二度のスカイフォールに遭遇し、中東でポルタノヴァを実際にこの目で

見たとしても、現時点では到底無理だ。

目的の格納庫前にたどり着くと、専務はエグザマクス運用規格の巨大なシャッターを開くためのスイッチを操作する。短くアラームが鳴った後に巨大な耐爆シャッターが重々しいモーター音を発してゆつくりと持ち上がる。

「頭がおかしいと思われるかもしれませんが、これは事実です。それに、わたくしは統合失調症でもありませんよ。わたくしには彼らの地球侵攻をくい止める義務があるのです。そのために、10年前、わたくしはこの星に来たのですから」

僕は頭の中を覗かれたような気がして一瞬驚く。そのせいで、発言の肝心な部分を聞き落とした気がした。『10年前？ この星へ？』その漠然とした疑問は次の瞬間に僕の頭の中からかき消える。

僕の意識はシャッターの中にあるものに移り、それを見てさらに驚いた。

「そして、これを見たら、あなたは、わたくしの言うことを嫌でも信じざるをえなくなります」

シャッターが目線の高さまで開放されると、薄暗いながらも格納庫の中の様子が伺い知れた。広い格納庫の一番奥には、見慣れない形をしたエグザマクスらしきものが鎮座していた。専務はシャッターをくぐって中へ入り、その巨大な人影を感慨深そうに見上げる。

それはエグザマクスというよりは、ポルタノヴァに似た丸みを帯びたデザインの機体。機体全体は羽衣を思わせる外部装甲板のようなものに覆われていた。顔は女性の顔のような造形が彫り込まれている。頭部には王冠のような装飾が施され、背面には鳥の翼を模したようなウイングスタビライザーも覗く。

シャッターが完全に解放されると、入り口から差し込んだ陽光が床面に反射して格納庫内が下から照らし出され、その全貌が露わになる。忘れようはずもない。それは、僕が10年前、霞ヶ浦で起きたスカイフォールのときに見た天使の姿そのものだった。

「これはバイロンが使うポルタノヴァの原型とも言える古い機体です。名前はありませんが、さしあたり『プロトノヴァ』とでも名付け

ましようか。あら、『原始』と『新しい』では意味が矛盾してしましますね。『原始の爆発』なら意味が通りますか。すべての発端としての」
専務はその場でクルリとこちらを振り向く。銀色の髪が遠心力でふわりと揺れる。薄暗い格納庫内に差し込むスポットライトのような陽の光を浴びて、専務自信が天使のように輝き出す。倉庫内に舞う無数のホコリも、時折陽光を鈍く反射させて瞬き、その神々しさを助長させた。

「10年前、わたくしがこの機体に乗ってこの星に降り立ったとき、こちらをずっと見つめる少年をみつけました。あのとき、あなたはわたくしを見ていましたね。わたくしもあなたを見ていました」
「は？」

「あなたは以前、わたくしに『何者か』と尋ねました。その質問にちゃんと答えしましょう。」

サイラスは中東シリア発祥と思われがちですが違います。実はわたくしも、こんな黒い肌の色をしてはいますがシリア人ではありませんよ。

わたくしはウチュージンです。

——わたくしの真名は『セイラム・ファティオム・メル・セム・バイロン』。

バイロン帝国星府、直系の血筋にして、弱冠14歳でポルタノヴァの全構造を含むバイロンの科学技術をすべてを把握した超絶天才、超絶美少女。

つまりわたくしはバイロンの叡智の結晶であり、バイロン星のお姫様なのですよ。10年前の空間転移で、この機体と共に送られたのは地球年齢で14歳だったわたくしです。

もつとも、わたくしが属したのは共生派閥。空間転移で内部紛争が続くバイロン星から逃がされた、というのが正確なところです。バイロン軍が侵攻に乗り出してきたということは、わたくしの血族を含む共生派閥の人間はすでに虐殺されたのでしよう。

わたくしはバイロンから単身地球に送られた共生派閥の生き残り。そして、とうとう大腕を振って地球侵略に乗り出してきたバイロンの

侵略派閥に対抗するための最後の切り札です。

地球のみなさまからみれば、こと座からやって来たわたくしは、うやうやしき織り姫さまといったところでしょうか。うふ」

僕は専務の言った言葉を飲み込めない。もちろん理解はしている。それどころかパズルを解いたような達成感すらある。けれどあまりに常識を逸した事実に対し、理性が受容するのを拒んでいるようだ。頭がおかしくなってくる。けれどパニックとは違う。理解できずに混乱しているわけでもない。単純に、目の前の現実が受け入れられないだけだ。そうしなければ、僕のこれまでの常識の方が崩れ去ってしまう。知らぬが花とはよく言う。謎は謎のままのほうが美しいのだ。

その一方でこれだけは納得した。このふてぶてしく、人を見下すような専務の仕草や態度は王族のそれか。そして、王族としての求心力を備え、外交術と人心掌握術にも長けている。

「わたくしの目論見は、わたくしにとっても、地球のみなさまにとってもメリットがあります。しかし、地球の代表らに、事情を明かしても信じてもらうことはできませんでした。言語の壁もありましたし。

ですが一部の者は、地球外のちよつと進んだ知識を与えるだけで、しっぽを振ってわたくしに服従しましたよ。地球のトップらは利己的で横暴ですね。もっとも、それはどこの星でも同じですが。

根回しにはとても骨を折りました。だからわたくしはサイラス社を立ち上げ、エグザマクスを製造し、各方面に販売して回り、自然な形で地球全体の軍備を強化するなどという回りくどい手を使わざるを得なかったのです。

その結果、武力と経済力で各方にプレッシャーを与えられるようになるまで10年もの年月がかかってしまいました。まだわたくしを信用していない国や勢力もありますが、それももう時間の問題です。

どれだけ盲目でも、実際のバイロン軍の侵攻を目にすれば私の言ったことを信用せざるを得なくなります。間もなく、わたくしに助けを

求めて泣きついてくることでしよう。

ポルタノヴァに直接対抗できるのは、我々サイラスがつくるエグザマクスだけなのですから。うふふふふ」

共生目的というより懐柔目的。専務は悪魔ではなく、天使の姿をした宇宙怪獣だった。僕ら地球人は専務の巨大な掌てのひらの上で弄ばれていたのだ。10年も前から。

「さて、レイ。エグザマクスで模擬戦をしましょう。それが本来、ここへ来た目的です」

「え、なんで??」

突然の申し出に僕は素っ頓狂な声を上げる。専務のその言葉の一切が理解できなかったからだ。

「もちろん、サイラス私設傭兵部隊の一員として生き残った、あなたの技量を確かめるためです。率直に申し上げますと、わたくしはあなたに今後のバイロン軍との戦いにおける英雄的存在になつていただきたいのです」

「嫌です。英雄なんて」

「いいじゃないですか、器量の小さい人間です。それでも男ですか、この軟弱者。どうせ本格的に戦争が始まれば、国家規模で一般人からも徴兵され、どのみちあなたも戦地に向かわねばならないのですよ」

「僕は閉口する。」

「ならこう言いました。本来なら、それはアマギ隊長の役目でした。ですが、あなたのせいでアマギ隊長は死んだのです。あなたには責任をとる義務があるはずですよ」

人が嫌がることを平然と言つてのける。僕はさらに言葉を失う。ようやく絞り出せた言葉は泣き言でしかなかった。

「僕は英雄になんてなれません。僕ではすぐに死んでしまう」

「それがかまいません。お膳立てや演出はすべてこちらで行いますから。あなたは英雄として、象徴として人々の心を集めた後、劇的に死んでくれるだけでいいのです。それだけで地球全体の意志を一つに

まとめることができません」

鬼だ。魔女だ。セイラムの魔女だ。

「あなたならできますわ。自分の可能性と、わたくしを信じなさい。あなたはアムロレイ。わたくしはセーラです」

「そういう問題じゃありません」

「強情ですねえ。ではこうしましょう。模擬戦をして、わたくしに一撃入れられたら諦めます。もしできなかつたら、その時はわたくしの下僕となること。いいですね」

英雄から一気に下僕に成り下がったのだけれど、僕の聞き間違いだったろうか。「その前に」と、専務が手の平を上に向けてこちらに差し出す。

「そのポケットにしまっている退職届は、わたくしが預かっておきます」

洞察だろうか。それとも異星人故の特殊な能力か何かだろうか。以前から、専務はこちらの心を読むような言動をするようなところがあった。けれども、今となつては何があつても不思議ではない。専務に逆らう事自体が無意味なことのように思えてきた。

僕はノロノロとジャケットの内ポケットから退職届の封筒を取り出し、右手で差し出す。

専務は左手で封筒を僕の手ごと握ると、右手を繰り出し、いきなり僕の頭を驚掴みにした。その体勢のまま僕の目を見て言う。

「では、レイ。キスをしましょう」

「え？」

吸い込まれるように青く透き通った専務の瞳と目が合うと、金縛りにでもあつたように、まばた瞬きはおろか、視線すら外せなくなつていた。するりと間合いに滑り込まれ、専務は顔を近づけてくる。

圧迫感をともなつた低めの体温が僕の顔を覆い、小さく柔らかな唇が僕の唇に押し付けられる。絹糸のようにしっとりとした専務の細かい銀髪が僕の肌に触れ、切り揃えられたまっすぐな前髪が僕の瞼のあたりにかかった。

僕の視線は、焦点が合わず二重になって見える専務の銀色のまつ毛

とこめかみあたりを彷徨っていた。常識を逸した事態の連続に、僕は現実感を失うとともに脱力する。これは夢かもしれないと思った矢先に、専務はようやく唇を離した。

「これをもって契約締結とします。ああ、言っておきますが、バイロンの文化的習慣において、口づけに性的な意味はありませんよ。ただの契約の証です。よって、たとえなにがあらうとも契約を破ることは許されません。破った場合は死をもって償うこと。いいですね。

だから、バイロンではうそつきや浮気者や離婚者は存在しませんのよ。みんな死ぬのですから。うふ」

専務は無垢な少女のように屈託のない笑顔をつくる。

バイロン星人は性と生への認識に関して、地球人とは大きな差異があるらしい。

どっちに転んだとしても、僕はどのみち死ぬのだ。抜け出せない底なし沼に腰まで浸かった気分になった。

これは夢であってくれと、僕は切に願った。

第20話 英雄爆誕、そして落胆（模擬戦結果）

僕は、ずっと思い焦がれ続けた天使の姿を間近で見上げる。

銀色に鈍く光る衣を脱ぎ捨て、露わになった胴体は華奢とも呼べるほど細い。胸にあたる部分はわずかな膨らみがあった。全身は黒く、艶やかな皮膚を思わせるように鈍く光を反射する。肋骨のようなデイトールがなまめかしい。

均整のとれた四体をもつ姿の女神は、仰向けになった僕の上に乗り、彫刻のように端正な顔をこちらに近づける。そこに感情のようなものは見いだせない。その漆黒の顔面に刻まれた細く鋭い双眸が、今僕を見下ろしている。いや、僕は専務に見下くだされていた。

《1分も保たないなんて。まったく、興ざめですわ》

全重量を乗せて僕を拘束する専務は、ため息混じりに辛辣な言葉を放つ。小柄な体躯とはいえ、動作の起点となる腰部を押さえつけられ
ては、さすがにこちらも動けない。

退職を賭けた専務との模擬戦が始まるやいなや、僕は一気に攻勢に出た。条件は僕の方が有利だ。専務が駆るプロトノヴァに一撃入れるだけで退職が認められるのだから、手数で攻める戦法が最善と踏んでの判断だった。

しかし、専務には至近距離からのペイント弾の銃撃はおろか、四肢を用いた体術も一切当たらない。僕の操縦技術が拙いせいもあるけれど、のれんに腕押しのごとくするりと攻撃をかわされる。

専務のエグザマクスの操縦能力はアーニャと同等か、それ以上だと思えるほどだった。あげく、僕はものの1分ほどで押し倒され、あつけなくマウントポジションをとられている。物理的にも精神的にも、そして現在に至る。

《各部の出力はそちらの方が上。こちらは地球時間で100年近く前の機体ですよ。これではせつかく開発した新型機が出来損ないみたいではないですか》

さつきから機体性能に任せて拘束を振り払おうと試みているけれども、上手くいかない。専務が言うとおり、僕が今搭乗している新型

のラオビットは、僕らが中東で使っていたアルトよりも大柄で、各部門接のアクチュエーターの出力ゲインもアルトと比べておおよそ1割増しになっているが、それでも押し返すには至らない。

今、専務が搭乗している天使のような風貌をした機体は、バイロン軍が使うポルタノヴァの原型となる機体だそうだ。アルトよりもさらに小型とはいえ、概算で25tはあるだろう。パワーに任せて押し返そうとするも、振り払おうとするも機体は軋みを上げるばかりだ。《ぜんぜんダメです、レイ。脳波でコントロールするエグザマクスは、抽象思考と具体思考の両方が同じ方向を向いた集中状態こそ、より正確な機体操作が可能になるのです。矛盾があつてはEMFOD操縦制御システムが正確に思考を機体制御に反映させられません。

あなた動物に好かれないでしょう。よく犬に吠えられませんか？ あなたは無意識下で余計なことを考えすぎなのですよ。動物はそういう点にも敏感です。『ごちゃごちゃと、うつつうしいから近づいてくんない』とって吠えているのですよ。

頭の中がゴチャゴチャでは、エグザマクスも正確に動作させることはできません。だから動きが鈍いのです。中東で何を学んできたのですか。情けない》

そこで僕のサポートAIであるシズクはすかさず答える。

《マスターの中東での敵機を無力化した戦績は48戦中、わずか11機です。これは隊全体の撃破率のわずか0.3%です。ちなみにコックピット内で排泄物を漏洩させた回数は、撃破数を大きく上回る

《シズク。余計なことは言わなくてよろしい》

今搭乗している機体は、専務が登場している天使とともに、倉庫に格納されていた新型ラオビットのプロトタイプ機だ。機体のオペレーションシステムを僕のIDで立ち上げた際に、いつものクセでログイン後にシズクとのリンクを繋いでしまっていた。

自立型支援機であるシズクの本体は、現在サイラス私設傭兵部隊のチーフメカニックである川崎カワサキ重工シゲノリさんと一緒に日本に向かう船の中だから、この通信はネットワーク経由だ。

なにかアドバイスをくれるかと期待したけれども、この状態のシズクができるのは戦闘サポートどころか、僕のバイタルモニタリングと、ただの話し相手ぐらいにしかならない。おまけに余計なことまで話そうとする。

《それでも、あなたは見てきたのでしよう。サイラス私設備兵部隊の、彼らの戦いぶりを。彼らはわたくしが直々にスカウトした腕利きです。なら、知っているはずです。どう戦えばよいかを。これではアマギ隊長もサニー・バニーも報われません》

「そんなことを言われたって、僕には戦闘の才能なんてものはないのだから」

それを聞いた専務は、はあ、と何度目か知れない溜息をつく。

《才能などという幻想にすぎるのはおやめなさい。才能という言葉を使うこと自体が他力本願の現れです。それは優越感を得ることでの自己承認欲求を満たす行為であり、他人とは違う能力を欲するナルシズムの極み。ましてやそれに期待することは自慰にも等しい行為です。

かといって、努力という言葉に誤りに時間を浪費することも感心しません。努力と結果は比例しないうえ、人は努力量だけを推し量って己の価値を見誤り、増長しがちですから。

物事一つひとつに対する観察・考察・洞察その他諸々の細かな脳機能指令に対する生理的な表現の熟練こそが真に才能と呼ぶべきものです。才能とは、決して天から与えられるような他力本願な能力ではありません。

また、仮に才能なんてものがあつたとしても、所詮は能力の下限值と上限値を決めるだけのこと。あるいは、始めるきつかけと最終的な到達点を決定するだけのものです。多くの人間は、ほんの少しの努力でカバーできる範囲でしか能力を使えていないのですから、才能などというものに期待するのは無意味です。

落ち着いて、観察しなさい。洞察しなさい。考えなさい。要は能力の使い方です。見せてください、レイ。観察力や洞察を活かした、今のあなたができる最高の戦い方を》

頼んでもいない専務の人生講義に対して抗議したくなる気持ちを押し返して、僕は深呼吸をして頭をクリアにする。僕に巧技はできない。冷静になれ。頭を使え。アーニヤなら、ジエイクなら、サニーなら、アマギ隊長なら、この状況でどう戦う。

——と、考えてみても何も思いつかない。中東で1年間にわたって戦い続けたといっても、僕は後衛のさらに後方にいただけだ。おまけにまともな戦闘訓練なんてしてもらったことはない。ときどきサニー・バニーの筋力トレーニングにつきあって、役に立たない噂話や米軍や傭兵のウンチクやらを教えてもらっただけなのだから。

あとは事務作業しかしていない。それならそうと、訓練であることを伝えてくれてもいいじゃないか。それなら僕だって、それなりの対応はしたさ。挙げ句の果てにこの始末とは、理不尽にもほどがある。

「ふぬー」と叫びながら渾身の力を込めて操作を試みた。しかし、相変わらず専務の機体は僕の上に載ったままピクリともしない。

《はあ。レイ、名前が泣きます。それでも、あの日本の英雄伝の主人公と同じ名前の持ち主ですか》

よけいなお世話だ。「僕だって好きでこんな名前にいるわけじゃありませんよ」と、僕は憤慨しながらマウントポジションをひっくり返すべく機体を繰る。

《いいえ。与えられた名前には意味があります。バイロン星では、その時々に応じて立場にふさわしい名前が与えられます。名前に含まれる意味と音は、その人の思考と意識を形作りますから》

だとしても『アムロ・レイ』は違うだろ。あれは英雄伝ではあるかもしれないが、ただの創作物だ。

《そう、あれは数年前。わたくしがエグザマクスの設計に着手しはじめたときのことでした。養父が参考にしなさいと、日本の伝説的な物語のアニメーションAni-mationというものを見せてくれたのです。それこそが

機動戦士ガンガルでした。いえ、ガンザムでした？ あら、バンザムだったかしら??

とにかく、それを初めて観たとき、わたくしはいたく感動いたしました。あれこそが日本人の魂であると確信したのです。だからエグ

ザマクスのデザインも、あれをモチーフにしました。そして、あの主人公とあなたの名前は同じ。故にあなたは英雄と呼ばれてしかるべき存在です》

ああ、なんというオチだろう。井上社長は日本の有名な作品という意味を込めて『伝説』という言葉を使って娘に視聴を勧めたのだろう。方や、一切の予備知識をもたない宇宙人の専務は、本当に日本の英雄伝だと勘違いしているようだ。

つまり専務の頭のなかでは、日本の有名なアニメーション^{Animation}の魂^{Animasoul} 〓その象徴となる主人公アムロ・レイ^{Amuro Ray} 〓僕。という図式ができあがってしまっているらしい。

惑星規模もの異文化における認識の壁は、想像以上に高く厚いようだ。挙げ句の果てに、僕はただの勘違いで目を付けられ、戦争の英雄に奉り上げられようとされている。僕はあきれ果てて、説得する気力も失せるほど脱力する。

《それに、あれに登場する『ニュータイプ』という概念は的を射ています。人型生命体の進化と革新に近い概念はバイロンにも存在しますのよ。

高い空間認識能力と、個人間での高い相互理解力。意識の疎通。テレパシーとでも言いますか。とは言っても言語を介するわけではないので、イメージ共有というのがもつとも近い表現です。

ただし、あれは少しだけ間違っていますね。テレパシーのような特殊な能力は意識ある生物なら誰しもが持つもので、日常的に行っているものです。『ニュータイプ』とは言うものの、実のところあれは進化ではなく、先祖返りというのが正確なところですよ。あなたにもできませんよ。というか常に実行しています。ただ認知と制御ができないだけですよ》

(でもあれは架空の物語なんですよ！)と僕は心のなかで専務につっこむ。

《せっかくだから、いいことを教えて差し上げます。ぶっちゃけて申し上げますと、そのテレパス能力によって、わたくしにはあなたの考えていることがわかるのですよ。内面の感情や、どのような攻撃を

仕掛けてくるかなど。正確にわかる訳ではありませんが。あなたの考えていることが、すごく、なんとなく、わかるのです。

もつとも、大半は単なる洞察です。洞察による仮説をテレパスによって確信できるのか、あるいは洞察自体がテレパスによってもたらされた結果の思考なのか。どちらのプロセスで行われているかは定かではありませんが、どちらであつても結果は同じです。

このテレパスのメカニズムを地球の科学レベルで説明すれば、いわば生体的な相互量子情報通信といえるでしょう。片方のスピン状態が確定すれば、もう片方のスピン状態もおのずと決まる量子もつれ関係のあれですね。一部の特殊な脳細胞を構成する原子素粒子の量子情報を書き換えれば、リンク先の量子情報が確定することで情報が交換されます。

この宇宙の、意識がある動植物はすべてテレパスによるイメージ共有能力を有しており、常に無意識下で量子情報の相互通信を行っています。つまり一個人の意識とは、内部発生するものと、外部からの干渉の両方によつて成り立っているのです。ただし、相互の通信は不規則かつ乱雑であるため、実のところ生物の深層意識の構造はバイロン科学でもいまだ解析不可能なほどのカオス状態です。

そのなかから特定の情報だけを取捨選択するには少々コツが必要です。その手法ばかりは、さすがのわたくしであつても地球の言語ではうまく説明することができません。

実際、科学では説明できない不思議なことがあるでしょう。動物が驚異的なまでの危機察知能力を発揮したり、離れた場所の知的レベルや文化が奇妙にリンクしたり、人の心が読める人がいたり、未来予知できる人がいたり。

いわゆる勘と呼ばれるものやセレンディピティとよばれる偶然の一致。はたまた、コーリングだとか引き寄せの法則だとかと呼ばれるものや、寝ている時に見る夢、ひらめきという現象も同様です。

集合的無意識あるいはアカシックレコードとも呼ぶ方もいらつしやるようですが、これらはすべて量子ミクロ的な通信で意識の疎通を図っている生物特有の統合意識から成る事象であり、無差別に情報

を得た結果起こった現象を、偶発的に認知しただけにすぎません。

10年前のスカイフォールで最初にあなたに出会ったとき、わたしはあなたの、あなたは不確定ながらわたくしの存在を認めました。そのとき量子的なリンクが確立し、いわば暗号キーを交わしたことで、わたくしはあなたの存在と意識を宇宙のどこにいても感じ取ることができるようになったのです。

つまり、わたくしとあなたが再会できたのも、こうして一緒にいるのも、わたしくしがあなたの思考が読めるのも、量子リンクの結果もたらされた必然的な偶然なのですよ。

ああ、ちなみにバイロンでは量子という概念はありません。バイロン科学で地球の量子物理学を説明すると――あ、これはやめましょう。時間がいくらあっても足りませんわ。さて、ずいぶんと余計なところまで話し込んでしまいましたね。退屈でしたので。ところで、まだ動けませんか。レイ?》

そのニュータイプ論の真偽はともかく、僕は思わず納得してしまふ。専務のよく当たる読心術を実際に何度も間近で見ているからだ。

うん? でもちよつと待て。専務がそのニュータイプ能力で僕の攻撃が読めるのなら、僕は絶対に勝てないということじゃないか。そんなの詐欺だ。出来レースだ。チートだ。一撃当てれば退職を認めるなんて言っておいて、最初から認めるつもりなんかないんだ。

すっかり忘れていた。この専務は『断念』という言葉はおろか、『讓歩』などという言葉すら持ち合わせていないことに。だまされた。この鬼畜人外のような専務にわずかでも慈悲を期待した僕が馬鹿だった。

それに、宇宙のどこにいてもわかるだつて? それでは、僕は超がつくほどサディステイクで、超がつくほど知能犯のイカれたストーリーカー女に、宇宙の果てまでつきまとわれてるのと同じことではないか。これほどタチが悪いことなんてない。

《誰がストーリーカー女ですか。上司に向かってイカれるとはなんという。ただしサディスト気味であることは百歩譲って認めましょう》

僕は驚く。再び思考が読まれたことに。そして、専務が自分の性格を自覚していることに。

《地球人類には物理的にも精神的にも強固なリミッターが設けられているようでしたので、もしかしたら死ぬような目にあえば、あなたも覚醒を果たすかと期待したのですが。なにせあなたは、あのアムロ・レイなのですから。

とはいえ、さすがに無理があつたようですね。それに関しては少々反省していますわ。ああ、アムロ・レイなのに》

僕は専務の言葉の端々に悪意を感じ取りながら、再びあきれ返る。そんな理由で僕はサイラス私設傭兵部隊の一員として中東に飛ばされたのか。

《はあ。アムロ・レイ、アムロ・レイ、アムロ・レイ。どうしてあなたはアムロ・レイなの?》

そんなのは僕が知りたい。

《辛くありませんか。アムロ・レイ》

「辛いですよ。この名前のおかげで、僕がこれまでどれだけ苦労してきたことか」

《いいえ、これからのことです。これからもっと辛くなりますよ。これから戦争になれば『英雄ではないあなた』を人々はどう見るでしょうか。

『戦争をしているっていうのに、なんでこんなところにいるのかしら。アムロ・レイなのに』とか、『バイロン軍を倒してくれるよね? アムロ・レイなのだから』などと陰で言われるかもしれませぬ》

まさか。そんな理不尽などあつてたまるか。

《少々極端ではありますが、あなたが冗談ではありませんよ。私の知見では、地球人とは他人に対して、勝手に期待しておきながら、勝手に裏切られたと認識する生物です。とくに日本人はそれが顕著です。だから、当人らにとっては事実関係や理由などはどうでもよいのです。

情勢が悪くなればなるほど、行き場のない不安感から理性的ではないられないものですから。明らかにおかしい理論でも、まかり通せてし

まうのが、わたくしが知っている地球人の業というものです。

宿命とも言えますね。自分の名前が嫌いとおっしゃいますけれど、どんな気分ですか？ テレパスをもつてしても、わたくしにはあなたの名前にコンプレックスを抱く気持ちが理解しかねます。

とはいえ、まあ名前は所詮、名前です。物体を指す記号にすぎませんよ。そんなに怒らなくてもよいではありませんか。——— そうだとしても、やはり名前負けするのはいかなるものでしょう。ア・ム・ロ・レ・イ？ うふ》

——— 名前でからかわれたことは、これまでだつて一度や二度ではない。けれども、これほど無遠慮に心の傷を抉ってきたのは、思い出せる限りでは、専務この女が初めてだ。

たしかに名前は意識する。名前負けしないように、それにふさわしい人間になろうと努力もしたさ。けれども埋めがたい現実つてもものがある。

芸能人と同姓同名くらいなら笑い話のネタになる。けれども、同じくロボットのパイロットだなんて、出来過ぎでもはや笑えない。片やなんでもありのアニメで、こっちは現実なんだ。そもそもギャップなんて埋めようがない。

誰かに名前を伝える度に見せられる、あの乾いた笑い、失笑、苦笑。おもしろいものを見つけたときのような嬉々とした笑い。哀れみが含まれたあの表情。

『アムロ・レイ』というキャラクターを知っている人間であれば、向こう側としても意識せざるを得ない気持ちは僕にもわかる。

けれども、僕は名乗る度に憂鬱な気分になる。もちろん、僕に名前をつけた父と母はあのロボットアニメのことなど一切知らない。僕はこれまで、できる限りフルネームで名乗るのを避けて生きてきた。そして、僕はあの作品が大嫌いだった。

怒りが沸々とわきあがる。これまでからかわれた記憶が、そのときの感情がよみがえる。なんとしてでも専務の機体に一撃入れて見返してやる！ 僕は鼻息を荒くして、怒りに任せてもがく。

なんだよ宇宙人って！ なんだよ侵略って！ バイロン軍？

知ったことか。アムロ・レイという名前であっても、僕は普通の人間なんだ！ 僕の平和な日常を返してくれ!!

頭のなかで何かが弾けたように、カチンともブチンともいえない音が鳴った。本当に。



《急激な血圧上昇および脳前頭前野部の血流低下を検知。マスターがブチギレましたあああああ（（（； 口。）））》

と、シズクが言ったところまでは覚えている。それ以降は記憶が飛んでいた。どうやって専務のマウントポジションをひっくり返したのかすら覚えていない。

専務の機体に対してエグザマクスの拳を叩き込む直前、不意に専務の機体から赤い光が弾けた。それが数度にわたって瞬いたと思ったら激しい衝撃に機体が揺すられ、次に目を開いたときには、僕は再び専務の機体を見上げていた。

これほどまでに怒り狂ったのは、小学生のときに名前でからかわれて以来だった。平静を取り戻すとコックピットにはやかましいほどに機体異常を示すアラートが鳴り響いていた。

眼前に立つ専務の機体腕部が握る円筒からは眩いばかりに輝く赤い可視光が延びている。それは剣の形を形成し、粒子ビームの刃と思われるそれが眼前に突きつけられた。僕は恐怖を覚えて「ヒッ」という短い悲鳴が喉から漏れる。同時に背筋に冷たいものが走る。

目の動きだけで眼前のHUDから機体の状態を読みとると、僕の機体は両腕・両足を失っていた。専務が振るった超高温の粒子ビーム刃によって、僕の機体の四肢はバターのように溶断され、コックピットがある胴部だけが地面に転がっている状態だった。

《まさか、怒りでテレパスを阻害するとは。さすがわたくしが見込んでいただけのことはあります。この奥の^{ビームサーベル}手を出さなければ、一撃入れられるところでした。成長しましたね。レイ。これなら、中東に送った甲斐があったというものです。

ともあれ、負けは負けです。戦闘能力の観点では不合格ですが、特別サービスで合格にして差し上げます。あ、退職を認めるという意味ではありませんよ。下僕決定の合格通知です。うふふ。接吻の契約どおり、わたくしと共に英雄として戦っていただけますね。アムロ・レイ?》

専務とのキスを思い出して身体が火照る。いや違う、あの粒子ビームの膨大な熱量でコックピット内の温度が上昇しているのだ。僕は、大きく息を吐き出しながら、感情のこもっていない声で「はい」と専務に伝えるしかなかった。

《ああ、そうです。これも伝えておきましょう。先ほどの話の続きです。この宇宙は粒でも、波でも記述できますが、それはいずれも真理ではなく、物理学や科学とは、あくまで現象を普遍的事実をもって数字で代替記述したものです。

いわば客体を加味して主体的な意味付けをしたものであり、どれほど科学が発展しようと、どれだけ理論が進歩しようとも、文明や生命は宇宙の真理にたどりつくことはできません。結局のところ、この世界のあらゆる『それ』は『それ』でしかないのです》

それが??? 急に難解な話が始まり、僕の頭にはたくさん疑問符が浮かぶ。

《つまり科学とはあらゆるものを計算できるように数値化・記号化する作業。それはあらゆるものに名前をつける作業と言い換えることもできます。

ですから名前は重要です。名前をつける行為は、存在を支配および理解するためのもつとも簡単に確実な方法とも言えるでしょう。しかし、名づけるという行為は、型に当てはめ、理解したと思ひ込み、さらなる可能性を制限してしまうことに問題があります。

あくまで『それ』の本質は『それ』であり、『あなた』は『あなた』でしかないのです。だから、あなたがアムロ・レイという名前だからといって、アムロ・レイという型に収まる必要はないのですよ。

確かにアムロ・レイという名前に一定の知名度が認められ、パイロン軍と戦うロボットを駆る英雄の名前として都合がいいのは事実で

す。そして、現にわたくしはそれを利用してしようとしています」

専務は、そこで一度言葉を区切る。

「けれど、これだけは知っておいてください。わたくしは、あなたがアムロ・レイという名前だから選んだわけではありません。ましてや容姿や能力を買ったわけでもありません。強いて挙げるなら『あなた』だからですよ。わたくしがあなたを選んだ理由は、あなたが、とても、なんとなく、好きだからなのですよ。」

さらに付け加えるなら、たった一人で見知らぬ惑星に送られて、実はこれでも、わたくしは寂しいのです。初めて見た同年代の異星の異性に親近感を抱くのは当然ではないでしょうか」

軽く握った手で口元を押さえながら、専務はやや小声で言葉にする。赤面しているかどうかは黒い肌でよくわからないが、同時に目を伏せがちに視線を脇へ逸らす。HUD上の端には、典型的な照れを表すポーズの専務の画像が浮かんでいた。

言い方はともかくとして、実のところ専務は僕の名前など気にもとめていない。忖度があれば、これほどまでに無遠慮に残酷な言葉を放つことはしないだろう。専務は僕を僕として認めてくれている。これは恋人や家族のような情愛に近いものと捉えてもよいのだろうか。信頼している、と。

自信に満ちあふれた態度の陰に隠れがちだが、専務が苦労人でないはずがない。戦争孤児というのも嘘ではなかった。いち惑星の大きな国家の要人であり、民に裏切られ、肉親を失い、重荷を背負わされ、故郷の星を追われた専務。

地球に来てからだって、苦難の連続だっただろう。一切の言葉は通じず、常識の相違から意志疎通すら図れない環境に、少女がたった一人で放り出されたのだ。

さらに、見知らぬ惑星で、使命のために謀略渦巻くドス黒い地球政治にも足を踏み入れ、真実を隠したまま慎重に交渉を進めなくてはならないのだ。さぞもどかしかっただろうことは想像に難くない。おまけに、わずかでも事の運びを誤れば、バイロン軍との戦争以前に、人間同士の第三次世界大戦が始まりかねなかった。

そのストレスたるや、僕には想像できない。性格破綻するのも仕方がないよな。

《ですから、わたくしはあなたを信じます》と、次に専務は正面に向き直って言葉を続ける。

《確かに英雄という役回りは辛いかもしれませんが。それは希望の星であると同時に、兵を死地に誘う先導者なのですから。もつとも残酷な言葉を使えばそれは洗脳です。けれど英雄とは、戦士達の志気を高めるための意識のハブとなる存在であり、戦争で勝つためにはどうしても欠かせない重要なピースです。ですが、あなたなら必ず必ず成し遂げられると、わたくしの直感が言っています。

わたくしはあなたを信じています。ですから、あなたもわたくしを信じなさい。もちろん、みすみす殺させるような真似はさせません。絶対に。

帰国表彰式の際にも言ったでしょう。すべてわたくしが企てたことです。何かあったら、すべてわたくしのせいになさい。恨んでもかまいません。すべての責任はわたくしにあります。もし、あなたを立派な英雄にできなければ、接吻の約束どおり、わたくしは死を以て償いましょう》

専務の強引でありながら真つ直ぐで真摯すぎる態度と言葉に、なんとも返答に困る。専務に死んでもらってもうれしくない。むしろ、嫌だ。

僕が無言でいると、シズクが話しかけてくる。

《ところでマスター。これで24回と1/3回です》

「何が」

《恐怖のあまり、コックピット内で排泄物を漏洩させた回数です》

なんだよ、1/3回って。

シズクは状況と神経。パルスと体温変化で、僕が漏らしたことが正確にわかるらしい。

そして、これはイレギュラーな模擬戦。当然、今日の僕はパイロット用のオムツなど装着していない。この後この緊急事態の状況説明を専務に求められるだろう。上手く誤魔化しきれぬだろうか。

僕はコックピットのなかでひとり赤面し。同時に憂鬱になる。いや、この感情も、この事態もすでに専務には筒抜けかもしれない。僕は沸き上がる様々な感情を、溜息とともに吐き出した。

どうせ、僕が取れる選択肢などないのだ。もう、どうとでもなれと覚悟を決めて。

僕の名前は安室 玲。24歳。サイラス私設傭兵部隊の一員で人型巨大兵器エグザマックスのパイロットだ。僕はエースパイロットではないけれど、不本意ながら英雄としてバイロン軍と戦う事になった。本当に不本意ながら。

第21話 Intertlude (閑話)

専務との模擬戦の翌日から、世界情勢は劇的に動いた。

契機となったのは、アメリカ軍によるバイロン強襲要塞への総攻撃だった。アメリカ軍は、中東に降り立ったバイロン軍の強襲要塞に向けて合計12発もの核弾頭を搭載した大陸間弾道ミサイル^{B_M}を撃ち込んだ。その模様はメディアにリークされ、動画共有サイトで垂れ流された。

しかし、ライブ動画を一瞥したイノウエ専務は、アメリカによる独断での軍事行動を鼻で笑う。不思議なことに核弾頭はそのどれもが不発だった。専務によると、バイロンの強襲要塞の周囲には核分裂反応を抑制するシールドのようなものが展開されているとのことだった。

その攻撃の直後、ホワイトハウスから専務宛に国際電話が入る。専務はいつもと同じように、新しい悪戯を思いついた子供のようによく笑って立ち上がると、それからしばらく社に戻らなかった。

アメリカ軍の核攻撃と同時に、とうとうバイロン軍の存在が世界に露見した。襲来から一週間を経て、ついに異星人の地球侵略の内容が全世界へ向けて報道される。TVや新聞の見出しは一面、『異星人襲来』という安っぽい見出しで埋め尽くされていた。

人々の反応はさまざまだ。驚く人。泣きわめく人。信じない人。怒りを露わにする人。強襲要塞が落着した中東の都市や街では、パニックに陥る人々が港や空港に押し掛け、逃げる人でごった返している。悲惨な有様らしい。

同時に世界の株価は大暴落した。貿易にも影響が出た。中東からの原油輸出の滞りは、遠く離れた日本経済にもダメージを与える。TVでは連日、内閣総理大臣と官房長官、防衛大臣が、とつかえひつかえ演説し、宇宙人の襲来が事実であることと、落ち着くようにと国民に言い聞かせた。

安室家では、父は慌てふためき、母はこれからどうなるのかしらと不安の声を漏らした。妹の穂香は興味津々。雫のほうは、とくに關心

がない素振りだ。

実際にバイロン軍をこの目で見た僕ですら、宇宙人による侵略なんて半信半疑だったのだから、その他の大勢の日本人にとっては、まさに対岸の火事だ。それどころか海の向こうの、そのまた向こうの話。事の重大さは誰もが理解していても、どこか他人事のように思っている風潮が感じられる。

もつとも一般人はどうにもできないのだから、政府に対応を任せるか、あるいは成り行きを天に任せるかしかできないのも事実だ。それでも噂が噂を呼び、物資の買い溜めに走る人も少なからずいた。

次に専務を見たのはTVの中だった。黒髪のカツラと、黒縁眼鏡で変装してはいたものの、議長として地球連合軍樹立を高らかに宣言したのは見間違うことなく専務だった。

そして、事前に申し合わせていたかのように地球連合軍が組織される。それはアメリカ軍の核攻撃失敗から、たった三日後の出来事だった。おそらく専務が秘密裏に準備を進めていたのだろう。

主要加盟国は、カナダ・フランス・ドイツ・イタリア・日本・イギリス・オーストラリア・イスラエル・トルコ・インド・中国・ロシアの12カ国。それに、最後まで連合への加盟を拒否していたアメリカが加入した全13カ国は、エグザマクスを専属運用する軍隊を組織し、バイロン軍の迎撃・殲滅に当たる。

地球連合軍の樹立宣言によって、人々は幾分落ち着きを取り戻す。暴落した株価もわずかに持ち直した。しかし資本が集まる先は主に軍需産業だ。このタイミングでサイラスは過去最高株価を記録した。

それと同時に、準備が進められていたサイラス欧州法人・中国法人・北米法人が本格稼働を開始。同時に第4世代機となる新型ラオビットを正式にロールアウト。アルト・ラオビットの両機が各連合加盟各国に提供され、さらなる軍備強化が図られる。

さらに、エグザマクスの運用における戦術・戦略術をまとめたサイラスの社外秘資料が一般公開された。この資料は僕らサイラス私設傭兵部隊が収集したデータが元になっていた。

今だからわかる。僕らが中東で行っていた軍事行動は、すべて専務

が画策した、バイロン軍の侵略に対抗するための布石だった。

機体や装備品の実戦テストにはじまり、戦地でのエグザマックスのメンテナンスおよび運用メソッドと戦術・戦略メソッドの確立。それらを実行しながら、販売促進活動セールス・プロモーションによって対バイロン軍の要としてエグザマックスの世界的な普及を促す。同時に、サイラスの利益は拡大。そして、僕らが戦いぶりを見せつけることで、エグザマックスでの戦い方の模範を提示した。

まったく、専務には頭が下がる。おかげで、バイロン軍の奇襲作戦を潰すことができたのは事実だった。専務がいなかったら、初手からなし崩しに攻め立てられ、今頃地球はすでにバイロン軍の支配下に収まっていたかもしれないのだ。

連合軍の発足とほぼ時を同じくして、静観を続けていたバイロン軍はどうとう本格的な進軍を開始した。強襲要塞がある拠点の中東から徐々に勢力を広げていく。幸いだったのは、バイロン軍に長距離移動手段がなかった点だ。だから戦地となったのは、中東をはじめ、東ヨーロッパ、エジプト、アラビア海を渡ったインドが中心だ。

これを各国連合加盟国の派遣部隊と周辺各国のエグザマックス部隊が共同で迎撃し戦火を交える。各地で散発的な戦闘が始まった。

しかし開戦当初は連合側の敗戦続きだった。最新鋭機と優れた戦術マニュアルがあつたとしても、エグザマックスの熟練度の低さは、そうそう埋めきれるものではない。それに、所詮は寄せ集めの部隊だ。連携など上手く行えるはずもなく、戦線はどんどん後退させられる。世界には不穏な空気が漂い出す。

しかし、とある1機のエグザマックスの活躍により、戦況は持ち返えされた。そのエグザマックスは、アルトをベースとしたサイラスのワンオフ機アナザーエグザマックスプラン eEXM-17A アルト(X777部隊所属機)のトリコロールカラーを想定。白のベースカラーに、これみよがしな赤と青のカラーリングが施されたその機体は、時に遠距離狙撃、時に最前列で格闘戦を演じ、戦線を立て直す。そしてポルタノヴァを次々と屠っていく。

搭乗するのはサイラス直属のパイロットであるアムロ・レイ。その

機体は卓越した操縦技術で戦場を光のごとく駆け抜け、時空間を超越したかのように戦場から戦場を渡り歩き、多くの味方の窮地を救った。

ただし、パイロット素顔や正体は誰も知らない。補給はサイラスの社員で編成されたチームが専任し、待機時であつても社外秘として外部からの視線が遮られ、徹底して秘匿とされたからだ。その秘匿性が、いつの間にか神秘性を帯び、アムロ・レイという存在をさらに神格化させる。

アムロ・レイは世界各地で「サイラスの白い閃光」だとか「ジャパニーズ・ガンダム」などと異名で呼ばれ、英雄として崇め奉られるようになるまで、それほど時間はかからなかった。

アムロ・レイの活躍によつてバイロン軍の侵攻速度が抑えられたその間に、各地に派遣された連合軍は組織としてのまとまりが出来上がり、技術の習熟も相まって部隊戦力が大きく底上げされた。

専務が言っていたように、先が見えない戦いのなかで象徴となる英雄の存在は大きいらしい。その存在が兵士一人ひとりの志気をかき立て、その行動が戦意を鼓舞し、その名前が希望となる。それは波のように伝播し、拡散され、さらに増幅された。

とある共通認識があることで、烏合の衆だった兵士たちの間に協調関係が生まれる。あるいは素性も知らない英雄への反感や対抗意識が協調を強めさせたのかもしれない。いずれにせよアムロ・レイの存在が劣勢ムードだった流れを大きく変えたのだ。

勝負ごと^{ゲーム}だったなら、勝率50%がもつともプレイヤーのモチベーションが高まるそう。けれど背水の陣で挑む戦争はそうじゃない。勝てる見込みが49%では命を賭しては戦えない。けれど51%なら戦える。

たった一人の英雄の存在は、戦力としてはけつして大きなものではないけれど、その影響は人々に勝利のイメージを抱かせる。まさに希望の象徴だ。

小競り合いは各地で頻繁に起きている。大部隊を投入するほどの大きな衝突がそれから3回ほど起きたものの、被支配地域は開戦当初

からそれほど広がっていない。互いの戦力差は開戦後3カ月ほどでおおよそ互角にまで強化され、戦況は膠着状態を維持していた。

日本でも徴兵が始まった。選抜と訓練が行われ、適正によつてはエグザマックスのパイロットにもなれるそうだ。優秀な人材は連合軍直下のパイロットとして海外に派遣されるらしい。と母からのメールで知った。

各国の軍産企業はエグザマックス用の火器開発と生産を急ピッチで進める。サイラスの工場もフル稼働だ。戦局が有利になるように、さまざまなパーツが開発された。なかには目的が知れないようなパーツも多数あった。

前線では、部隊の戦力強化と兵士のモチベーション維持のために、エグザマックスの自由なカスタムが流行っている。それに対抗するかのように、バイロン軍側でも新兵器を続々と投入してきた。

専務の話によればバイロンの巨大な強襲要塞には兵器や物資の生産設備も備えているらしく、兵糧攻めは望み薄だという。バイロン軍の襲来から半年が経過した時点でも、地球連合軍とバイロン軍の戦いは一進一退の攻防が続いている。

そして開戦から半年後、僕は宇宙にいた。

宇宙での覚醒編

第22話 宇宙（そら）へ（宇宙空間での迎撃戦闘）

漆黒の闇に高密度で点在する大小無数の星々の光は、砂漠の星空よりも鋭く網膜を刺す。宇宙は荒涼としていながらも、どこか整然としていて、なんとなく中東の砂漠を思い出した。けれども、感じ取れる空間的な広がりには砂漠にひとりではぽつんと立ったときの比ではない。

宇宙空間では、大気がないせいで奥行きは感じられない。けれども広い。分かり切っている事だけれど、果てしなく広い。僕が一生をかけて追いかけても、あの闇の端っこはおろか、あの瞬く星のひとつにさえたどり着くことができないほど宇宙は広いのだ。

そう思うと、置かれた立場や、名前に悩んでいた自分という存在がひどくちっぽけに思えた。戦争なんてもものさえもくだらなく思えてくる。それなのに、今もまだエグザマクスに乗っている。僕は、どうしてこんなところまで来てしまったのだろう。

外界を映し出すAR・HUDで見渡す宇宙はコンピュータが再描写したCGではあるけれど、まるで高精細なプラネタリウム見ているようだった。時々遠方で光の筋が走るのは、おそらく彗星だろう。それは遙か遙か遠くの宇宙を何百年か、何千年か、何万年か前に通過した残光だ。

時々、動体反応を捉えたマーカーが視界を流れてすぐに消える。近距離を飛ぶ大きめの隕石やデブリなんかは、エグザマクスの周辺警戒システムが自動的に軌道計算をして、危険なコースにいれば回避を促してくれる。ぶつかっても機体に異常がでないほど小さな岩やら石のつぶてやらは無視された。

それ以外に動くものの気配はない。静穏そのものだ。宇宙はしんと静まりかえっていて、今僕の耳に届くのはコックピットの電子機器が放つわずかな発振音と、生命維持装置の空調音と、静かな自分の呼吸音だけだ。ハーネスによってわずかに身体が締め付けられるだけで、ほかは何も感じない。肩こりも腰痛もない。重力がない宇宙は、

宇宙服の煩わしさを除けば地球より快適だった。

けれども、宇宙空間はコックピットから一步外に出れば、一瞬にして生命が失われてしまう救いようがないほどに残酷な世界でもある。どうしても不安感にあおられるけれど、同時に不思議と気分が落ち着く。宇宙空間に漂っていると、思考までもが重力から解き放たれて拡張されるような、そんな気分になるんだ。

HUD上に通信を知らせるマーカーの光点が灯り、一瞬遅れてヘルメット内に響いた女性の合成音声で静寂を壊した。

《マスター。集中力が低下しています。周辺警戒監視を怠らないでください》

僕の機体に付随する自立型支援機のシズクが、AI特有の抑揚に乏しい物言い注意を促す。

「Ya」と短く答えて、僕は周辺を目視確認するために機体を巡らす。エグザマクスに左腕を外側斜め上方向に振り上げさせると、機体は反作用を受けて腕に生じたベクトルとは反対方に回転しはじめた。周辺の星々もそれに従って視界を流れていく。

宇宙では推進剤がなければ等速直線運動をするしかない。けれど、ゆっくりとした姿勢制御だけなら四肢の動作である程度のコントロールができる。宇宙での特殊な機動感覚に慣れるまでには時間がかかったけれども、比較的すんなり馴染んだ気がする。それよりもなによりも、宇宙ではすっ転ばないのが最高だ。

先ほどの姿勢から上下逆さまになって180°を振り帰ると、強い光を検知して自動遮光制御が入り、真っ白に描写された太陽が視界に入る。それから太陽に照らされて青く輝く地球が映り、次に巨大な構造物が視界の半分を埋め尽くした。

この巨大構造物は、ロシアと共同開発されたサイラス所有の宇宙船。バイロン軍との戦争を終わらせる要となる大切な船だ。地球を挟んで月とは反対軌道のここラグラランジュ・ポイント2で数年前から組立作業を行っていたらしい。僕には一切知らされていなかったけれど。

船体全長は150m弱。外装はほぼ完成している。残すは内部の

一部改装と最終便の物資と人員の到着を待つばかりだ。船体の周辺にはエグザマクスよりふた周りほど小さい作業用のエグザビートルが取りついて外装の最終チェックを行っているところだった。

宇宙に来て、すでに3カ月以上が経過していた。ここでの僕の仕事は、エスポジットと名付けられた新型エグザマクスの動作と宇宙用装備の運用テストと報告。それと一応、この宇宙船の護衛役でもある。やっていることは中東にいたときと何も変わらない。宇宙に来て一週間ほどは、宇宙酔いで死にそうにはなっただけだ。

人型から高速飛行形態に可変可能な、このエスポジットという新型機は、移動や戦闘時には飛行機のように変形して推力軸を一方向に集中させられるため、宇宙でより高い移動性能が得られる特徴を持つ。

α と β という基本構想を同じくする2バージョンが存在し、 α の方は、翼を追加すれば大気圏内の飛行も可能だ。僕が今搭乗している β の方は宇宙での運用に重きを置いた機体だった。

宇宙において、人型ロボットは四肢の反動で機動が可能だけれども、必然的に関節数が多くなってしまう人型ロボットは宇宙戦闘では有用とはいえない。

真空中ではグリスが蒸発してしまうから、稼働部のベアリングは地上と同じものは使えないし、下手をすれば動作中に関節機構が焼き付いて急にロックするなんてことも起こりかねないため、宇宙ではなるべく可動部は少ない方がいい。

飛行形態に可変できれば、宇宙でのベアリング問題はある程度解消できる。必要なときには一応手足が使えるけれども、装甲の薄さもあって、この機体は元々格闘戦には向かない。エスポジット α も β も、接敵率の低い宇宙での運用を想定して開発された機体だった。

そもそも、この開けた宇宙空間で格闘戦を仕掛けるなんて行為は馬鹿げている。常に方向を気にしていないと右も左も、上も下もわからなくなるし、移動量を把握しておかないと、自分がどこにいるのかさえかわらなくなる。

仮に目印を見失い、位置座標を示す航行機器がわずかでも狂えば、母船に帰還できずに宇宙を漂流する羽目になる。非常用救難ビーコ

ンのテストは済んでいたけれど、できる限りこれのお世話にはなりたくない。

宇宙活動でもっとも重要な生命維持装置は問題なく機能している。電子部品や制御にも放射線によるエラーは出ていない。もちろんコックピット内の宇宙線被爆量も安全基準をクリアしている。機体に備わったレーダーに感はなし。周辺目視確認もOK、と。

「こちらβ。周辺にまだ異常なし」僕は宇宙船の艦橋に向けて報告をする。

《了解。まもなく地球からの輸送機の接近予定時刻。有視界距離に入ります》

船のオペレーター担当の返答に、輸送機の航路へ機体を向き直らせると、星とは異なり鈍く光る点が現れ、除々に大きくなってくる。それが突如ふたつに分離すると、一方は大きく弧を描いて反転して遠ざかっていく。もう一方はこちらに向かってくる。

ここラランジュ2と地球とを往復する輸送船は、効率よく往来するため本体と物資コンテナを分離させる形態をとる。操縦席と機関部だけで構成された細長い本体は、高い速度を保ったまま地球への帰還軌道に乗り、分離した輸送コンテナは、こちらと相対距離を合わせるために減速噴射を開始する。数万kmも離れた距離からゆっくりとだ。

そして、敵が攻撃を仕掛けるなら、輸送機と宇宙船が無防備になるこの瞬間がベストタイミングだ。

《αおよびβに通達。敵影接近。敵機、ポルタノヴァ3。α機は前面に出て敵機の迎撃および輸送機の護衛に。β機はその場で本艦を護衛しつつα機を後方から援護》

オペレーターから護衛役へ告げられる指示に、僕と、もう一人の護衛役である元アメリカ第9海外派遣部隊のダブルロック・エイミーは「了解」と答える。

ちょうど宇宙船を挟んで反対側にいたエイミーが搭乗するエスポジットαが、移動のために機体を飛行形態に変形させる様子が見えた。

胸部から下半身が後方に折れ曲がると同時に、脛部が反り返って折り畳まれる。左腕に携えていた三角形に近い盾が機首に装着されると、ものの数秒で人型から翼のない航空機のようなフォームに変わった。機体後方からプラズマ推進の奔流を吐き出すと、鋭く加速がはじまり、流星のように光の尾を引いて視界から遠のいていく。

かつては敵だったナインズの面々は、いまでは同じ連合軍の共同部隊だ。彼女は正規の米国軍人で、アメリカ軍のエグザマクステスト部隊ナインズのなかでも3番目に優れた操縦技術の持ち主だった。

『ダブルロック・エイミー』の名前はあだ名で、エイミーとは狙撃を意味するエイムと本名とを引っかけているそうだ。ダブルロックと要するに狙いを外さないということらしい。その名前が示すとおり、彼女は優れた狙撃能力を有していた。

年齢は僕の妹たちと同じ弱冠21歳。ストレートヘアのブロンドで、ハリウッドモデルのような美しい外見ではあるけれど、いわゆるエリート軍人ゆえのプライドのせい、性格が悪い。内面が悪いというべきか、外面が良いというべきか。僕らは同時に宇宙に上がり、すでに3カ月間を一緒に過ごしているけれども、どうにも彼女とは気が合いそうにない。

迎撃に向かったエイミー機から、いつもの不機嫌な声で通信が入る。

《なんで、いつもいつもいつも私ばかりが前面に出されるの！ 私は

元々狙撃手なのだけれどッ！》

「えーと、適材適所ってやつかな」

《は？ あなたの方が、私より狙撃能力に優れるとでも!?!》

「いや、そうじゃなくて——」僕より君の方が、あらゆる面で優れている、という意味で言ったのだけれど彼女は聞く耳をもたない。逆に感情を逆撫でしてしまったらしい。

《そんな機械に頼った射撃なんて卑怯以外の何でもないわ、レイ・アムロ。シスターズに頼らなければなんにもできないくせにッ。英雄が聞いて呆れるわね。名ばかりの英雄さんッ》

そう怒鳴り散らしてプツリと通信が切られる。

ふん。何とでも言えよ。実際の僕は英雄でもなんでもないんだ。というかフルネームで呼ぶなと口酸っぱく言っておいたはずなのに。『英雄になれ』といわれて英雄らしく振る舞えるものではない。僕は、なおさら技量がともなわないのだから。バイロン軍との開戦初期に戦局をひっくり返した、あの馬鹿みたいに派手な白・赤・青のトリコロールカラーのエグザマクスに搭乗していたのは、当然ながら僕ではない。

いわゆる中の人は、僕の振りをして戦うジエイクとアーニヤだ。それに、あのトチ狂ったボディカラーリングは絶対専務の仕業だろう。おまけにメディアが煽りに煽ったあげく『サイラスの白い閃光』なんて恥ずかしい二つ名までつけられた。さらに、その記事の内容も笑える。

『アムロ・レイは光の速さで戦場を駆ける？』名前の『玲^{Rev}』と『光^{Ray}』をひっかけてるのかな。

『時空間を超越したかのように戦場から戦場へ？』当たり前だ。場合によってはアーニヤとジエイクが二カ所の戦場を同時に渡り歩いたのだから。そもそも、二人ともやりすぎなんだよ。

おかげで望んでもいないのに、今や僕は超有名人だ。恥ずかしいったらない。仮に戦争が終わったとしても、しばらくは実家はおろか日本にすらに帰れそうにない。このまま『アムロ・レイ』の名前が忘れ去られるまで宇宙で暮らそうか。はあ。思わずため息が出た。

とどのつまり、僕がしているのはただの名義貸し。僕は英雄どころか、着ぐるみを着たマスコットキャラクターと同じ扱いだ。あげく、人目から隠す目的もあって、僕は遙か宇宙に飛ばされて今ここにいる。

なんてことはない。この子供だましみたいなのが、イノウエ専務が僕の戦闘能力を鑑みた結果、呆れた挙げ句にひねり出した『アムロ・レイ英雄化計画』の全貌だった。

そうであっても、英雄アムロ・レイという架空の存在が、少しでも誰かの役に立っているのなら、誇らしくはなくとも喜ばしくはある。何にせよ弱つちい僕にとっては過ぎた役回りだよ。

「だけど、こんな僕にだってできることはある。」

「シズク。ホノカ。敵襲だ。準備はいいか」

《それはこっちのセリフです。マスター》とAI支援機ロイロイのシズクがいつものように答える。

《オツム頭の準備はいいかな？ あつ間違えたつ。オムツの準備はいいかな？ マスター♪》とAI支援機のホノカもいつも通りに答えた。

僕の頼れるパートナーたちは相変わらずだ。シズクの性格は、AIらしさが残るクールな皮肉家。ホノカの性格は、AIらしさのかけらもない快活な毒舌家。いまは4本の脚部とスラスターの微噴射を巧みに使い、2機がクラゲのようにして僕の機体の周囲を漂っている。

ふん、中東での僕と同じだと思うなよ、ホノカ。宇宙服のなかで漏らすと一大事だからオムツはMサイズでバッチリさ。

「少し遠いけれど、ここから撃つよ。目標は友軍輸送機に接近する3機のポルタノヴァ宇宙仕様機。武装だけを破壊して無力化させる。ターゲットは輸送機に近いものから優先で対応。照準制御を、最終安全装置を残して支援AIに譲渡」

《イエス、マスター。IFF敵味方識別データ照合。目標設定完了。照準制御の譲渡を確認》

「敵はいつにも増して高速で動いている。制御は追いつくかい？」

《《愚問No problemです。マスター》》

シズクとホノカは、そう心強い言葉を残すとターゲットを補足すべく、推進剤を噴射させて急加速して散開した。

僕はエグザマックスの肩部にマウントされた小型レールガンを構えさせる。小型とはいっても、その砲身はエグザマックスの全長と同じくらいに長大だ。

レールガンは高威力だけれど、駆動に大電力を消費する。おまけにチャージに時間がかかるため連射できないのが難点だけれど、空気による抵抗がない宇宙で使用なら消費電力および充電時間を大きく抑えられる。おまけに炸薬を用いないため備蓄安全性も高い。レールガンは宇宙で使用するのに都合がいい武器だった。

僕にはジェイクやエイミーのような狙撃は逆立ちしたってできない。けれど引き金を引くことはできる。対して、AIであるシズクとホノカは、相手がバイロン軍であっても人間に直接危害を加えることは、いまだ国際法で認められていない。けれど、照準を合わせることはできる。

AIのシズクとホノカが正確に照準を合わせて、人間である僕が責任を以て引き金を引く。それによって可能になる。AI自動照準による超精密狙撃が僕のできる唯一の攻撃手段だ。

2機による2座標点ステレオカメラの高精度照準に加え、シズクとホノカ2機ぶんの演算処理能力によって弾道計算と敵動作を高精度で予測した偏差射撃で、どれだけ離れていようが、どれだけ速く動こうが、相手が三次元軌道をしている限り狙いを外さない。配置についたシズクから声が届く。

《マスター。一射目は弾道計算のための捨て撃ちです》

「わか^{i k n o w}ってる」

《準備はよろしいですか。Ready——Fire》「Fire」

最大望遠でも、まだ小人のようにしか見えない敵機に向けて、反復しながら言われるがままにトリガーを引く。発射と同時に背面のラスターが噴射されて強烈な発射反動を打ち消した。

電磁力で加速された弾頭はうつつすらと輝くプラズマの尾を引いて一直線にポルタノヴァの部隊中央に向かう。しかし、こちらの初手は、予定どおり敵ポルタノヴァに当たるところかかすりもしない。

白と灰のツートンに配色された敵機には、これまで何度か襲撃を受けているから勝手知ったりだ。

ポルタノヴァ宇宙仕様機は推力方向を自在に可変できる大型バックパックを背負い宇宙での機動力を確保していた。無用の脚部は陸戦用のポルタノヴァよりも細長い簡易的なものに置き換えられ、機体にかかる慣性モーメント制御が容易になるよう改良されている。

上半身のポリウムに対して下半身が華奢で、初めて見たときにはロボットらしからぬそのアンバランス感によって化け物じみた印象を抱かせられた。とはいえ基本性能は陸戦用のポルタノヴァと変わ

らない。ただし、高威力のビームキャノンには要注意だ。一応、左腕の近距離武器にも。

《弾道情報を取得中。惑星引力・空間電磁気力・発射反動・銃器個体差による弾道予測データを最適化。照準補正完了。次弾装填。電力チャージ完了まであと40秒》

レーザーで計測した敵機までの相対距離は、おおよそ15,000 km。輸送機は減速中であるものの、まだ第二宇宙速度を越える速度を保っている。それは時速にしておおよそ4万 km 以上。それに追従する敵機の速度も同様だ。広大な宇宙での戦闘は地球とはまるでスケールが違う。

大気による速度減衰がないうえ、音速の10倍以上で発射されるレーザガンであっても、トリガーが適切なタイミングからミリ秒でもズレれば絶対に当たらない。けれど、シズクとホノカが最初の一発で距離や重力の影響はもちろん、対象が光学的に視認される極小の誤差や通信遅延までを計測したうえ、敵機のベクトルを予測して照準を絞る。

そして、これは機密情報扱いで内緒なのだけれども、宇宙戦闘の超長距離狙撃用に制御系にも改修が加えられている。以前とは異なり、トリガータイミングすらシズクとホノカが制御するようになったため、これはもはやAIの自動狙撃だ。僕がトリガーを引く行為は、ただの発射許可にすぎない。

つまり射撃補正が完了した2射目以降は、シズクとホノカの演算予測内であれば、適当なタイミングでトリガーを引こうと、たとえばターゲットが3万 km 先の彼方から飛来しようと、第二宇宙速度から急減速しようと、勝手に当たるということだ。

《マスター、射撃準備が整いました。Ready——Fire》「Fire」

僕は復唱してトリガーを引く。

二射目は、ポルタノヴァが持つ長大なビームキャノンの砲身を正確に貫き、その内部砲身ため込まれたエネルギーを発散させて光球が瞬く。

《命中》とシズクが狙撃成功を報告する。

専務に命じられていたわけではないけれど、可能な限りコックピットは避けて攻撃する。エイミーはそんな僕にも「甘い」と言っつて嘔みつく。「その甘さが味方を殺すのよ」とも。

それはわかっている。けれど、あの中には専務と同じようなパイロ
ン人が乗っていることを僕は知っている。戦時下であつても、異星人
であつたとしても、人殺しはしたくない。とはいえ、武器を失えば撃
たれるのもまた自明だ。また、航行能力を失つても命に関わる。宇宙
ではわずかな機体のトラブルでも死に直結する。

僕がしているのは優しさでもなんでもない。単なる保身だ。どう
せ死んでしまうのなら、苦しまないように、いつそひと思いにコック
ピットを狙い撃つほうがまだ慈悲深い行いだといえるだろう。それ
もわかっている。だけど。それでも。

《電力チャージ完了。3射目です。Ready——Fire》「Fi
re」

3射目はコンテナに攻撃を加えようとしていた1機の右前腕部を
貫き攻撃能力を奪う。バランスを失つた敵機は、挙動を乱して軌道を
変えた。《命中》

そこへ輸送機と敵部隊がいる宙域に到達したエイミーが追い打ち
をかける。敵機はコックピットを射抜かれたようで、動きを止めたま
ま慣性に従つて宇宙を流れていった。

彼女は高い機体速度を維持したままその脇をすり抜け、すぐさま旋
回し、もう1機のポルタノヴァのコックピットへ向けて正確に射撃を
行う。まるで僕に見せつけるかのよう。一瞬火線が瞬くと2機目
も完全に動きを止めた。

彼女の舌打ちが聞こえた気がした。よけいな手間をかけさせるな
と。軍人だけあつて彼女の攻撃には一切の容赦がない。彼女はAI
による照準補正などのサポートは受けてはいない。僕なんかとは違
う、本物の実力だ。

残り1機。

眼前を動き回る幾何学模様のロックオンマークが、最後の敵機を

捉えるように追従する。シズクとホノカが人間では到底不可能な量の計算を行い、照準を絞り込む。照門を示すマーカーと、照星マーカーが重なりかけたその瞬間――。

《別方向から敵部隊接近！ β機、迎撃してください》

オペレーターの鋭い声が響くと同時に、周辺に動体反応を捉えた索敵システムが、電子音をまき散らして警告を発する。僕はトリガーから指を離して、報告された方向を振り仰ぐ。

敵増援。120度近く振り返った遙か宇宙の彼方に、大きな点が一つ現れ、それが4つに分裂した。先ほどと同型のポルタノヴァ宇宙仕様がさらに3機。もう一つは輸送用のキャリアか何かだろう。視界のなかで3つの点が徐々に大きくなってくる。

動体マーカーの横に記された敵機との相対距離は約2万km。このままの速度で襲来すれば到達予測は約3分後。僕はHUD上の数値を冷静に読み取る。この窮地でもパニックを起こさないでいられるのは、頼れる相棒たちがいるからだ。

「シズク、ホノカ。目標変更。増援の敵機を迎え撃つ」

《イエス。マスター》僕の指示に、シズクとホノカが増援機を捉えるのに最適な位置へと移動を開始する。

レールガンは1発撃つのに40秒かかる。3分間で最大4発。けれど敵は接近しているのだから、近づかれるまでに3発も撃てればいいところだ。

3機の武装を破壊して無力化できたとしても、船を危険にさらしてしまう。敵が予備兵装を持っていたとしたらアウトだ。僕一人の力では太刀打ちできない。エイミーが、輸送機側の残り1機をしとめて、こちらに向かってきても迎撃には間に合わないだろう。

この船は戦争を終わらせる要だ。絶対に落とさせないわけにはいかない。確実に足を止めさせる必要がある。なら、残る手段は。

僕を生かすためにバイロン軍に殺されたアマギ隊長とサニー・バニーの二人を想う。これまで自責の念は覚えても、復讐心は芽生えなかった。もちろん接近中の敵が殺したわけではない。けれど、彼らバイロン軍が地球に来なかつたらアマギ隊長とサニー・バニーは死なず

にすんだ。

いつそのこと、バイロン人が僕らと同じヒト型ではなく、気持ち悪い異形の宇宙人だったなら、迷うことなく引き金を引けたのに。

「撃つしかないのか」

コックピットを。自然と呼吸が荒くなる。

ターゲットマークを睨みつつも焦燥感に駆られ、僕は思わず

「チツ^{t u t}」と舌を鳴らしていた。

第23話 半可臭え話（半覚醒の話）

《Raedy Fire》「Fire」

自立型支援機であるシズクの指示に従って僕はトリガーを引くと、レールガンから放たれた弾頭が、淡い光のプラズマの尾を引いて漆黒の宇宙の彼方へと消えていく。

ここからだと、まだ点にしか見えない相對距離2万kmほども離れた先にいるポルタノヴァ宇宙仕様機に向かって。

《命中^{hit}》とシズクが報告する前に、僕には弾丸が敵に命中したのがわかっていた。

命中したと思った瞬間、高質量のガラスの固まりを粉々に砕いた感覚がした。硬いような、柔らかいような、それでいて粘土のように柔軟なのに、砂のように脆く、ボロツというか、ザラツというか。石や岩を砕く感覚とは違う。

とにかく、口では上手く言い表せないその質感の悪さに悪寒が走る。気色の悪さに吐き気さえ覚える。

なぜなのかはわからない。けれど、それが何を意味するかは確信をもってわかる。それはポルタノヴァ宇宙仕様機に搭乗しているパイロットの命が失われた感触だ。搭乗者が失われた敵機は、回避ベクトルを保ったまま固まったように宇宙を流れていった。

敵の増援に対して、僕はシズクとホノカの2機のAIが合わせてくれる照準目標を、敵機のコックピットに変更していた。

殺したくはなかった。けれど、こうしなければ、僕の背後にある船が沈む。そうなれば、僕が大切に想う人たちの命が失われるんだ。仕方がないじゃないか。べつとりとした汗が頬を伝う。あと2機。あと2回。

《マスター。原因不明の血圧低下および心拍数低下異常を検知しました。大丈夫ですか》

バイタルモニタリングも務めるシズクが、僕の身体の異変を検知して無機的な合成音声で尋ねてくる。

「問題ない。次の目標を」と硬直気味の喉をなんとか震わせて答え、先

ほどより距離を詰められ眼前に少しだけ大きく映った敵機へ向けて、次弾の発射を促す。

《チャージ完了。Raedy Fire》「Fire」

2射目のレールガンも、回避しようとした敵機の中央に吸い込まれるように消えた。

まただ。当たったと思われる瞬間、相手の存在そのものを粉々に砕いたような感覚に襲われ、その不快感に宇宙服を脱いで全身をかきむしりたくなる。コックピットを開いて外に飛び出したくなる。

2射目は敵機のコックピットごと胴部を貫通し、背面に背負ったバックパックを損傷させたようだ。漏れ出した推進剤が噴出して、空気が抜けた風船のように無軌道に宇宙をのたうち回った後、強烈な光を伴って弾けた。

冷たい汗が止まらない。声は震えてまともに出せない。操縦桿を握る手は震えていた。人を殺した時にはこんな感覚になるのか。殺したことがないのだから、わかるはずがない。肩で息をつくくと、狭くなった気道を空気が通る音が勝手に鳴る。あと1機。

敵機との相対距離は、すでに5,000kmほどまで詰め寄られていた。ここまで接近されると、大気がない宇宙では対象のディテールがハッキリと捉えられる。

髑髏どくろの仮面をつけたようなポルタノヴァ頭部の中央に備わる単眼が僕を刺し貫くように睨む。足長のゴリラを思わせる奇妙な体躯をしたポルタノヴァが、背面からスラスターの噴出炎を断続的に吐き出しながら空間を跳ね飛び回り、みるみる間に迫ってくる。

HUD上では、敵機の激しい回避機動を捉えるべくターゲットマーカーが眼前を点滅しながら縦横無尽に動き回る。それに合わせてレールガンの砲口も微動する。距離計に表示される数値は見る見る間に小さくなっていく。

次で最後。あと1度苦しめば、この不快感から解放される。

《チャージ完了。Raedy》

照門と照星の動きが収束する。マーカーがロックオンを示す電子音が断続音から連続音に変わると、点滅していたマーカーが敵機に重

なつて赤く染まる。

《Fire》「Fire」僕は震える指でトリガーを引く。

しかし、僕の耳に届いたのは聞き慣れた発射音ではなかった。視界に映る長大なレールガンの砲身の先端部が大きく歪み弾けた。轟音と衝撃がコックピットに響いた。それに続いてアラームが鳴る。

弾丸は発射されていない。過剰な連続使用による熱でレールガンの砲身が熱で歪んだようだ。レールが歪めば加速体との摩擦でさらに高熱が発生する。それによって、発生最高速度に達する先端付近で弾体もろとも砲身が溶解したらしい。

僕は「チツ^{tut}」と悪態をつく。これで一撃必殺のレールガンは使えなくなつた。HUD上には武器管制システムのエラーとともに、移動体の接近を告げるアラートが重なりあつて不協和音のように鳴り響く。

こちらのトラブルを確認した敵機は、ここぞとばかりに攻勢に移る。減速しながらも依然として高い速度を保つたまま、敵機はこちらに突進しながら右腕のビームキャノンを構えて的を絞る。照準は僕ではなく後方にある宇宙船。虚空に浮かぶ鯨のような巨体は格好的だ。

護衛対象である宇宙船には迎撃装備の類は搭載されていない。それに、あれだけの大質量体では、どれだけの推力を費やしたとしても回避は間に合わない。もう1機の護衛機であるエイミーの援護も間に合わないだろう。絶体絶命。けれど、絶対撃たせまいと意志を固め、吐き気を堪えて僕は機体を操る。

使用不能になつたレールガンを捨て去り、両脚部にマウントした二丁の専用マシンガン 에스ポジットにグリップさせるなり乱射した。炸薬ではなく、電磁誘導で加速された無数の小径弾丸が宇宙空間にばらまかれる。

このパルスマシンガンの威力はそれほど高くない。けれど牽制には十分だ。執拗な攻撃で敵の意識を僕の方に向かせるべく、ただただトリガーを引き続ける。

敵機は先ほどよりも小刻みな機動で宙を跳ね回る。ただばらまかれただけの弾幕をひとしきり回避すると、その砲口を宇宙船ではなく

こちらに向けた。しめた、と思ったと同時に、いつ撃たれるかもしれない恐怖に背筋がゾクゾクとする。

敵機が右腕に構えるビームキャノンの先端に光が灯る。とつさにスロットルレバーを強引に押し込むと、殴られたような衝撃を伴って機体が右へ振られる。身体が左側へ持つて行かれる血液も左に偏る。左半身左目に血液が集まり視界がうつすらと赤く染まる。

刹那遅れて、まばゆいばかりの閃光が機体の左脇をかすめた。撃たれた。けれど、まだ僕は生きている。大きく息を吐き出し一瞬安堵するも、すぐに恐怖で膝が、肩が、全身がガタガタと震え出す。

狙いをこちらに向けさせることには成功したけれど、動かないや殺されるだけだ。僕はエスポジットを飛行形態に変形させ、震えてまともにならない左腕を強引に操ってスロットルレバーを押し込んだ。

推力方向が統一された飛行形態のエスポジットは、先ほどの回避よりも強烈な加速で僕の身体をシートに押しつける。壁に叩きつけられたかのような加速Gに肺の空気が強制的に吐き出されるが、生命維持装置の強制呼吸器は酸素を肺へと無理やり押し込んだ。

加速しながら機首を持ち上げ、円弧を描いて敵機背後に回り込むように機動させると、円心加速度が発生して今度はシートとの座面へ身体が押しつけられる。頭を流れていた血液が一気に下へ落ちるが、宇宙服の耐G機能が働き、脚部が痛いほどにきつく締め上げられ、血液の移動を妨げた。それでも血が回らなくなった頭は機能低下を起こし、思考がぼんやりとしてくる。

後方で光が瞬く。外れはしたものの、またビームが放たれた。身体が重い。内蔵が重い。心臓が壊れたように脈を打つ。息が苦しい。頭が働かない。視界が暗くなる。けれど加速を弱めれば、その瞬間に撃墜され――

いけない、一瞬だけ意識を失っていた。あわてて機首を強引に持ち上げるとさらに強い慣性重力が加わる。取り戻した意識を再び失いそうになる。その手前のギリギリを維持してなんとか敵の

後背位置を狙う。

「シズク、ホノカ、射撃、補正！」

朦朧とする意識のなかで、重くて上手く動かない口元周りの筋肉と舌を必死に動かし、僕は叫ぶ。たったこれだけの指示だけで彼女らが認識してくれるかどうかからなかった。けれど、それが今、僕が口に出せる精一杯の言葉だった。

体重が数倍になったように感じられるほどの強烈な垂直Gに耐えながら軌道を維持し続ける。敵機がHUDの正面近くに映る。それをターゲットマークが捉えるとすぐさまトリガーを引く。

パルスマシンガンから再び弾丸がまき散らされる。速射性を高めるために片側に二門づつ備わった電磁加速機が交互に弾丸を吐き出し、その何発かが目標に命中した。敵機は連続する着弾の衝撃で姿勢を崩す。

その隙に、エスポジットを射撃安定性に優れる人型に戻して、さらに追撃を行う。無数の弾丸に叩かれ、敵機の装甲が徐々に歪んでいく。叫んでいた。恐怖からか。興奮からか。どれだけの時間が経っていたのかはわからない。無我夢中だった。とにかく敵機に向かってトリガーを引き続けていた。

《アムロ・レイ》とシズクに呼ばれるまで。

《敵機反応ありません》と告げられるまで。

《すでに戦闘は終了しています》と報じられるまで。

我に返ると、トリガーはすでに反応していなかった。弾丸はすべて撃ち尽くし、計器上の残弾表示はゼロになっていた。僕の手はトリガーごと操縦桿を握りしめたまま硬直していた。敵機は完全なる鉄屑に変わっていた。そして、再びあの不快感が押し寄せてきた。

えずいても、えずいても、嘔吐感は消えない。冷たい汗が毛穴という毛穴から溢れ出し、寒気を覚える。下半身はひどく湿っていた。耳からも何か出ている。鼻からでていのは鼻水じゃなく、髄液じゃないだろうか。身体中の穴という穴から出るものがすべて出ているようだった。

涙が出るのは嘔吐のせいだけじゃない。安堵のせいでもない。さ

らされ続けた重力加速度による眼球への負担のせいでもない。

これは、切なさ・寂しさ・侘びしさ？ 恐怖・無念・絶望？ 怨恨・怨念・復讐・憤怒？ 僕のものだけじゃない、あらゆる負の感情がこみ上げてくる。

それに加えて千葉の生家が頭に思い浮かぶ。沖縄にある母の実家が思い浮かぶ。父が、母が、妹たちが。祖父が、祖母が。青い海が、白い砂浜が。それに想起されて炎天下の砂漠も思い出された。アマギ隊長が、サニー・バニーが。

これは郷愁？ 哀愁？ 変だ。急にホームシックに陥るだなんて。それだけじゃない。ふたつの月が昇る紫色の夜空を、まばゆいばかりに埋め尽くす色とりどりの星屑。見たこともない景色と皮膚が黒い知らない人々の顔とが鮮明に頭のなかに思い浮かぶ。

これは以前、イノウエ専務に聞かされたバイロン星の特徴と一致する。そこで僕は、ありえないと思いつつも察知する。敵パイロットと死ぬ間際の恐怖と想いが、僕の記憶を想起し、それらが一緒くたになつて感情の波となつて押し寄せてくるのだと。

泣けてくる。理由を問われても答えられない。あらゆる感情がとめどなくわき上がって、抑えがきかなくなっている。

「艦橋。ぐめんなさい。少しだけ時間をください」

僕はかろうじて残った羞恥心と理性心に従つて通信機に言い放つと、嗚咽が漏れないように通信機のスイッチをすべてオフにする。

それにより自製の籠たがが外れ、あとは堰せきを切つたように泣いた。泣いた。泣いた。とにかく泣き続けた。

ようやく落ち着きを取り戻したころ、声が聞こえた。

イノウエ専務に似た声だった気がする。通信じゃなく、もつと直接的な響きで。まるで、すぐ側にいるような。度重なる身体の異変に、頭がおかしくなりそうで、再び泣き出したくなる。

《レイ》

まただ。また声が聞こえた。それは幻聴ではなく接触回線による強制通信だった。直後、カメラモニターに人影が映り、驚いた僕は身

を硬くする。ここは宇宙空間だ。船からの距離もかなり離れている。人間が単身で存在できる場所じゃない。

まさか幽霊？　と思っただけれど宇宙に幽霊など出るのだろうか。宇宙服を着たその得体の知れない人影は、エグザマクスの頭部カメラの前でこちらに向かって手を振る。そして次にゴン、ゴンと装甲板を叩く。

《レイ、わたくしです。コックピットを開けてください》

本当に専務なのか。言われるがままにコックピットハッチを開くと、宇宙服の人物は手馴れた動きでコックピットに滑り込んできた。ハッチの縁をつかみ、身体を丸めつつ横向きになって宙を漂ってきた宇宙服の人物を、僕はお姫様だっこをする形で受け止める。

突然の訪問者は、両手を伸ばして僕の首に手をかけると僕の顔をのぞき込む。もちろん、こちらにも訪問者の顔が見える。透明なヘルメットのバイザーから覗くのは、粉うことなくイノウエ専務の顔だった。

「お久しぶりです。ご機嫌はいかがですか、レイ？　うふ」

接触したヘルメットが振動を伝え、その内部に充満した空気を通して、ややくぐもった専務の声が僕の耳まで伝わった。これは、ただの挨拶なのか、それともただ様子を尋ねているのか。専務のことだから両方だろうな。どうせ、わかつているんでしょう。

「最悪ですよ」と僕は答える。専務が現れた驚愕と安心で、皮肉を返せるくらいには回復していた。「それより、なぜここに？」

「我々が最終輸送便で船に向かう旨は、事前に通達していたはずですが」

「そうじゃなくて。なんで船から離れた位置ここにいるのか、という質問です」

「もちろん、あなたが泣いていましたので。あ、宇宙を泳いで来ました」

専務は、いつものいたずらっ子のような笑みでバイザー越しに僕の顔をのぞき込む。僕は泣きじゃくったひどい顔を見られたくなくて、思わず顔を背ける。

「思ったより早く目覚めましたね。人の感情や記憶にないイメージが頭に入ってくるのでしょうか。殺した相手の。それがいわば生物に備わる本来の能力です。もっとも今のあなたは覚醒初期段階といったところですが」

模擬戦のときに専務が言っていた、例のニュータイプのアレのとか。あのときは話半分聞いていたけれど、さすがに自身で体感すると信憑性が増す。けれども気分が回復するにしたがって、その実感は乏しくなってくる。「はあ」と僕は相づちを打つ。

「宇宙空間の極低重力環境は人間の身体の一部機能をリセットさせます。とくにカルシウムの流出は、骨や筋肉の密度を低下させるのと同じ時に、石灰化した体細胞の復活も促します」

そう言うのと、専務は自分のヘルメットを指さし、眉間部分をコンコンと叩いて話を続ける。

「松果体とは、人間の脳のほぼ中央部に備わる器官。バイロン語では『ピスケル』と言い、地球と同様に『魂の在処』や『第三の目』と捉えられています。これを説いたのはルネ・デカルトさんでしたか。地球人にしては、じつによい着眼点です。おそらく彼も覚醒しかけていたのではないのでしょうか。」

ピスケルは感受性の源です。宇宙は石灰化して機能低下した松果体を活性化させてくれます。もちろん誰でも、というわけではありません。年齢や石灰化の度合いにもよります。あなたが人一倍感受性が強く、こうも早く半覚醒状態にまで至ったのは、松果体の石灰化があまり進行していなかったことも一因です。

わたくしの見立てどおり、あなたは筋が良さそうです。今は劇的な変化に戸惑っていると思いますが、ゆくゆくはテレパシーで生物との思考伝達ができるようになるでしょう。わたくしと頭の中でお話もできるようになりますわよ。嬉しいでしょうか?」

専務はそういういつも、こちらへの配慮なしにヘルメットの奥で屈託のない笑みを浮かべる。嬉しくはないけれど、戸惑っているのは確かだ。それに、専務のように強くなったわけではない。劇的に辛く、ただただ苦しいだけだ。「はあ」と僕は再び相づちを打つ。

「とはいえ、これはいわば共感能力や洞察力の延長。単なる感受性の拡大です。ただなんとなく見えるだけ。ただなんとなく聞こえるだけ。ただなんとなく知れるだけ。要するに、高確立で当たる勘のようなものです。それだけのことで、当たり前のごとで、特別なことは一切ありません。

超能力のようなものと誤解されては困ります。そもそも、イメージから得た情報を体現するだけの知識と身体的能力がなければ何の意味もありません。

わたくしがバイロン星のことを教えなければ、あなたは受け取ったイメージが何であるかを認識することすらできなかったでしょう。根本的な概念を知らなければ、それが何を意味するのか知らずに、精神疾患のようにただ苦しむだけです。

相手の嘘が分かる気がする。人の感情が見える気がする。死を迎える相手が発する強烈な感情を感じるような気がする。あなたはおとなしい性格ですから、それらを上手く受け流すなんて器用な真似はできないでしょう。けれど、そういう性格でなければ感受性は育ちません。

なにも知らなければ、頭の中へ無制限かつ無遠慮に入ってくる負の感情に飲み込まれて——あるいは、それに耐えられずに——「感受や洞察を用いずとも、僕には専務が言わんとすることがわかった。

「僕は、これからどうなるのですか」僕は空恐ろしくなり、思わず専務に尋ねる。

「そうですね——HSP。『Highly Sensitive Person』をご存じですか？ いわば不安神経症の方を指す言葉ですが、一時的にはあれの数倍ひどい状態に陥ると思われまます。これから辛い思いをすると予想されますが安心なさい。わたくしが力になります。イメージの受信と発信のコントロール方法を、手取り足取り教えて差し上げますよ。

情報空間上で自己の意識と他の意識を正しく分別することが、この能力を巧く使いこなすコツです。空間認識能力というものも同様に、

自己と他の位置を3次元空間上で正しく識別できる能力です。これはエグザマクスの操縦にも通じることでしょう。多少は操縦に良い影響を与えるはずですよ。

まあ、あせらずとも、これからしばらく一緒にいられるのですから、少しづつモノにしていきましょう」

突拍子もない専務の発言に、僕は「はあ」と三度、適当な相づちを返した後「これも、専務の狙いですか？」と言葉を返す。

「さあ？ どうでしょう。うふ」

専務は無垢な少女のように屈託のない笑顔で答える。

「では、船に戻りましょう。みなさんが心配しています。今のあなたにならわかるでしょう。感じませんか。みなさんの存在と気持ちが。

共に宇宙に来たアーニヤさんとジェイク氏は、あなたが一人で戦っているのを見て、わたくしの制止を無視して飛び出して行きそうな剣幕でしたよ。早く戻って安心させてあげてください」

僕は眼前にいる専務の顔を見やる。彼方に浮かぶ地球のように、青く透き通った専務の瞳からは笑みが失われていた。専務は僕の目を真つすぐに見返し、やや神秘的な声で言葉を発する。

「それと、大切な船を守ってくれてありがとうございます。レイのおかげで、無事にバイロン星へと出航できそうです」

宇宙船の完成。そして最終便の到着。これですべての準備が整った。

このラグランジュ2で組み立てられた、あの宇宙船が地球の切り札だと専務は言う。バイロン軍に占拠された月面を取り戻すわけじゃない。バイロン軍の強襲要塞を宇宙から攻略するわけでもない。専務の話によれば、今地球に来ているバイロン軍は斥候部隊で、その数倍の戦力を有する主力本隊はまだバイロン星にいるらしい。

だから、空間転移機能を備えるこの宇宙船で、専務と僕らはこれから26光年離れたバイロン星に直接乗り込んで、戦争を止めるために和平交渉をしに行くんだってさ。まったく、専務にしか思いつかない、専務にしかできない頭のぶっ飛んだ計画だ。

けれど戦争を止めるための、現状でもっとも有力な一手といえるだ

ろう。
本当に空間転移なんてできるのか、現状ではまだ疑わしいけれど。

最終話 ハイっ！ こちらサイラス私設備兵部隊（出航）

専務の故郷であるバイロン星は、そう遠くない未来に滅ぶ運命にあるらしい。

バイロン星はふたつの月の引力の影響で元来惑星のマスバランスが悪く、専務の遠い遠い祖先は、崩れたマスバランスをエネルギーに転換し、自転速度を一定に保つことで繁栄してきたそう。

けれどそれも限界を迎え、バイロン星はそう遠くない未来に自転が止まる。少なくとも数百年以内にはヒト型生命体が住める星ではなくなるそう。

避けられない星の寿命。そこでバイロン星人たちが目を付けたのが、自分たちとよく似た生態系をもつ僕らの地球だった。

地球との穏和な共生を望んだ専務たちが属する派閥は、地球を侵略支配しようとする派閥に滅ぼされた。現在、地球侵略作戦を行っているバイロン軍は、バイロン星での政権を勝ち取った侵略派閥だった。そして、その数倍の戦力を有する主力本隊はまだバイロン星において、次の侵略時期をうかがっているらしい。

空間転移装置で大部隊にもおよぶ質量を地球に送り込むには、エネルギーが蓄積するまでに10年ほどの年月がかかる。つまり、次にバイロン軍本隊が地球に来るのもおよそ10年後だ。ただし、今回のバイロン軍の侵攻はイノウエ専務の予測より数年早かったらしい。正確な予測は不可能だとのことだ。

均衡状態の戦況の今、イレギュラーなタイミングで仮にバイロン軍の本隊が到着すれば、圧倒的な物量をもって侵略され、地球人類の歴史は終焉を迎えるだろう。そして、地球は第二のバイロン星になってしまう。

だから僕らは先手を打つ。そのために僕らは専務に集められた。

バイロン星での抗争のさなか、一人、空間転移で地球に逃がされたセイラム・バイロン姫ことセーラ・イノウエ専務は、かつてバイロン

星を続べた国家の要人であり、地球との共生を望んだ穏健派の生き残りだ。

両親や家族は、すでに戦犯として殺されているそうだ。それでも侵略派閥に対して復讐は望まず、それどころか一度は仲違いした対立派閥であってもバイロンの王族の血を引く者として、滅び行くバイロンの人民を救いたいと言っていた。そして自身が10年を過ごした地球も一緒に。

だから専務と僕らは宇宙船に乗って、地球から26光年離れたこと座にあるバイロン星へ向かう。この戦争を止めるために。バイロンの現政権と停戦協定を結ぶために。

僕ら地球人からすれば、この方法は全面戦争以外でバイロン軍の侵略から地球を守る唯一の方法だ。専務からすれば、生まれ故郷のバイロン星と、10年を過ごした地球の両方を救える方法となる。両者の望みが合致した結果、僕らは集まったのだ。

とはいえ現在の地球に、26光年もの遠方まで宇宙を航行する技術はない。またそんな時間もない。バイロン星では宇宙航行技術水準はそれほど高くないらしく、さすがの専務でも高度な宇宙船を設計する知識はほとんど持っていないそうだ。そのかわりバイロンではスカイフォール、つまり空間転移技術が発達している。そして、この宇宙船にはの内部には専務が再現した空間転移機関が搭載されていた。

地球の航空宇宙技術と、何光年もの距離を一瞬で移動できる異星の技術を掛け合わせてつくられたのがこの宇宙船だ。もちろん船には空間転移装置を往復で使うぶんのエネルギーが蓄積されている。うまく行けば、ほんの数週間程度の宇宙の旅だと専務は言っていた。

そんなにもまく行くものだろうか。道中のトラブルで帰ってこれなくなる恐れもある。また、宇宙のど真ん中で遭難する可能性だってある。確かに不安はある。それでも地球を救いたいという思いを胸に、僕らは前人未踏の空間転移による惑星間航行を慣行しようとしている。

とはいえ、もつとも専務に近い立場にいる僕だって、いまだすべて

を納得した訳じゃない。すべてを飲み込めた訳じゃない。ほかのメンバーはなおさらだろう。

この現実を真正面から捉えちゃいけない。まともに考えれば頭がおかしくなる。身動きがとれなくなる。だから僕は考えるのをやめた。ただ専務を信じることにした。

これは賭だ。僕らは専務を信じ、専務に地球の運命を賭けた。そのために僕らは専務に協力する。

「ご周知のとおり、以上がミッションプランです。みなさま、危険を省みず、わたくしとともにバイロン星へご同行いただき感謝を申し上げます。」

これは地球連合の意向とも一切関係がなく、弊社のもくろみでもありません。すべてわたくし個人の事情です。

今のわたくしは地球連合大使でも、サイラスの専務理事セーラ・イノウエでも、バイロンの美しき姫であるセイラム・バイロンでもありません。ここにいるのは、みなさまと同じく地球を愛し、故郷であるバイロンも愛する、ただ平和を願う麗しき一人の乙女です。わたくしは地球とバイロンの共生共存を望んでおります。

みなさまと巡り会えなければ、わたくしの願いは潰えていたことでしょう。賛同してくださったことに、重ねて心よりの御礼を申し上げます」

イノウエ専務は、艦橋に集まった僕らに向かって銀髪の頭を垂れる。宇宙船の居住区画以外は当然ながら無重力だ。ワックスで固めたまっすぐな銀髪がまとまりを保ったまま空気の抵抗をうけてゆるやかに弧を描きながら広がった。

「なに、こんな身体でも地球の役に立てるのなら本望さ。それに、別の星に行けるといふ貴重な機会など滅多にあるものではない。^{in short}要するにこれは冒険だよ。ミス・イノウエ」

かつて、僕らサイラス私設傭兵部隊と対立関係にあったアメリカ第9海外派遣中隊のリーダーであるウイリアム・D・ホープこと、シヨートホープが屈託のない笑みを浮かべて専務に答える。

彼には左腕がなかった。左足は義足に変わっている。以前に写真で見た端正な顔の左目は潰れ、跡には痛々しい傷が残っていた。それは中東におけるバイロン軍との邂逅の際、アマギ隊長と共闘で敵の追撃を抑え、僕らを逃がした際に負った傷だった。

艦橋へ入室する前、戦場でもエグザマクスごしでもなく、僕は彼と初めて顔を直接合わせた。そして彼は僕に合うなり謝罪をした。アマギ隊長を助けられなかったことを。深手を負いながらも自分だけが生き残ってしまったことを。

ただ、アマギ隊長が死んだところは見ていないとも付け加えられた。僕への慰めのつもりだろうか。

彼はバイロン星への遠征における戦闘指揮官として専務によって直々に雇用された。エグザマクスでの戦闘をよく知り、アメリカ第9海外派遣中隊を率いていた彼は、リーダーとして最適な人材であることを僕はもちろん、ここにいる誰もがよく知っている。

「もちろん地球も大切だけれど、私はリーダーが行くところになら、どこへでもついていきますッ」

その脇には、ショートホープの不自由な身体を支えるように、ナイズのNo. 3であったダブルロック・エイミーが寄り添っている。僕への扱いとずいぶん違うじゃないか。今のエイミーは、まるで別人ともいえるほどに、いつもの棘々^{ツツン}した様子はない。

きつとエイミーはショートホープのことが好きなのだろう。当のショートホープの方は、あくまで部下として接しているようだけれど。専務のことだから、ショートホープを引き入れることで、もれなくエイミーも付属すると踏んでの人選だとも考えられる。専務のことだから、他人の恋愛感情をも利用することに躊躇はしないはずだ。

さらにその隣には、同じくナイズのNo. 2であったアロン・シャルマもいた。専務とよく似た浅黒い肌で黒髪をオールバックにした彼は、傭兵民族として名高いグルカ族の戦士であり、優れたエグザマクスのパイロットでもある。

敵同士でありながらサイラス私設傭兵部隊のアーニヤに惚れ、結婚を申し込んでいる。専務はアーニヤを利用してシャルマを引き入れ

たのかもしれない。肝心のアーニヤには、一切結婚する気はないようだけれど。シャルマは堂々とした口振りで迷いなく言い放つ。
「アーニヤ・リーズヴィエが行くなら、俺は宇宙の果てまででも追いかける」

アロン・シャルマの並々ならぬ決意ストーリーカー宣言の言葉に、艦橋にいた全員が嫌悪嫌悪の眼差し引きすすを向ける。男と女じや似たような台詞でも、こうまでリアクションが違うのか。その隣には当の本人であるアーニヤがいた。シャルマが呼ぶ『アーニヤ刃・リーズヴィエニア』とは、ナイフ使いの傭兵としての彼女の通り名だ。

「それはともかく。アタシとジェイクは、まあ、なんていうか継続雇用つてやつさ。なあ」とシャルマを避けるように、当アーニヤはその隣にいたジェイクに同意を求める。ジェイクはいつも通り無言でうなずくだけだ。

「それより、レイ。アンタこそ、よく行く気になったね」

「それは僕だつて一応、サイラス私設傭兵部隊の一員だし――」
とは言つてみたものの、実のところは専務に強要されて。とは言えない。

「怖いのは確かだけれど、地球の平和を守りたいって気持ちだつてあるさ。それに――隊長とサニーに顔向けできるように」

「アンタは、まだそんなことを気にしているのかい」
アーニヤがあきれたように言う。隣にいたジェイクが、よく言ったと言わんばかりに無言で僕の頭をグシャグシャにかき回す。

「さすが。英雄君は言うことが違うな」と、そこへショートホープが笑いながら茶々を入れる。

もちろん、ここにいるメンバーを含めた宇宙船のクルー全員は、僕が本当の英雄ではないことを知っている。逆を言えばこの船だけが、僕が『名ばかりの英雄アムロ・レイ』ではなく、ありのままの僕でいられる地球圏で唯一の場所なのだ。

同じく事情を知り、サイラス私設傭兵部隊として共に中東で戦ったメカニツクの川崎重工カワサキシゲノリさんと、料理長の王・泰然ワン・タイランは残念だけれど船には乗っていない。

カワサキさんは自身の家族のために地球に残った。極度の飛行機嫌いである王・泰然は宇宙もNGだ。二人とも今は地球のどこかで、前線の兵士を助ける裏方として活躍しているに違いない。

火器の扱いに秀でたサイラスのメカニックである後輩の下条ハルトは、3カ月前から僕と一緒に宇宙へ上がっている。今は、先の戦闘で破損させてしまった僕のエスポジットβと修理と、船の発進に際する工廠の準備で忙しく、この場所にいないだけだ。

彼が今ここにいれば「戦争を止めて、俺も英雄としてモテモテになるツスから、がんばるツス！」と息巻いていたことだろう。

艦橋の中央に立つ専務はニコニコと微笑を浮かべたまま、そんな僕らのやりとりを眺めている。艦橋にいる二人の通信士と、操舵士の二人も今は作業の手を止め、柔和な笑顔で僕らの会話に聞き入っていた。

戦闘要員だけでなく、宇宙船のクルーも専務が直々に集めた人員で構成されている。メカニックのほとんどはサイラスとその関係会社から選抜されたけれど、戦闘員をはじめとするその他の人員はショートホープたちのように連合に加盟する国からも引き抜かれている。

クルーの選考基準は、能力の高さはもちろんだけれど、それよりも優先されるのは信用に足る人物にであるかどうかだ。

専務が、地球と敵対するバイロン星の人間であると知れば、猜疑心や敵対心を持つ者も少なからず出る。専務はサイラスの専務理事という立場と、連合大使としての地位を利用し、以前から有事の際にでも信頼できる協力者を見繕っていた。結局のところ、僕もそのなかの一人なのだ。

一般常識的には、その人間が本当に信用できるかどうかを判断するのは非常に難しい。とくに精神的、肉体的に極限状態に追い込まれがちな宇宙の航行では、クルーの錯乱や裏切り展開が映画であつたらなおきまりパターンだ。

けれど、その辺の感情や適正の分別は専務お得意の読心術みたいなので見極められるらしく、専務が信頼できると判断された人員だけがクルーとして集められた。この30名あまりで構成された人員で宇

宙船を動かし、僕らは一路バイロン星を目指す。

命の保証などない危険な任務だ。最悪、地球に帰ってこれない恐れもある。クルー全員は事前に誓約書にサインをし、遺書を書いてあった。もちろん僕もだ。

僕が宇宙へ上がる直前、その旨を千葉の家族に説明した際には母に泣かれた。父には怒られた。いつも僕を小馬鹿に扱う妹たちでさえ、今生の別れのような雰囲気醸しだしていた。

快活な穂香ほのかはともかく、おとなしい性格の雫しずくの方は、しばらく口も聞いてくれなかった。その場には挨拶としてイノウエ専務も一緒にいたから、なんだか家族からは誤解されているような節はあったけれど。

「ウイリアム・ホープ隊長旗下の戦闘要員のみなさまには、わたくしの護衛を努めていただきます。それと、一応の副隊長はレイで。いいですね」

アーニャとジェイクは、どうでもいいと言わんばかりに軽くうなずく。

「よし。期待しているぞ、参謀君」

ショートホープは心得たと笑う。エイミーには睨まれる。シャルマは、やや困惑した様子だ。僕に副隊長は務まらないと言いたいんだろう。そんなのは僕自身が一番分かっているよ。

こうして同士として集まっても、かつて敵であったナインズとサイラス私設傭兵部隊のわだかまりが解消されたわけではない。すでに両陣営に顔が知れている僕は、橋渡し役として最適だからという理由で、事前に専務から副隊長役を承諾させられていた。

能力が伴わない立場で、メンバーからのプレッシャー。まさに中間管理職の板挟み。これじゃ、中東にいたときとなにも変わらないじゃないか。なんでいつもこうなるんだか。

「まあ、彼はコミュニケーション上のパイプ役のようなものです。戦闘指揮はあくまでホープ隊長に全権をお任せします。彼はいわゆる遠足の班長のようなもの、ということでご納得いただけますでしょうか」

一応、専務はフォローとして面々に口添えをしてくれる。シャルマは渋々頷き、エイミーは不満を露わにしながらも承諾した。シヨートホープはなんともつまらなそうな顔をしている。

「問題なければ、そろそろ出発しましょうか。みなさま。ぜひこの機会に滅亡直前のバイロン星を心行くまでお楽しみくださいませ。うふ」

専務は、二つの星の運命を賭けたミッション開始を、これからピクニックにでも行くような軽い口振りで告げる。そこへシヨートホープが割り込んだ。

「待ちたまえ、ミス・イノウエ。肝心なことを忘れている」

「なんででしょうか？」

「この船には名前がついていない」

「船名？ 必要でしょうか??」

専務は青い目を見開き、シヨートホープの言うことがまったく全く理解できないといわんばかりの表情で彼を伺い見る。

「地球の文化では、縁起をかつぐために船出に際して名前と酒が必要なのさ。命を預けることになる船だ。名前がなくては始まらないだろう。では諸君。隊長としての最初の命令を下す。この船にふさわしい名前を一人ひとつずつ挙げたまえ」

「はいッ。隊長の名前を取って『ホープ・ダイヤモンド号』ですッ」と挙手をして先陣を切ったのはエイミーだ。

「縁起が悪いな。却下。次」と、しかしシヨートホープは無遠慮に断じる。

「『ヴィマーナ』とシャルマ。」

「サンスクリット叙事詩に登場する船の名前か？ 民族性にこだわります。却下。次」

「偉大なる『クイーン・エリザベス号』だ」とイギリス人のジエイク「以下同文。却下。次」

「ふん。名前なんていらないだろう」とはアーニャ。

「『No Name』？ もちろん却下だ。次」

「Space Ship of Earth
『宇宙船地球号』？」と僕。

「ありきたりでつまらん。却下」

新しい隊長の厳しい選考基準に、これには全員が不満顔だ。

「では『アマギ&サニー・バニー号』はどうでしょう」と専務が言った。「天城とは日本の険しい峠道での名称であり、日本には『天城越え』という楽曲もあります。聴いたことはありませんが。また『サニー』は太陽系を指し、『バニー』つまりウサギは繁栄を意味します。そしてなにより、そのふたつは、ご存じのとおりバイロン軍侵攻による最初の犠牲者の名前です」

提案したネーミングの由来を細かく説明しながら、専務は僕を見る。同時に艦橋内の空気が少し重くなるのを感じた。

「アマギ&サニー・バニー——サニー・バニー号。ふむ。繰り返し口にする、不思議と非常に良い名前に思えてくるな。ただし、ミスターアマギの名は外そう。僕には彼が死んだとどうしても思えないのだよ。——では諸君。船名はサニー・バニー号に決定するが、よろしいかな」

僕はアマギ隊長とサニー・バニーのことを思い出す。アマギ隊長は、ショートホープのように事を強引に進めるリーダーでない。安直に優しい人というわけではないけれど、いつも部隊全体の調和を重視し、それを保ち続け、僕らをとりまとめ続けてくれた。

いつも陽気なサニー・バニーは、サイラス私設備兵部隊のムードメーカーだった。そのニックネームの意味は『陽気なウサギちゃん』。対する本人は、その名前とは完全にミスマッチする屈強な黒人男性だ。僕はサニーの真つ黒な顔とニヤケ面から覗く真つ白い歯を思い出す。

この船の名前は『サニー・バニー号』でいい。いや、『サニー・バニー号』がいい。僕に一切の異論はない。

『バニー』は『騙されやすい間抜け』という意味もあるな。我々にピツタリかもしれない。もつとも、騙されたとしても自分がなすべきことを全力を尽くすだけだがね、ミス・イノウエ」

その揚げ足取りとも思える言葉とともに、ショートホープの瞳孔に一瞬だけ鋭い光が宿る。元バイロン軍の姫である専務に対しての皮

肉だろうか。ショートホープはこれでもエリート中のエリート軍人だけあって、飄々とした雰囲気の中にも、鋭利な気迫のようなものを持っている。その一言で場の空気が一瞬凍り付いた気がした。

とはいえ、相手にするのは異性の王族の出生で、いまは地球連合大使の肩書きをもつサイラスの専務理事だ。相手の雰囲気にも飲まれるような初心な対応は見せない。

「ご安心を。わたしはあなた方を心から信頼しています。ですから、どうかわたくしのことにも信頼してくださいませ」と、専務も落ち着き払った態度で返す。

専務は能力によって信用すべき人間が分かる。しかし、周りの人間はそうではない。専務が信頼に当たるかどうかを計るには、時間をかけて、やりとりを重ねて、ようやく判断する段階に至る。僕もそうだった。ショートホープの気持ちもわかる。それは仕方がないことだ。

けれど専務としては、態度で示すほかは「信頼しますから、信頼してください」という言葉が精一杯の誠意を込めた譲歩なのだ。けれども、「信頼してください」と伝えたところで実際に信頼するかどうかは相手任せにするしかない。人の感情が分かるぶん、専務にとってはどうかしいことだろう。そして、それだけ辛いことだろう。

けれど専務は、そういったことを口には出さない。彼女は決して弱音を吐かない。立場上、吐けないのかもしれない。それは王族のプライド故か。弱さをさらけ出すのも、譲歩のひとつ。信頼を得る手段なのに。

もつとも、僕には専務が弱音を吐くところなど想像できない。そんな彼女を哀れに思うと同時に、愛おしくも思う。もちろん専務に対してそんなことを僕が直接口にすれば、睨まれるだけでは済まないだろう。

このままニュータイプの異常感受性ともいえる能力が発達したら、僕も専務のようになるのだろうか。先に想いを馳せると憂鬱になる。こういうときは意識的に考えないようにしろと専務は言っていた。現在僕は能力を自分のものにするために、意識と思考のコント

ロール方法を専務から教わっている。

もし、人間が自分の思考を完全にコントロールできたなら、専務のような不遜にもなるか。専務が時折見せるぞんざいな態度や、サディスティックな態度を取る理由が分かった気がした。このままいけば、僕もあなつてしまうのだろうか。

ぼーっと専務の顔を見つめていると、目が合い、専務はニツコリと笑顔を返す。

「では、改めましてサニーバーニー号の出航と――」
「待ちたまえ。出発式典はまだ済んでいない。本来ならシャンパンを叩き割るところだが、宇宙空間ではそれが危険なことくらいは承知している。だから」

ショートホープはそう言うと、おもむろに懷から酒瓶を取り出す。そしてそのまま片手でコルクの栓に親指をかけて――。艦橋にいる全員がギョツとする。

おいおいおい、まさかここでシャンパンシャワーを始めるつもりか、と思つたとき、すでに子気味良い音を立ててシャンパンのコルク栓は開けられていた。琥珀色の粒が注ぎ口から一斉に噴出して艦橋を満たし、天井の照明を反射させて部屋中が黄金色にきらきらと輝く。そして爽やかかつ芳醇な香りが鼻孔の奥をくすぐる。

同時に、艦橋内は蜂の巣をつついた様相だ。誰のものだか分からない悲鳴やら怒声やらが飛び交い、艦橋内にいたメンバーの大半が右往左往する。

ようやく落ち着きを取り戻した艦橋では、ショートホープが一人高笑いを上げている。エイミーは苦笑で隊長の過ぎた行為を認め、シャルマはいつものことかといわんばかりにあきれ顔だ。

アーニヤは服に酒の臭いが付くと怒り狂い、ジエイクは漂うシャンパンの粒を口に含み味わっている。通信士と操舵士たちは機器のコンソールを守るためにシャンパンの粒を手で払う。払いきれないと判断し、ついには飲み込む有様だ。

ショートホープのこの行動には、思考が読めるはずの専務もさすがに驚いた様子で唾然としている。その顔が元に戻ると、専務の左頬が

ピクリと痙攣したのを僕は見逃さない。

専務に怒られ慣れている僕は知っている。左頬の痙攣は専務が怒る前のサインだ。ああもう、出航前だって言うのにショートホープはなんてことをしでかしてくれたんだ。誰だ。こんな奴を隊長にした奴は。

その隊長を指名した本人である専務は、顔をゆがめ、一旦うつむく。そして所々に濡れシミが付いたリクルートスーツに身を包む専務の全身がわなわなと小刻みに震え出す。

「くっ、くっつ——うふっ。あはははははははは」

専務は怒るのではなく笑った。

いつもの微笑ではなく、恥じらいも忘れたように、狂ったように専務は笑う。両手で口を押さえては、いひひと。額を押さえては、うふふと。顔を押しさえては、おほほと。

僕には、なにが面白かったのかサツパリわからない。けれど僕が初めて見る専務らしからぬ大爆笑だ。もしかしたら異星人は笑いのツボも地球人とは異なるのかもしれない。最終的には、おなかを押さえてヒューヒュー笑い転げ、専務の身体は無重力空間でくるくるとスピニング。

「——はあ、失礼。ホープ隊長。あなたは本当に読めない人ですね。だから選ばせていただいたのですが」

ひとしきり笑って、落ち着きを取り戻した専務は、マグネットシューズの磁力でしっかりと床に立つと、偶然目の前に漂っていた大粒の水泡をぱくりと口に含む。口の中で転がしたあと飲み込むと、今度は専務の左眉だけがピクリと動いた。

「実家のセラーから持ってきた15年ものだよ」ショートホープは悪びれた様子もなく答える。

「ふむ。確かに上物のようですね。それに免じてこの件は不問に処します。ただし今後、あまりに常識を逸した行動は謹んでください。隊長」

専務が背後にあったキャプテンシートのコンソールのスイッチを操作すると。強制換気装置が動作し、艦橋に漂っていたシャンパンの

水泡は天井の排気ダクトに吸い込まれてたちどころに消えてなくなる。

「ありがとう。僕のごことは気軽にショートホープと呼んでくれたまえ。ミス・イノウエ」

「ええ。では、わたくしのごこともセーラとお呼びください。とはいえ、長つたらしいのでこのままホープ隊長とお呼びさせていただきます。あなたを隊長として迎えられて本当に良かった。改めてよろしくお願ひいたします。ホープ隊長」

なんだろう。この空気の変化は。もちろん換気によつて空気が入れ替わったことを指すわけではない。シャンパンシヤワーの後、ブリッジの雰囲気明らかに変わった。なんとなく全体がまとまったような気がしなくもない。これまでであった、ちぐはぐしたような、よそよそしい感じがなくなったような。

僕は全員の顔を見渡す。表情は何ら変わらない。けれど全員の何かが変わった。なんとなくまとまりができ上がった気がする。たとえるなら、学校のクラス替え直後の雰囲気が大イベントの後に急にまとまり出すような。

一番変わったのは専務だろう。さつきよりも表情だけといわず、雰囲気も柔和になった気がする。僕が専務とショートホープ隊長の顔を交互に見比べていると、二人が同時にこちらを見て微笑みを返された。

ショートホープはこれを狙ってバカみたいなシャンパンシヤワーをしたのだろうか。団結心とはいわないまでも、チームがハプニングを迎えることで心理的距離感が縮まるような。そうだとしたら、ショートホープはリーダーとして、僕が想像する以上の傑物かもしれない。

「さて、これで準備はよろしいですね。総員加速配置につきましよう」
専務は再びキャブテンシート脇のコンソールを操作し、それから軽い咳払いで喉の調子を整え、さきほどまでとは違って毅然とした声を発する。よく通る専務の声が天井のスピーカーからも艦橋内に響きわたった。

「艦橋より艦内放送。総員各位。まもなく本艦は出航いたします。この船は、まず地球軌道に乗り、スイングバイを併用して第二宇宙速度まで加速。地球圏離脱後、バイロン星へ向けて空間転移を開始します。総員第一次加速に備えてください。」

それと、語弊はあるかもしれませんが、この船は一応我が社サイラス所有のものなので、みなさまのことは『サイラス私設傭兵部隊』と呼びさせていただきます」

艦橋にいた全員が一斉にうなづく。ショートホープが、エイミーが、シャルマが、アーニヤが、ジェイクが。通信士の二人と、操舵士の二人が。ハルトやメカニックを含むこの船に乗る全員がうなずいたことだろう。そして、僕も深くうなづく。

程なくして、専務の座るキャプテンシートに備わるモニターのグリーン表示が段階的に増えていく。それは館内各所の人員が加速の備えが整った合図だ。専務は艦橋にいる全員の顔を見渡し告げる。

「総員スタンバイ、オールグリーンを確認。」

さあ、行きましようか。サイラス私設傭兵部隊わたくしの信頼する者たちよ。サニーバニー号、バイロン星へ向けて発進です！」



「あ、くれぐれも申しておきますが、空間転移。つまり地球科学という量子テレポーテーションは、量子データを転移させますので、大変申し上げにくいのですが理論上、一度死ぬことになります。」

通常であれば転移先で身体と意識は完全に再構築されますが、もし身体の欠損などありましたらすぐにお知らせください。内蔵の欠損とかは、なかなか気づきづらいものですから。うふ」

（確認できるかー）と、声に出さずにツツコンだのは僕だけじゃなかっただろう。

了